

主要地方道成田安食線道路改良 事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

—成田市烏内遺跡—

1 9 8 5

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田安食線道路改良 事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

—成田市鳥内遺跡—

1 9 8 5

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県の北部に広がる下総台地は、先土器時代から歴史時代にいたる数多くの遺跡が所在するところとして知られています。

近年はその一画に新東京国際空港が開港され、周辺地域の整備が望まれているところです。このような状況のなかで千葉県土木部により計画されたのが主要地方道成田安食線です。

このため千葉県教育委員会では、道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部道路建設課をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、路線変更が困難であるため工事区域内に所在する遺跡について、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもと、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、昭和55年度から調査を計画的に実施しており、栄町に所在する9遺跡の調査報告についてではすでに、「主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財調査報告書」として報告したところです。

このたび、昭和58年度に実施しました、成田市に所在する鳥内遺跡の整理が終了し、その成果を「主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行する運びとなりました。

発掘調査では竪穴住居跡31軒をはじめ、縄文時代から近世にいたる多くの遺構と遺物が検出されました。これらの遺構や出土遺物は下総台地の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。

この報告書が、学術的な資料としてはもとより、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んでやみません。

最後に千葉県土木部、県成田土木事務所、千葉県教育委員会、成田市教育委員会の御協力、御指導に深く御礼申し上げるとともに、発掘調査及び整理作業に協力された多くの調査補助員の皆様に対して心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

凡　　例

1. 本書は、主要地方道成田安食線道路改良事業の実施に伴い調査した成田市鳥内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、下記の担当により昭和58年4月1日から同年9月30日まで実施した。
調査部長 白石竹雄 部長補佐 岡川宏道 班長 清藤一順 調査研究員 小林清隆
4. 整理作業は、下記の担当により昭和59年4月1日から同年9月30日まで実施した。
調査部長 鈴木道之助 部長補佐 楠本弘 班長 鈴木定明 調査研究員 小林清隆
5. 本書の執筆は小林が行ない、鈴木（定）が加筆・補正した。
6. 本書の編集は、鈴木（定）、小林が担当した。
7. 遺跡コードは、211（市町村コード）、028（遺跡コード）とした。
8. 本書に使用している図面の方針は、すべて座標化を指している。
9. 本書に使用した地形図は、以下のとおりである。

第1図 国土地理院著作発行

1 : 50,000 成田 (NI-54-19-10)

1 : 50,000 佐原 (NI-54-19-9)

第2図 成田市発行成田市都市計画図

1 : 2,500 №24・25を再トレスして使用

10. 本書に使用した空中写真のうち、図版1は京葉測量㈱の提供になるもので、図版2-1についても同エア・フォト・サービスに委託したものである。

11. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

千葉県土木部道路建設課、県成田土木事務所、千葉県教育庁文化課、成田市教育委員会。
石戸啓夫、木川邦夫、寺内博之の諸氏、及び我孫子市布佐、成田市大竹・上福田、栄町竜角寺地区の調査補助員の方々。

本文目次

序文	i
凡例	ii
第1章 序説	1
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査概要	4
1 調査の経緯	4
2 遺構の概要	6
第3章 検出した遺構と遺物	12
1 繩文時代	12
2 古墳時代	52
3 奈良・平安時代	62
4 中世・近世	114
第4章 まとめ	138

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置と周辺地形 (1/50,000)	2
第 2 図 遺跡地形図・グリッド配置図 (1/2,500)	5
第 3 図 北区遺構検出状況 (1/800)	7
第 4 図 南区遺構検出状況 (1/800)	8
第 5 図 北区遺構配置図 (1/400)	9
第 6 図 南区遺構配置図① (1/400)	10
第 7 図 南区遺構配置図② (1/400)	11
第 8 図 002号跡実測図	13
第 9 図 002号跡炉窯実測図・同埋甕出土状況	13
第 10 図 002号跡出土遺物実測図 (1/4)	14
第 11 図 002号跡出土土器拓影図 (1/3)	15
第 12 図 002号跡出土石器・土製品実測図 (1/2)	16
第 13 図 北区縄文時代土坑検出状況 (1/100)	17
第 14 図 201号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)	18
第 15 図 201号跡出土土器拓影図① (1/3)	18
第 16 図 201号跡出土土器拓影図② (1/3)・出土遺物実測図 (1/3)	19
第 17 図 202・203・204号跡実測図	19
第 18 図 205・206・207・208号跡実測図	20
第 19 図 208号跡出土土器拓影図 (1/3)	20
第 20 図 209号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)	21
第 21 図 209号跡出土土器拓影図 (1/3)	22
第 22 図 210号跡実測図	22
第 23 図 南区縄文時代土坑検出状況 (1/160)	23
第 24 図 南区検出土坑実測図①	24
第 25 図 南区検出土坑実測図②	25
第 26 図 南区検出土坑内出土土器拓影図 (1/3)	26
第 27 図 219号跡実測図	27
第 28 図 219号跡出土遺物実測図 (1/4)	28
第 29 図 219号跡出土遺物拓影図① (1/3)	28

第30図	219号跡出土土器拓影図②石器実測図(1/3)	29
第31図	220号跡実測図・同出土遺物実測図(1/4)	30
第32図	220号跡出土石器実測図(1/3)	30
第33図	227号跡実測図・同出土遺物実測図(1/4)	31
第34図	240・276号跡実測図	32
第35図	第I群土器拓影図・第II群土器拓影図①(1/3)	34
第36図	第II群土器拓影図②(1/3)	37
第37図	第III群土器拓影図①(1/3)	38
第38図	第III群土器拓影図②(1/3)	39
第39図	第III群土器拓影図③(1/3)	40
第40図	第III群土器拓影図④(1/3)	41
第41図	第III群土器拓影図⑤(1/3)	42
第42図	第III群土器拓影図⑥(1/3)	43
第43図	第III群土器拓影図⑦・第IV群土器拓影図①(1/3)	45
第44図	第IV群土器拓影図②(1/3)	46
第45図	第IV群土器拓影図③(1/3)	47
第46図	第III・IV群土器実測図(1/4)・(1/2)	48
第47図	石器実測図①(1/3)	49
第48図	石器実測図②(1/3)	50
第49図	石器実測図③(2/3)	51
第50図	土製品実測図(1/3)	51
第51図	009号跡実測図	52
第52図	009号跡出土遺物実測図(1/4)	53
第53図	017号跡実測図・同カマド実測図	55
第54図	017号跡出土遺物実測図(1/4)	55
第55図	019号跡実測図	56
第56図	019号跡出土遺物実測図(1/4)・(1/2)	58
第57図	026号跡実測図・貯蔵穴内遺物出土状況	60
第58図	026号カマド実測図	61
第59図	026号跡出土遺物実測図(1/4)	61
第60図	001号跡実測図	63
第61図	001号跡出土遺物実測図(1/4)	64

第 62 図	003号跡実測図	65
第 63 図	003号跡出土遺物実測図（1／4）	66
第 64 図	004号跡実測図	68
第 65 図	004号跡出土遺物実測図（1／4）	69
第 66 図	005・006号跡実測図	69
第 67 図	006号跡出土遺物実測図（1／4）	70
第 68 図	007号跡実測図	70
第 69 図	007号跡出土遺物実測図（1／4）	71
第 70 図	008号跡実測図	72
第 71 図	008号跡出土遺物実測図（1／4）	72
第 72 図	010号跡実測図	73
第 73 図	010号跡カマド内遺物出土状況・同カマド実測図	74
第 74 図	010号跡出土遺物実測図（1／4）	75
第 75 図	011号跡実測図	76
第 76 図	011号跡カマド実測図	76
第 77 図	011号跡出土遺物実測図（1／4）	77
第 78 図	012号跡実測図	78
第 79 図	012号跡出土遺物実測図（1／4）	78
第 80 図	013号跡実測図	79
第 81 図	013号跡出土遺物実測図（1／4）	79
第 82 図	014・015号跡実測図	81
第 83 図	014号跡出土遺物実測図（1／4）	82
第 84 図	014号跡出土石帯実測図（2／3）	82
第 85 図	015号跡出土遺物実測図（1／4）	83
第 86 図	016号跡実測図	84
第 87 図	016号跡出土遺物実測図（1／4）	85
第 88 図	018号跡実測図	88
第 89 図	018号跡カマド実測図	89
第 90 図	018号跡出土遺物実測図（1／4）・（1／2）	90
第 91 図	020号跡実測図	91
第 92 図	020号跡出土遺物実測図（1／4）	92
第 93 図	021・022・023号跡実測図	92

第 94 図	021号跡出土遺物実測図 (1/4)	93
第 95 図	022号跡出土遺物実測図 (1/4)	94
第 96 図	023号跡カマド実測図	95
第 97 図	023号跡出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)	95
第 98 図	024号跡実測図	97
第 99 図	024号跡出土遺物実測図 (1/4)	97
第100図	024号跡カマド実測図	98
第101図	025号跡実測図	99
第102図	025号跡出土遺物実測図 (1/4)	99
第103図	027号跡実測図	100
第104図	027号跡出土遺物実測図 (1/4)	100
第105図	028号跡実測図	101
第106図	028号跡出土遺物実測図 (1/4)	101
第107図	029号跡実測図	102
第108図	029号跡出土遺物実測図 (1/4)	102
第109図	030号跡実測図	103
第110図	031号跡実測図	104
第111図	031号跡出土遺物実測図 (1/4)	105
第112図	031号跡出土土玉実測図 (1/2)	105
第113図	南区台地平坦部検出柱穴跡・土壤配置図 (1/200)	106
第114図	101号跡実測図	107
第115図	252号跡実測図	108
第116図	252号跡出土遺物実測図 (1/4)	108
第117図	282号跡実測図	110
第118図	282号跡出土遺物実測図 (1/4)	110
第119図	柱穴・土壤周辺出土遺物実測図 (1/4)	111
第120図	表採遺物実測図 (1/4)	111
第121図	台地整形区画推定範囲 (1/800)	114
第122図	台地整形区画内遺構配置図 (1/160)	115
第123図	301号跡実測図	117
第124図	344号跡実測図	118
第125図	316号跡実測図	120

第126図	316号跡出土遺物実測図（1／4）	121
第127図	328号跡実測図	123
第128図	328号跡出土遺物実測図（1／4）	124
第129図	317・323・334号跡実測図	125
第130図	台地整形区画内出土遺物実測図（1／4）・（1／2）	126
第131図	401号跡実測図	129
第132図	401号跡出土遺物実測図（1／4）	130
第133図	401号跡出土古錢拓影図（2／3）	130
第134図	402号跡実測図	131
第135図	402号跡出土遺物実測図（1／4）・（1／2）	132
第136図	溝状遺構検出状況（1／400）	133
第137図	溝状遺構出土遺物実測図（1／4）・（1／2）	134
第138図	グリッド出土遺物実測図・拓影図（1／4）	135
第139図	表探古錢拓影図（2／3）	136

表 目 次

第 1 表	北区検出縄文時代土坑一覧表	20
第 2 表	南区検出縄文時代土坑・落し穴一覧表	33
第 3 表	住居跡新・旧遺構番号対照表	105
第 4 表	台地平坦部検出柱穴跡・土壤一覧表	113
第 5 表	台地整形区画内検出土壤新・旧遺構番号対照表	128

図版目次

- 図版1 遺跡全景
図版2 1. 南区全景(北上空から)
2. 遺跡遠景(北東から)
図版3 1. 002号跡全景(南西から)
2. 002号跡遺物出土状況(南西から)
3. 同 炉内遺物出土状況(西から)
4. 同 埋甕検出状況(南東から)
図版4 1. 北区土坑検出状況(南から)
2. 南区土坑検出状況(南から)
図版5 1. 215号跡(北西から)
2. 220号跡(南から)
3. 223号跡(南東から)
4. 224号跡(南東から)
5. 227号跡(西から)
6. 230号跡(南から)
7. 232号跡(東から)
8. 233号跡(南から)
図版6 1. 008・009号跡全景(南東から)
2. 017号跡全景(北東から)
図版7 1. 019号跡全景(南東から)
2. 同 土層断面・遺物出土状況(南から)
3. 同 遺物出土状況(北西から)
図版8 1. 026号跡全景(南東から)
2. 001号跡全景(北西から)
図版9 1. 003号跡全景(南東から)
2. 004号跡全景(南東から)
図版10 1. 010号跡全景(南から)
2. 010号跡カマド内遺物出土状況(南から)
3. 同 カマド掘り方(南から)
4. 007号跡全景(北西から)
図版11 1. 013号跡全景(南から)
2. 014号跡全景(南西から)
3. 同 遺物出土状況(南東から)
図版12 1. 015・016号跡全景(南東から)
2. 016号跡遺物出土状況(北東から)
図版13 1. 018号跡全景(南東から)
2. 018号跡 遺物出土状況(西から)
3. 同 カマド検出状況(南から)
4. 020号跡全景(南東から)
図版14 1. 022・023号跡全景(東から)
2. 同 遺物出土状況(東から)
3. 023号跡遺物出土状況(北東から)
図版15 1. 024号跡全景(東から)
2. 025号跡全景(南西から)
図版16 1. 027～029号跡(北西から)
2. 029号跡全景(北西から)
3. 030号跡全景(北東から)
図版17 1. 南区柱穴跡・土壤検出状況(南東から)
2. 101号跡全景(南西から)
図版18 1. 台地整形区画全景(北西から)
2. 同(南から)
図版19 1. 301号跡全景(南東から)
2. 344号跡全景(南西から)
図版20 1. 316号跡全景(南西から)
2. 同 遺物出土状況(南西から)

- | | | |
|------|--|--|
| 図版21 | 1. 317号跡遺物出土状況（西から）
2. 328号跡A遺物出土状況（北西から）
3. 同 F遺物出土状況（東から） | 図版35 グリッド出土の縄文土器片（その6）
〔第40図〕 |
| 図版22 | 1. 323号跡全景（南東から）
2. 同 土層断面（南西から）
3. 334号跡全景（南東から） | 図版36 グリッド出土の縄文土器片（その7）
〔第41図〕 |
| 図版23 | 1. 401号跡全景（北東から）
2. 402号跡土層断面（西から） | 図版37 グリッド出土の縄文土器片（その8）
〔第42図〕 |
| 図版24 | 1. 501・502・503号跡（北西から）
2. 504・505・506・507号跡（北から） | 図版38 グリッド出土の縄文土器片（その9）
〔第43図〕 |
| 図版25 | 1. 調査前遺跡近景（南東から）
2. 調査風景
3. 包含層土層断面（南から）
4. 南区調査後近景（南東から） | 図版39 グリッド出土の縄文土器片（その10）
〔第44図〕 |
| 図版26 | 002号跡出土遺物 | 図版40 グリッド出土の縄文土器片（その11）
〔第45図〕 |
| 図版27 | 1. 209号跡出土土器
2. 227号跡出土土器
3. 209号跡出土遺物 | 図版41 1. グリッド出土の縄文土器片（その12）〔第46図1・3・4〕
2. グリッド出土の石器（その1） |
| 図版28 | 1. 201号跡出土遺物
2. 219号跡出土遺物 | 図版42 1. グリッド出土の石器（その2）
2. グリッド出土の石器（その3） |
| 図版29 | 南区検出土坑出土遺物 | 土製品 |
| 図版30 | グリッド出土の縄文土器片（その1）
〔第35図〕 | 図版43 009・017・019・026号跡出土土器 |
| 図版31 | グリッド出土の縄文土器片（その2）
〔第36図〕 | 図版44 026・001・003・004・007号跡出土土器 |
| 図版32 | グリッド出土の縄文土器片（その3）
〔第37図〕 | 図版45 008・010・013・015・016号跡出土土器 |
| 図版33 | グリッド出土の縄文土器片（その4）
〔第38図〕 | 図版46 016・018号跡出土土器 |
| 図版34 | グリッド出土の縄文土器片（その5）
〔第39図〕 | 図版47 023・025・027・028・029・282・柱穴・316号跡出土土器 |
| | | 図版48 316・328・317号跡出土土器 |
| 図版31 | グリッド出土の縄文土器片（その2）
〔第36図〕 | 図版49 台地整形区画内（1～3）・堅穴状遺構（4～6）・溝（7～9）出土土器 |
| 図版32 | グリッド出土の縄文土器片（その3）
〔第37図〕 | 図版50 表採土器（1～8）・土製支脚（9・10） |
| 図版33 | グリッド出土の縄文土器片（その4）
〔第38図〕 | 図版51 1. 019号跡出土土製品
2. 表採擂鉢（第137図9～14） |
| 図版34 | グリッド出土の縄文土器片（その5）
〔第39図〕 | 図版52 鉄器・石器・古銭・キセル |

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

主要地方道成田安食線は、成田市寺台から印旛郡栄町酒直に至るバイパスとして、千葉県土木部道路建設課により計画されたものである。建設の目的は成田ニュータウン内への交通量を緩和することと、新東京国際空港への交通路を確保するという公共性の高いものである。

この道路が計画された印旛沼東岸の成田市、栄町は埋蔵文化財が数多く所在する地域でもあった。このため成田安食線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部道路建設課と幾度となく慎重な協議を重ねた。その結果路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、その機関として財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和55年度から開始され、栄町に所在する9遺跡についてはすでに調査が終了し、本書と同時に報告書も刊行される。成田市に所在する遺跡のうち島内遺跡については、昭和58年度に実施することとなり、千葉県土木部道路建設課と当千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約がとり交され、昭和58年4月1日から発掘調査を開始する運びとなった。

2. 遺跡の位置と環境

島内遺跡は成田市松崎島内354～3他に所在する。成田市は千葉県の北部に位置し、広大な下締台地の一隅を占めている。本遺跡は成田市の北西部に当たり、印旛沼東岸の台地で根木名川水系に関わる樹枝状台地の一つに立地している。根木名川は富里村根木名付近に源を発し、成田市内を北流し利根川へと注いでいる。その全長は18.9kmを有し、途中幾つかの支流が合流する。松崎の近くから流れを発し、遺跡の北側を南西に入る谷津の中央を流れる名もなき小川も、そうした支流に合流される。また遺跡の南側にも谷津が進入し、松崎、東北方面から伸びている細長い台地は、遺跡が立地する北東端部で八手の葉状の複雑な地形を呈する。

遺跡は幅の狭い台地の平坦な部分を利用して営まれるが、谷が北東、南西、北西の各方向から入り込むため平坦部は8の字形を呈している。台地の標高は30～33mで現水田面との比高は12～13mを測る。平坦部である北西側と南東側とをつなぐ部分は松崎から下福田に至る道路によって切断され、一部は宅地として使用されている。現況では北西側は竹林となっており、南東側は畠地及び林となっている。今回の調査は遺跡を縦断するような形で行なわれた。

印旛沼東岸の本遺跡周辺は、数多くの遺跡が存在する地域として古くから知られている。遺跡の北西2kmの栄町には、史跡岩屋古墳をはじめとする大小112基の古墳によって構成される龍



● 島内遺跡

● 成田安食桿路線内の遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺地形 (1/50,000)

角寺古墳群がある。成田安食線はこの古墳群の北側をとおり、その路線内に所在する9遺跡(第1図2~10)が調査された。詳細については報告書を参照されたいが、大規模な掘立柱建物群が検出された大畠I遺跡(9)や、唐三彩、畿内産土師器などを出土した向台遺跡(10)は、この地域の歴史的展開を考えるうえで極めて重要な資料を示している。次に時代別に遺跡をみると、縄文時代早期の遺跡としては、三戸・田戸式のいわゆる沈線文系土器を出土した遺跡として、路線内に池上りI(5)・II(6)遺跡がある。中期では本遺跡と谷を隔てて立地する宝田山ノ越貝塚(11)のほか、龍角寺ニュータウンNo4地点(15)、No5地点(14)で遺構が発見されている。後期の遺跡としては宝田八反目貝塚(12)が山ノ越貝塚と接近して所在している。弥生時代の遺跡は根木名川水系に閑戸遺跡が調査され、また、あじき台遺跡(16)でも後期の住居跡20軒が検出されている。古墳時代になると、龍角寺古墳群の北側で前原I(3)・II(2)、五丹歩(4)の各遺跡で中期の住居跡が調査され、後期の集落が大畠と向台遺跡に展開している。奈良・平安時代では、大畠I・II(8)遺跡と、向台遺跡を含めた一帯が、先に述べたような遺構や遺物から、埴生郡衙推定地として注目されている。中世・近世では、城跡として小橋川を望む位置に白子城(13)が立地し、遺構では大畠田遺跡(7)で炭焼窯が発掘されている。

引用参考文献

- 小川和博 1980「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究案描」「奈和」第18号 奈和同人会
越川敏夫・村山好文他 1982「龍角寺ニュータウン遺跡群」 龍角寺ニュータウン遺跡調査会
千葉県文化財センター 1983「閑戸遺跡」「成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」II
成田市教育委員会 1973「成田市文化財分布調査報告書—埋蔵文化財編—」
成田市史編さん委員会 1980「成田市史—原始古代編」 成田市
橋口定志他 1983「あじき台遺跡」 あじき台遺跡調査団

第2章 調査概要

1. 調査の経過

本遺跡の発掘調査は昭和58年4月1日から開始した。発掘調査面積は北区と南区を合計する
と4,300m²である。

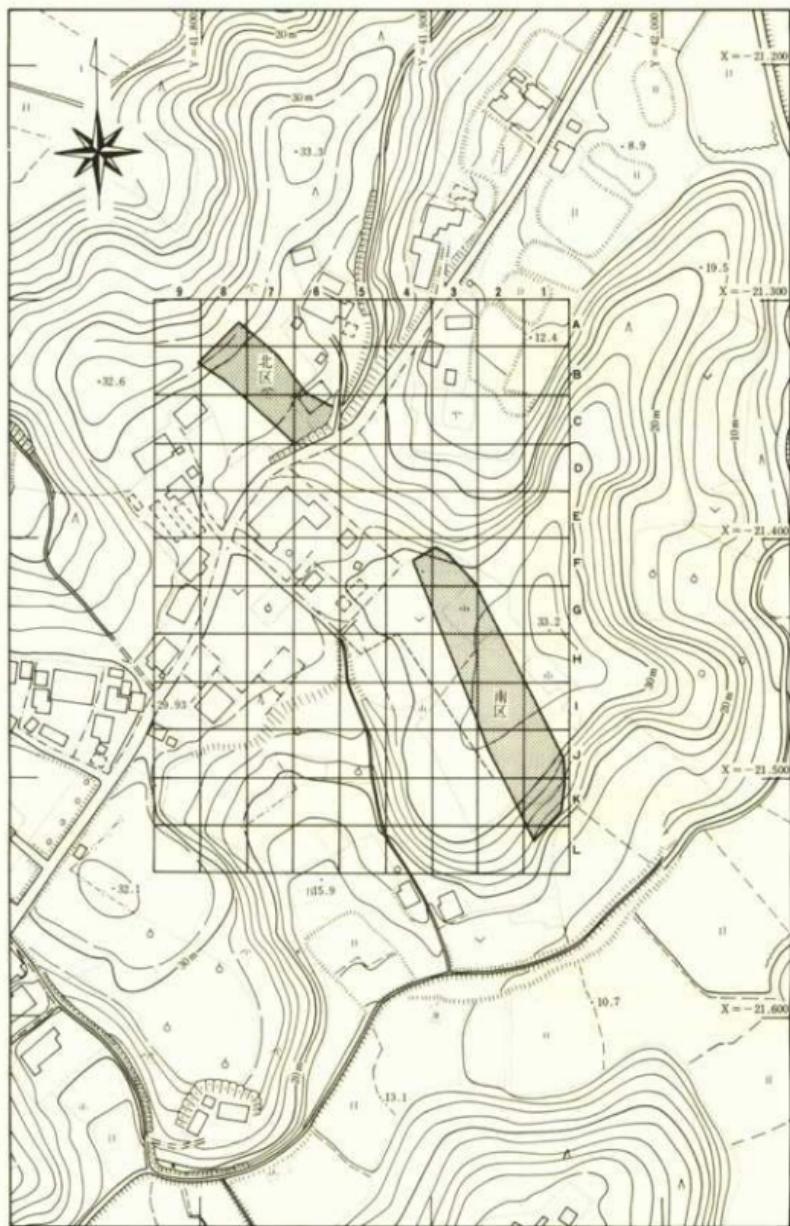
まず調査に先立ち調査範囲全体が覆るように20m×20mの大グリッドを設定した(第2
図)。さらに大グリッド内を4m×4mの小グリッド25個に分けた。小グリッドの呼称は大グリ
ッドの北東隅を01とし、北西の隅が05、01の南側は06となり南西の隅を25とした。

現地における調査は4月13日から実施した。環境整備の後4月18日から23日まで、南区で表
土の堆積状況などを確認するためトレンチ発掘を行なった。このトレンチ発掘に引き続き4月
25日から重機による慎重な表土除去作業と、遺構検出作業を開始した。5月下旬までは南区で
かなりの遺構の存在が明らかになり、この間北区においてもトレンチ調査を行ない土層の状況
を把握した。

5月27日から本格的に遺構の精査に取り掛かった。工程上南区の南半分から調査を開始し順
次北側へ進めた。検出面がすでにハードローム層上面であったため、概して住居跡の遺存は不
良で、遺物も多くない状況であった。ただ台地整形区画内底面では多数の土壙が検出され、し
かも覆土に差が認められなかったため平面形がなかなか捉えられず大変苦慮したところもあつた。
遺構の調査と並行して7月1日からは、F3・G3グリッドで検出した縄文時代の遺物包含
層についても調査を開始した。

南区については8月下旬までに遺構の精査は一部を残して終了し、同時に北区で検出された
土坑の調査に着手する。9月上旬まででほとんどの遺構が掘り進み9月12日に遺跡全体の清掃
を行ない、翌13日に空中写真撮影を実施した。空中写真撮影の完了を待って、先土器時代の確
認を行なった。先土器時代の確認は大グリッド内に2m×2mのテストピットを4カ所設定し、
状況に応じてこの数をふやし武藏野ローム層上面まで掘り下げた。この結果、先土器時代の遺
構及び遺物は全く検出されなかつた。

9月20日からは北区で残されていた1軒の住居跡(001号跡)の調査と、図面の点検を進め、
これを26日までに終了した。調査期間中7月27日には北総一帯に雹が降り、9月中は長雨に祟
られるなど天候不順が続いたが、9月30日には、撤収作業を済ませ、現場におけるすべての作
業を完了した。



第2図 遺跡地形図・グリッド配置図 (1/2,500)

2. 遺構の概要

調査区は路線内という限定された範囲であったため、北東から入る谷によって北区と南区に分かることになった。今回の調査では縄文時代～近世の遺構や遺物を数多く検出した。

北区はトレンチ調査の結果調査範囲の大部分が削平されていることが判明した。表土は約20cmでその下層は直接粘土層となっていた。この削平がいつの時期に行なわれたかはっきりしないが、おそらく近世以降と考えられる。しかし一部については削平を受けなかったところもあり、そこに縄文時代の土坑10基と、奈良・平安時代の住居跡1軒が検出された。この削平されなかつた部分には表土が50cm以上も堆積し、そこから縄文時代後期の土器片が多数出土した。ここでの表土は削平が行なわれた際に盛り上げられた土ということも考えられる。北区は現況では竹林となっていたため、竹の根には随分悩まされた。

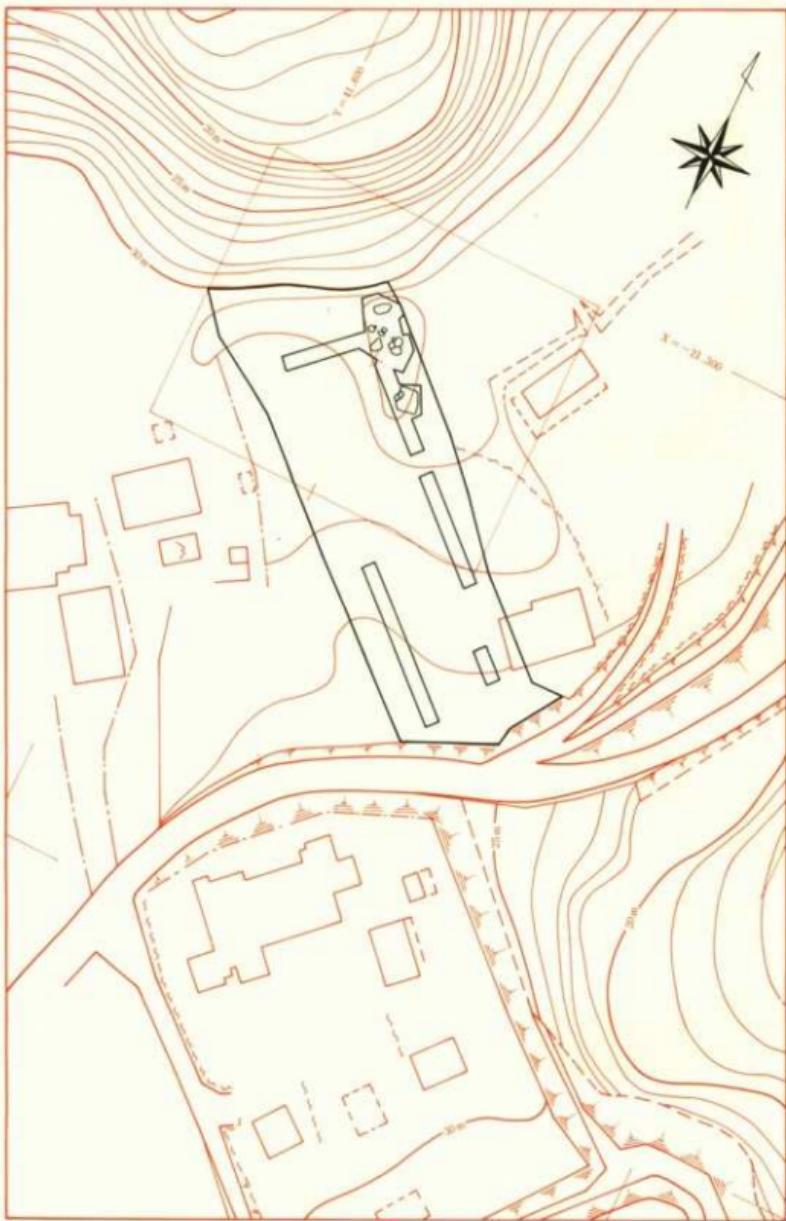
南区では竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡1棟、土壤か柱穴跡となる遺構51ヶ所、土坑23基、落し穴2基、台地を整形する区画1ヵ所（注1）、竪穴状遺構2基、溝状遺構8条を検出した。これらの遺構を時代別にみると、縄文時代の遺構は後期の住居跡1軒、同じく土坑23基、落し穴2基である。またF3・G3グリッドに後期の遺物を包含する範囲が検出されている。古墳時代は後期の竪穴住居跡4軒。奈良・平安時代では、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、土壤か柱穴と考えられるピット51ヶ所である。中世・近世と考えられる遺構は、台地整形区画、竪穴状遺構、溝状遺構である。

南区の中央部に竪穴住居跡が多数検出されたが、表土の堆積が薄く、耕作がかなり深いところまで及んでいたことと、検出面がすでにハードローム層であったため、遺構の遺存は悪い状況であった。また台地整形区画部についても前述のとおりの状況である。

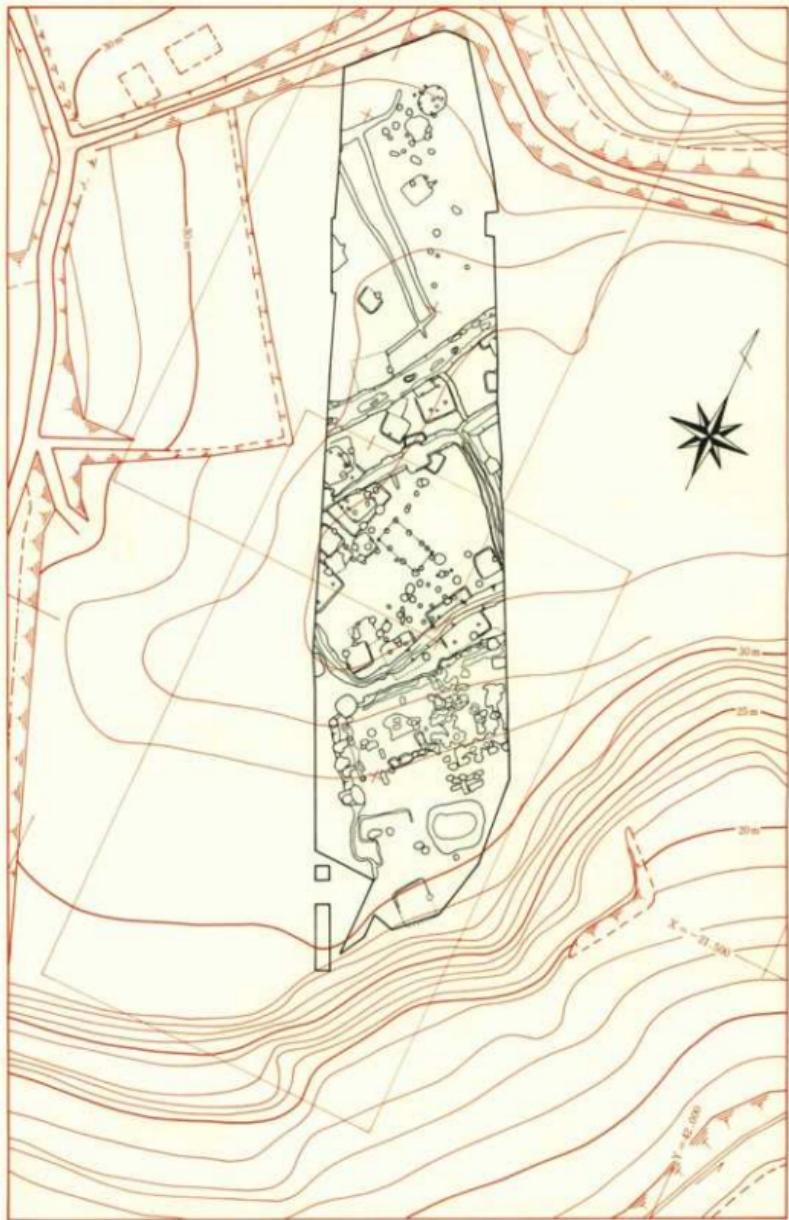
なお現場で付けた遺構番号は本書において改訂してあるので、旧番号については表中に示したので対照されたい。

注

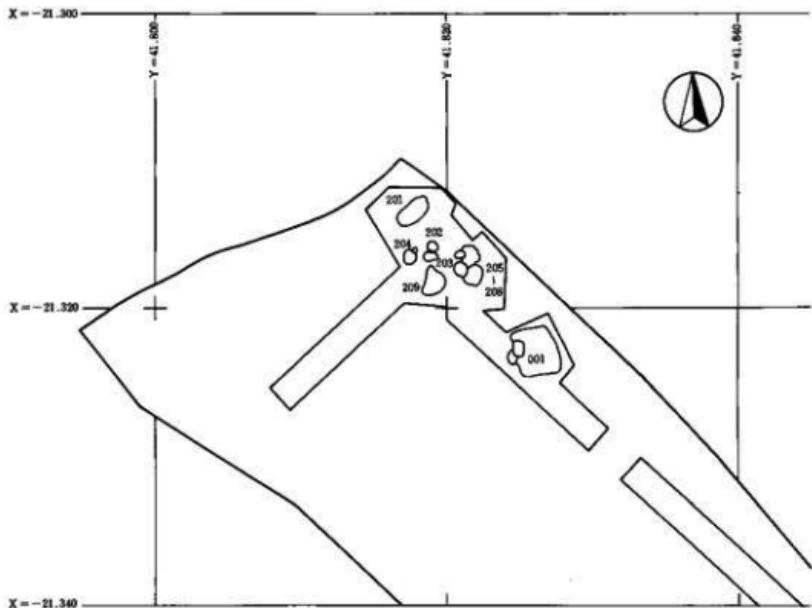
1. 千葉市西屋敷遺跡（矢戸三男・谷句他 1979 「千葉市西屋敷遺跡」千葉県文化財センター）
様な遺構が発見され、これを「台地整形区画」と呼んでいるので、以下ここでもそれに倣うこととした。



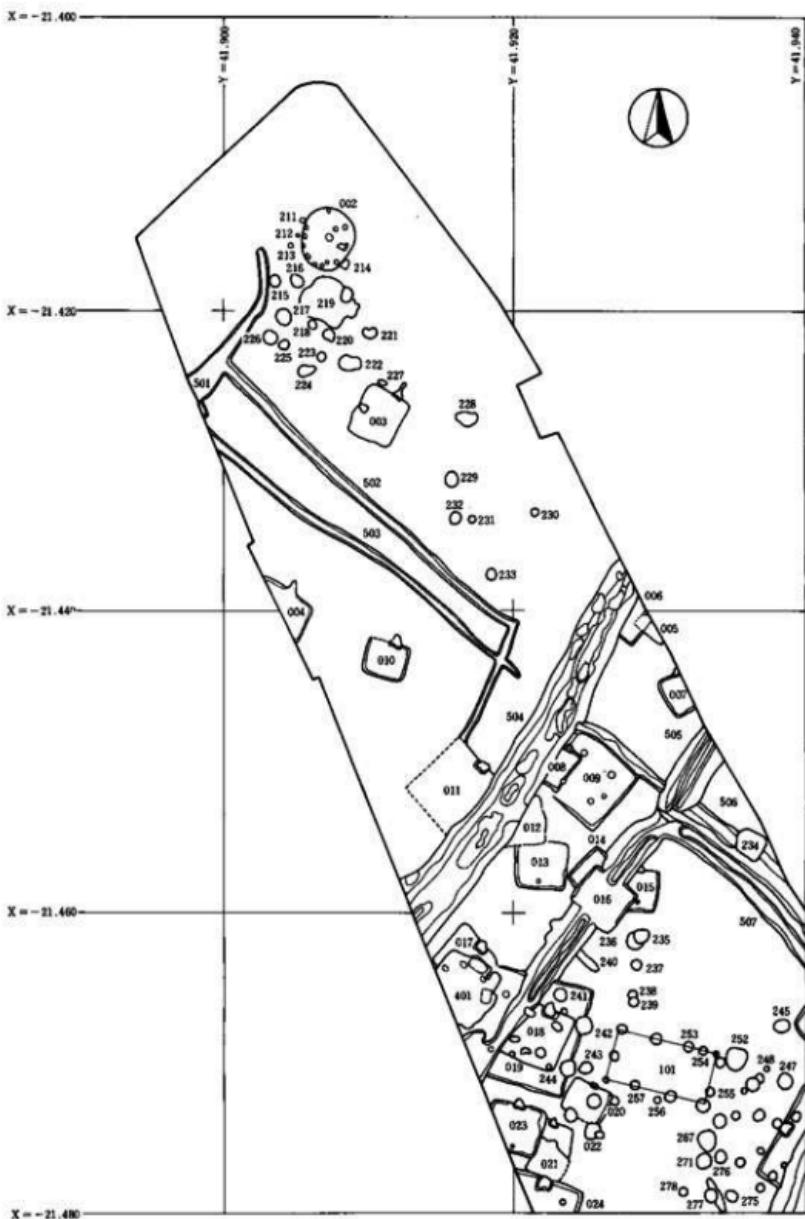
第3図 北区遺構検出状況 (1/800)



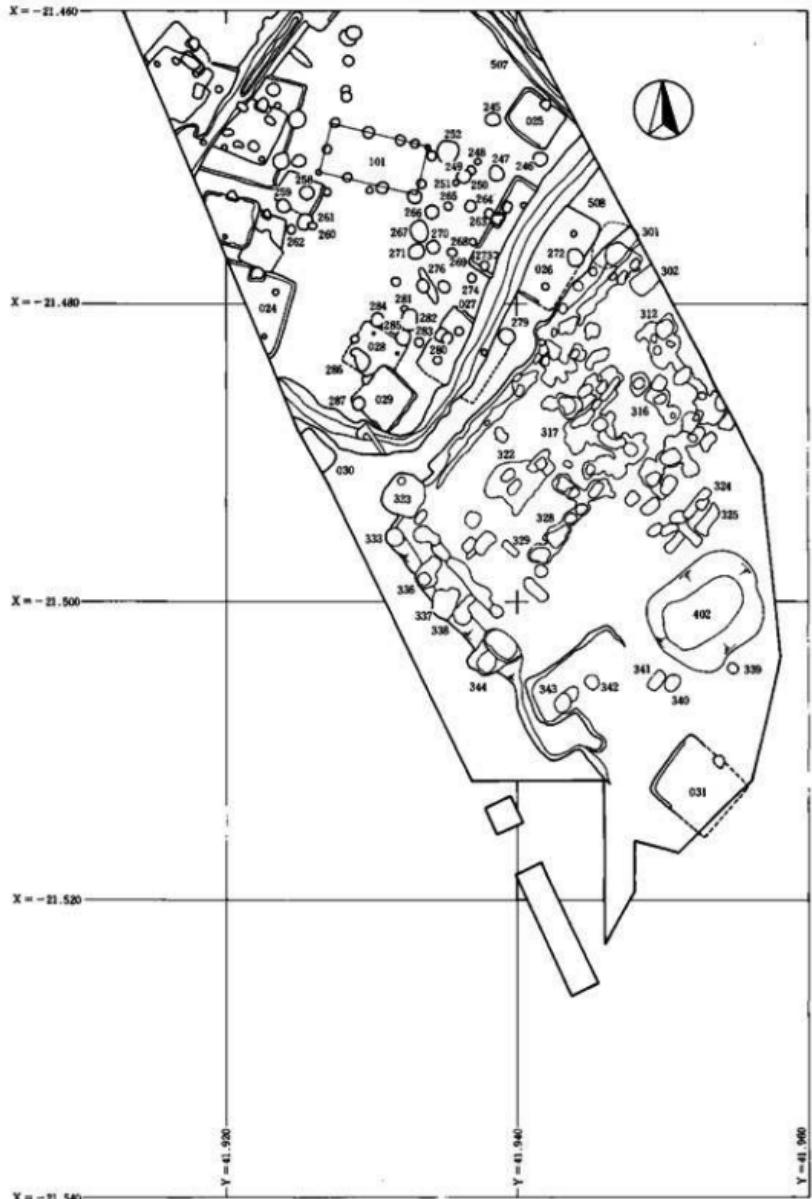
第4図 南区遺構検出状況 (1/800)



第5图 北区造桥配置图 (1/400)



第6図 南区遺構配置図① (1/400)



第7図 南区遺構配置図(2) (1/400)

第3章 検出した遺構と遺物

1. 縄文時代

今回の調査によって検出された縄文時代の遺構は、後期の住居跡1軒、土坑33基、落し穴2基である。このうち土坑と落し穴については出土遺物が僅かであったり、全く出土していないという遺構もある。これらについては覆土の堆積状態や形態等から考えて縄文時代の所産と判断した。そのため明確な時期を決定する根拠に乏しい遺構も含んでいることは否めない。遺物は遺構に伴って出土した他、表土層中あるいは包含層から出土した。大部分は土器によって占められ、前期から後期にかけての土器が出土している。特に遺構およびF3・G3グリッド東側包含層からは壙之内式土器が多く出土している。土器の他には、石器、土製品が出土している。

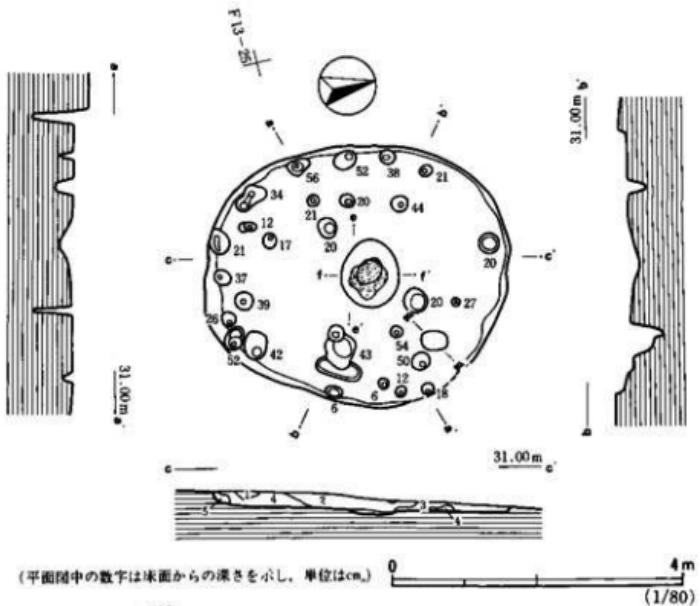
(1) 住居跡と出土遺物

002号跡 (第8・9図、図版3)

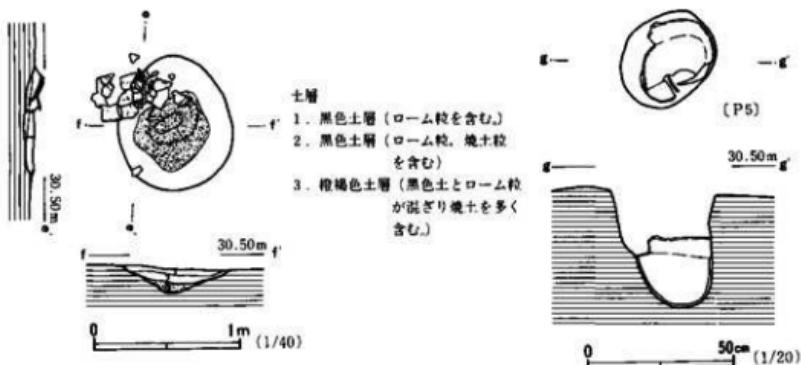
(位置) 南区の北側で台地平坦部の縁辺に近いF3-19グリッドに位置する。他の遺構との切り合い関係は無いが、周囲に土坑が検出されている。

(遺構) やや不整な橢円形を呈する住居跡である。規模は下端での長径3.90m 短径3.30mを測る。壁は全体にゆるやかな立ち上がりをみせ、比較的残りの良い部分で20cm程の壁高を示す。北東側の壁の一部については、検出面すでに削平されており遺存していない。床面はソフトローム層下位からハードローム層上面に設けられ、僅かに北側に傾斜している。しかし凹凸は少なく平坦に構築されている。ピットは27ヶ所に確認された。すべてが、柱穴になるとは断定し難いが、壁に接するようにして検出されたピットは柱穴として考えてよいであろう。ただ南西壁際と、北壁側とではピットの配置に粗密がみられる。これらのピットのなかで最も深いのは床面から56cm前後を測る。また、柱穴とは別に北東寄りに埋甕が設けられている。炉は遺構のほぼ中央に位置し、橢円形の掘り込みを有している。炉底はロームが赤色に変化し、また硬化しているのでかなり使用されていたことが窺われる。炉の周辺はかなり踏み固められているが両側のみがやや軟弱となっている。

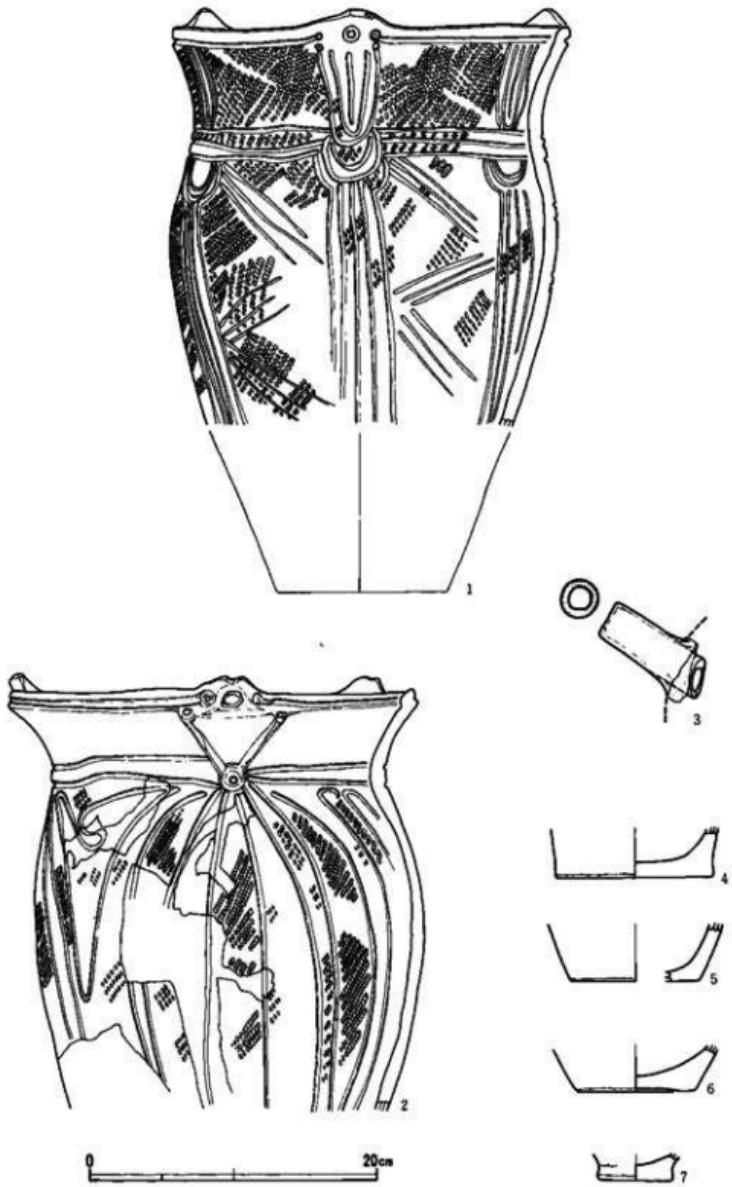
(遺物出土状況と出土遺物) 遺構の上部がかなり削平を受けたような状態であるため遺物量も然程多くはない。出土土器のほとんどは覆土中から出土し、しかも小破片が中心となる。その他には石器2点と土錐1点が出土している。器形が明らかになったのは第10図1、2の2点だけである。1は炉の上面で押しつぶされたような状態で出土し、2は埋甕として使用されていた深鉢である。第10図3は注口土器の注ぎ口の部分に当たる。第11図は比較的大きめの破



第8図 002号跡実測図

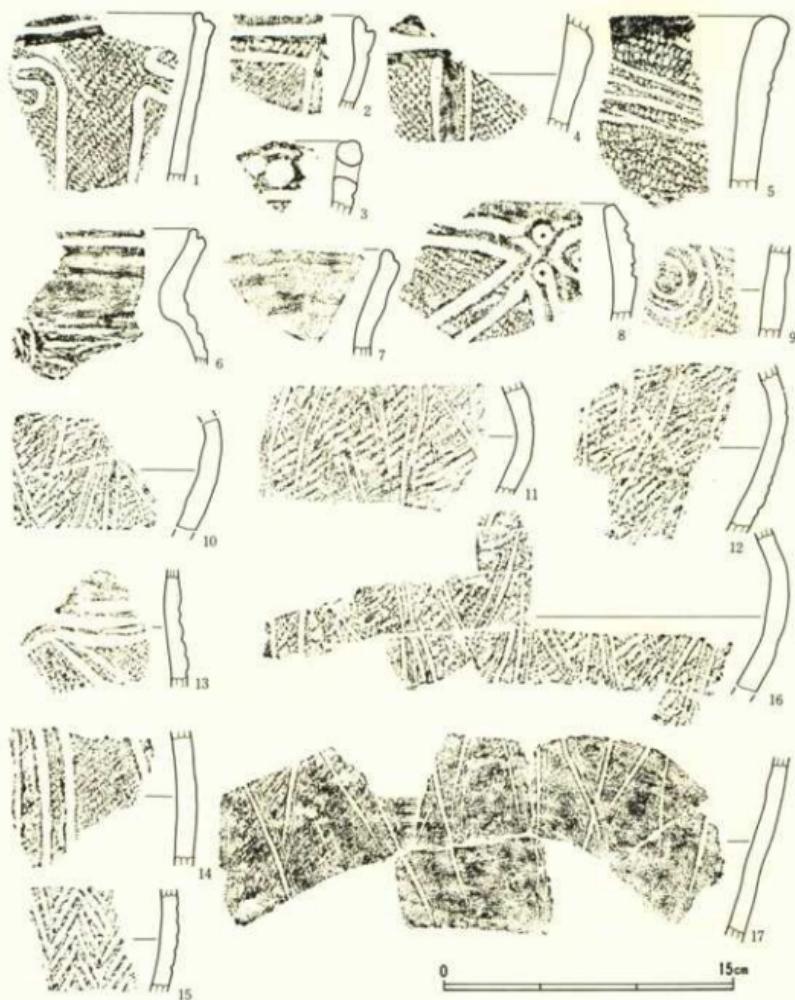


第9図 002号跡炉実測図・同埋甕出土状況



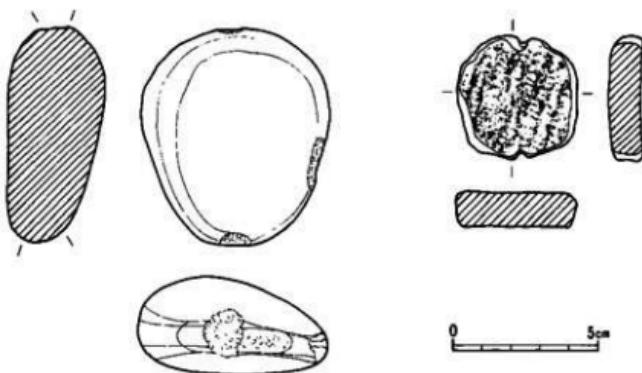
第10図 002号跡出土遺物実測図 (1/4)

片を集めてみた。6・7の口縁部は無文となっているが、他は地文に繩文を有し、沈線による文様が配されている。沈線文は直線を配するものと、1・9のように曲線的な構成をとるものとが認められる。10~12・16は同一個体となる。いずれも鉢形土器と考えられるが、底部から直線的に開く器形や口縁部が外反したり、8のように内湾する形をとったりして一様ではない。図示した土器は堀之内I式土器に比定される。第12図1は、両端および一側縁の3ヶ所に使用



第11図 002号跡出土土器拓影図 (1/3)

痕を認める敲石である。安山岩の自然石を用いる。2は土器片錐で、周辺に調整が加えられている。



第12図 002号跡出土石器・土製品実測図 (1/2)

002号跡出土土器 (第10図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・文様
1	深鉢	底部を欠く	27.7 (28.5) —	密(スコリア) 普通 暗褐色	胴部上半に弱い張りをもち、頸部がくびれ口縁部はゆるく外反する。口縁部に3個の突起を有する。文様は地文にLRを原体とする繩文を施し、そのうえに沈継文によって文様が配される。(図版26)
2	深鉢	口縁部少 底部を欠く	(28.0) (29.2) —	密(砂) 普通 茶褐色	胴部上半に弱い張りをもち、頸部がくびれ口縁部はゆるく外反する。口縁部に3個の突起が付くと考えられる。口縁部は無文で、突起の下に貼り付け縦帯がV字状に付される。胴部はLRを原体とする繩文が施された後沈継文を配し、さらに一部を磨消す。(図版26)

(2) 土坑と出土遺物

北区では10基の土坑が検出された。しかし現況が竹林となっているため、竹の根によって搅乱を受けた遺構も少なくはない。なお北区で検出された土坑のうち201・209号跡についてはその概要について記述し、他の土坑については遺物量も僅かなため一覧表をもって説明に代えることとした。

201号跡 (第14図、図版28)

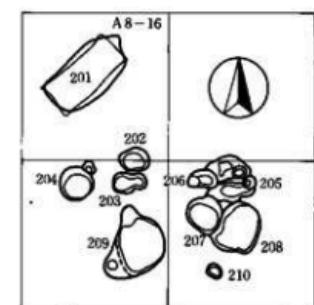
(位置) A8-16グリッドに位置し他の遺構との切り合い関係はない。

(遺構) 検出面での平面形は不整形となっており長径246cm、短径130cmを測る。底面は長

辺が弧状となるが略長方形を呈し整った形となってい。底面での長軸長は210cm、短軸長は95cmとなっている。深さは195cm前後とかなり深く、底面は平坦にされている。壁の残りも良好で、ほぼ真直な立ち上がりをみせるが底面の四隅はオーバーハングしている。掘り方があまりに整然としているので縄文時代以後の遺構とも考えられるが、遺物はすべて縄文時代に属するので、この時期の遺構として捉えておくことにした。

(遺物出土状況と出土遺物) 遺物は覆土中から

出土し、完形に近い遺物の出土はない。最も多く出土したのは加曾利B式土器の粗製土器である。第15図1は加曾利B I式、2~4は加曾利B III式に比定される。5~12、第16図13~19は粗製の深鉢形土器である。17~19は安行I式の粗製土器になると想われる。本跡から出土した遺物のなかで最も新しい段階の遺物となる。20・21は敲石で石材は20が安山岩、21が砂岩である。22・23は土器片に調整を施した土錘と円板状土製品である。



第13図 北区縄文時代土坑検出状況 (1/100)

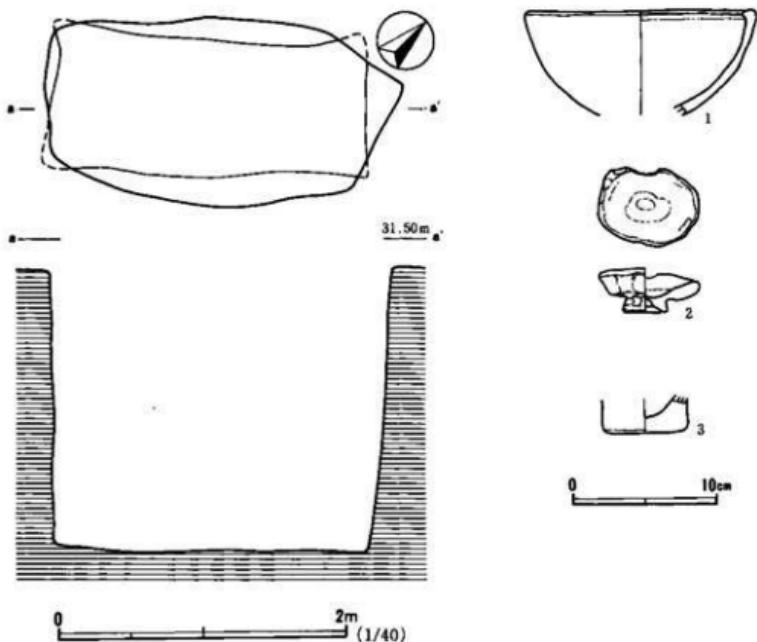
201号跡出土土器 (第14図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・文様
1	鉢	1/4	(16.0) — —	密(長石) 良 暗褐色	底部を欠くが胴部は半球状に丸味をもつ。口縁部は肥厚して内側に曲げられたような形になって終わる。外内側ともミガキ調整され特に文様を配さない。
2	手控	ほぼ完形	7.0・5.4 3.0 3.1	密(砂) 普通 暗褐色	高台が付けられ、体部は横円形を呈する。全体に作りが難く、指頭による整形痕が明瞭に残されている。特に文様は施文されていない。

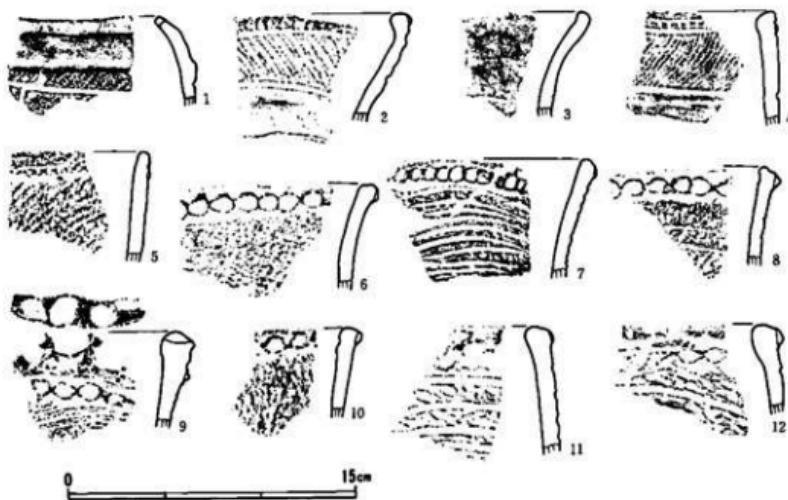
209号跡 (第20図、図版27)

(位置) A8-21グリッドに位置し、北側に203・204号跡が接する。

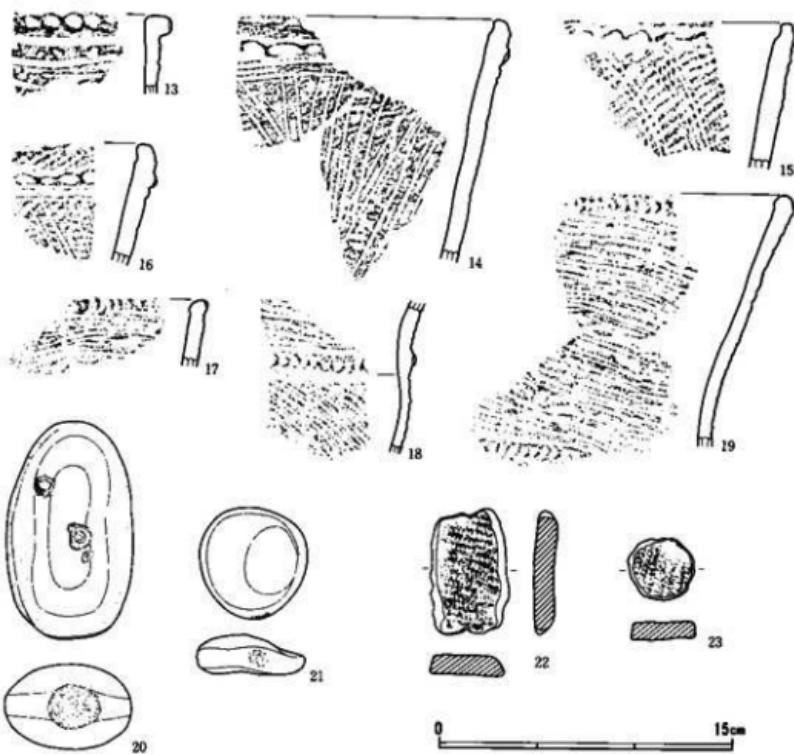
(遺構) 検出面での規模は長径150cm、短径130cmとなる。平面形は北と南西側に張り出した部分があるため不整形となっている。ただし土層断面からみてもわかるように、南西側の張り出し部は本跡より新しい別の土坑になる可能性は大である。竹の根の搅乱は十分に考えられる状況である。本来は円形に近い形であったかもしれない。深さは最も深い部分で62cm前後を測り、張り出した部分に向かって浅くなる。壁は東側では良好な遺存状況を示し、垂直に近い掘り込みが行なわれている。



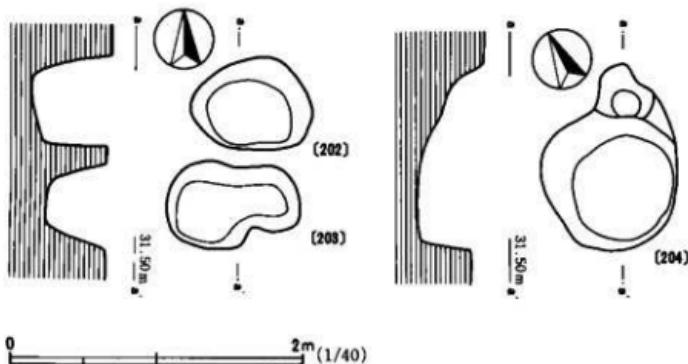
第14図 201号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)



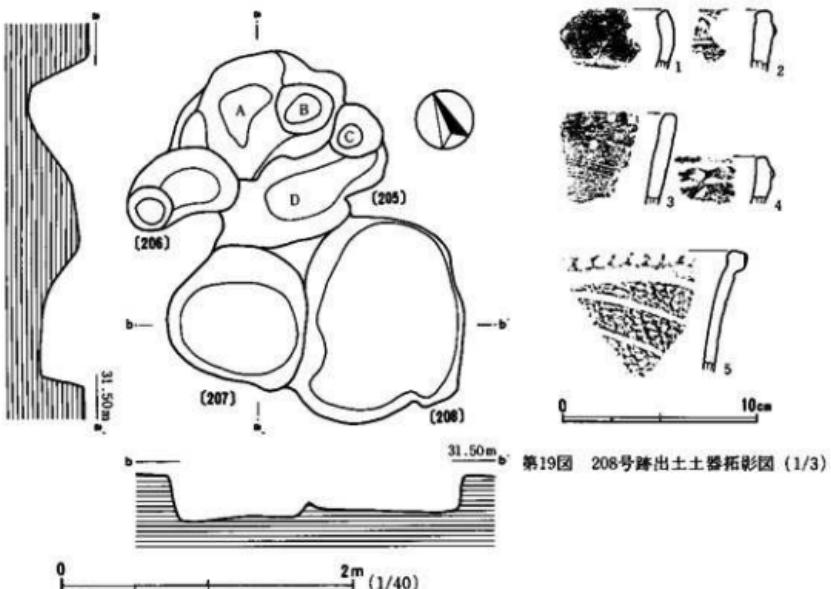
第15図 201号跡出土土器拓影図① (1/3)



第16図 201号跡出土土器拓影図②(1/3)・出土遺物実測図(1/3)



第17図 202・203・204号跡実測図



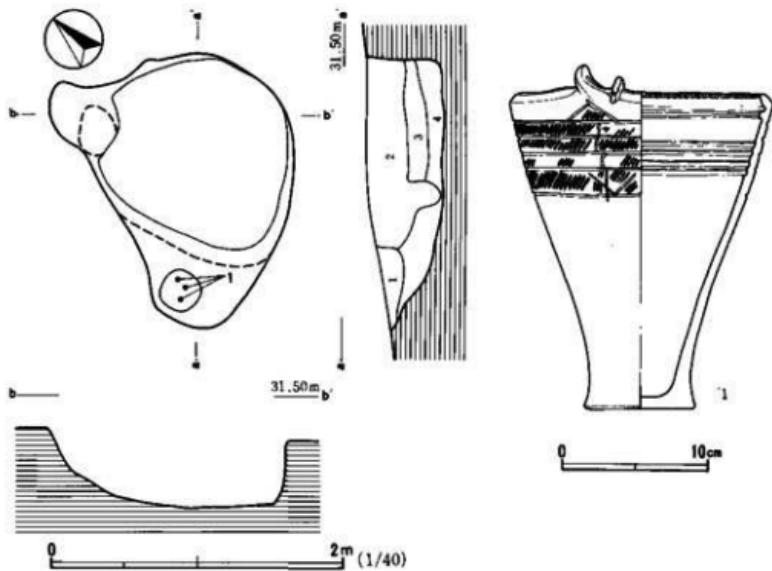
第18図 205・206・207・208号跡実測図

第1表 北区検出縄文時代土坑一覧表

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	旧番号
201	A 8-16	246	130	195	410
202	"	84	62	52	408
203	A 8-21	90	59	40.5	407
204	"	125	92	45	409
205	A 7-25	37	35	33.5	403
206A	"	50	50	30	404

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	旧番号
206B	A 7-25	80	70	39	405
206C	"	76	45	14	406
207	"	94	90	29.5	401
208	"	142	108	18	400
209	A 8-21	150	130	62	398
210	A 7-25	40	32	69.5	399

(遺物出土状況と出土遺物) 本跡より新しい小土坑とも考えられる南西側張り出し部から第20図1が出土している。また2層を中心とし覆土中から比較的多くの土器片が出土している。第21図1・2は口縁部に渦巻き状の文様を配した加曾利E II式である。3~5は断面が三角形を呈する隆線によって文様を区画している加曾利E IV式である。6は堀之内I式に、7・8は加曾利B I式に比定される。9は加曾利B式の粗製土器である。



土層

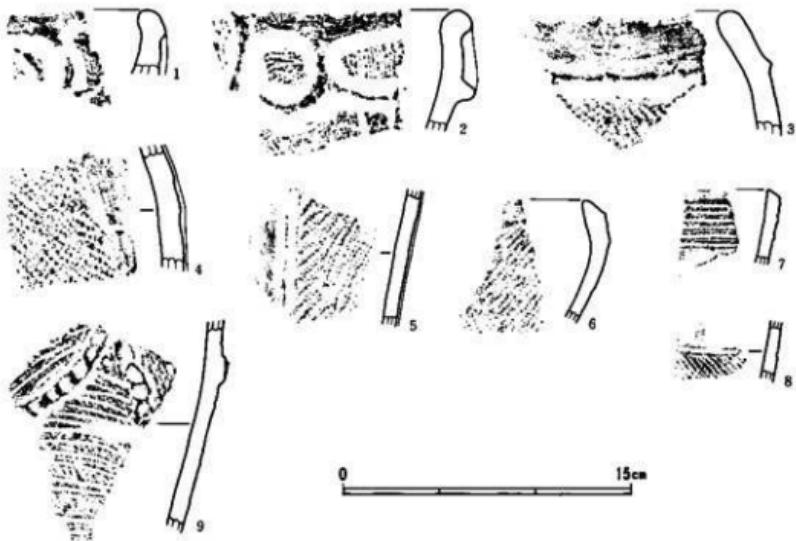
1. 黄褐色土層（焼土ブロック、ハードロームブロックを主とする。）
2. 褐色土層（黒色土とローム粒が混ざり、小ロームブロック、少量の焼土粒、炭化粒を含む。）
3. 褐色土層（2層よりロームブロックを多く含み、堆積が密な状態となる。）
4. 黄褐色土層（ローム粒を主とし、しまりがある。）

第20図 209号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)

209号跡出土土器 (第20図)

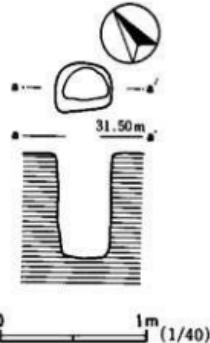
番号	器種	遺存状態	口径 器底 高径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・文様
1	深鉢	胴部1/4 底部全周	(16.0) (23.1) 7.5	密(長石) 良 黒褐色	底部の端部は外側に張り出し、胴部は全体に外に反る ような形で立ち上がる。口縁部は内側に折り曲げられた形となり、その端部に連続する押圧文が加えられる。 また突起が1個遺存し、胴上半に沈線文に画された横位縦文帯が施文される。内面には4列の平行沈線文が 一周する。全体に丁寧なミガキによって調整される。 (図版27)

南区では23基の土坑と2基の落し穴が検出された。土坑は住居跡である002号跡の南側に展開するものが大部分で、6基がそれらからやや離れて検出されている。遺物は222、223号跡などでは40点以上出土しているが、ほとんど細片である。第26図が土坑内から出土した遺物で堀之



第21図 209号跡出土土器拓影図 (1/3)

内式から加曾利B式の古い段階に比定されよう。なおそれぞれの規模については一覧表に示した。



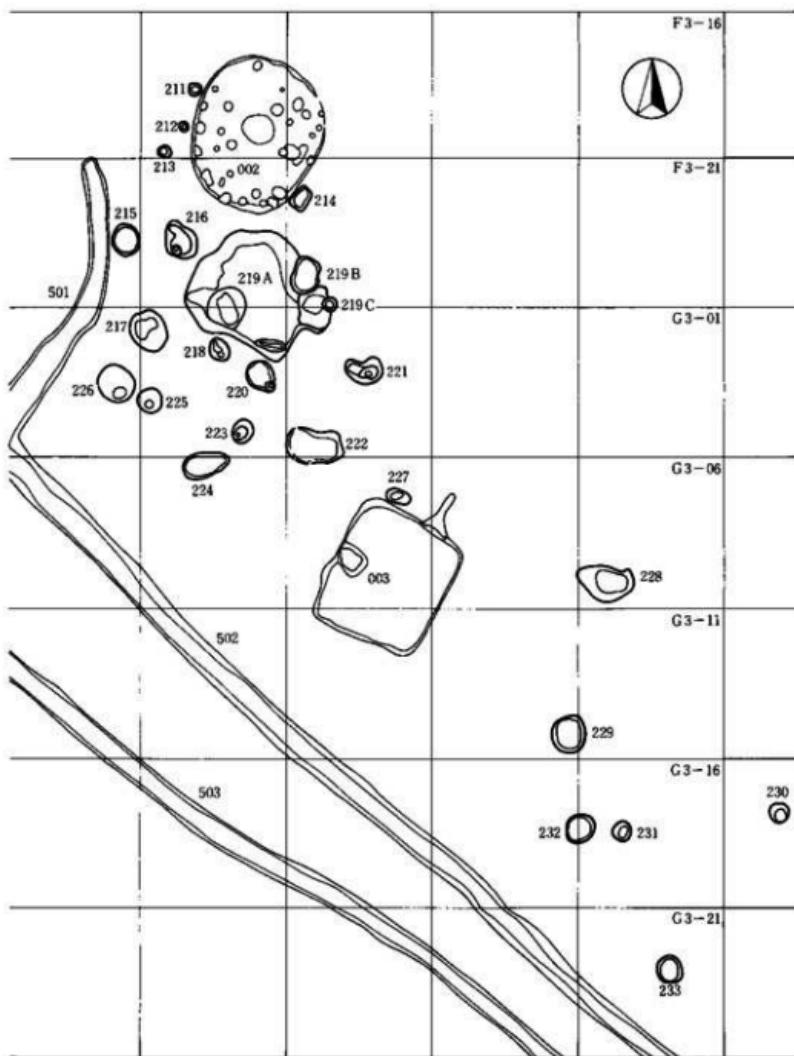
第22図 210号跡実測図

219号跡 (第27図、図版28)

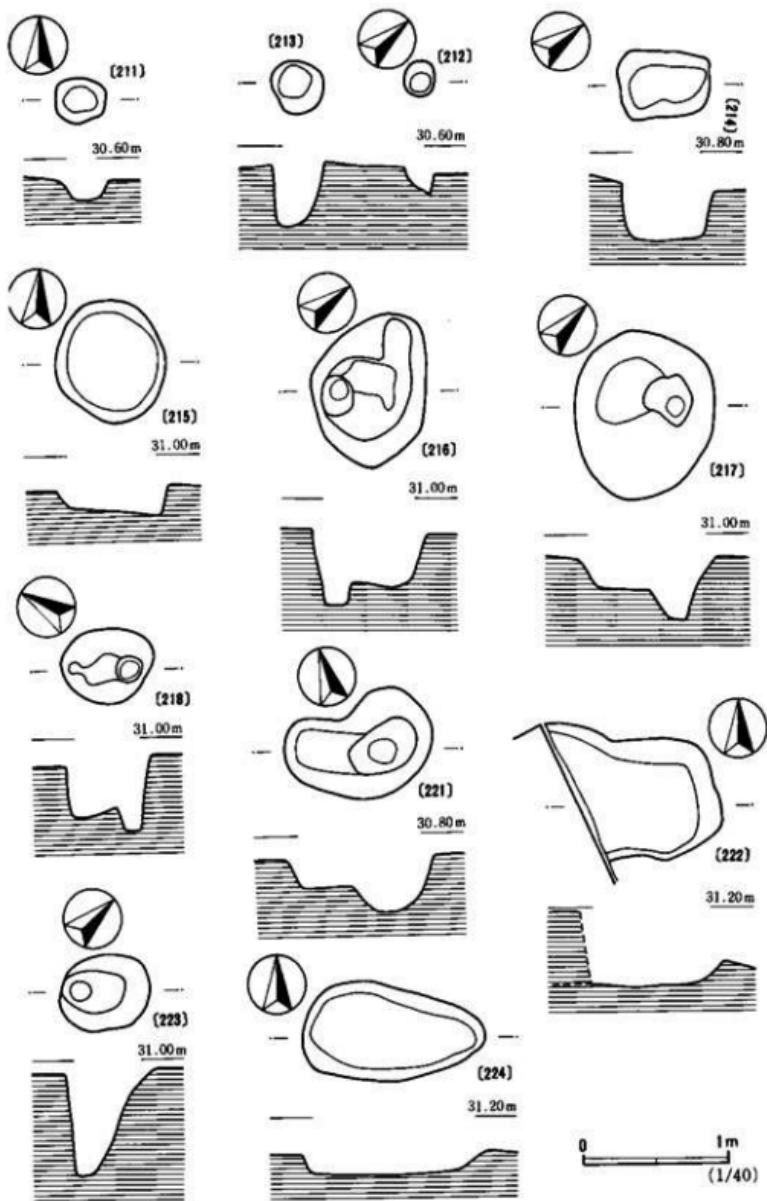
(位置) F 3-23・24グリッドを主に位置する。

(遺構) 平面形は不整形でおおよそ長径400m、短径300cmを測る。また検出面からの掘り込みは深いところで約70cmである。底面は平坦ではなく全体に大きな凹凸がみられる他、BとCは独立した土坑であるということも考えられる。Aとした最も規模を有する部分にしても、覆土は分層が不可能なほど攪乱された状態であったので、風倒木などによる遺構の破壊は十分考えられる状況である。したがって本跡は本来の形状をとどめていない可能性もたれる。

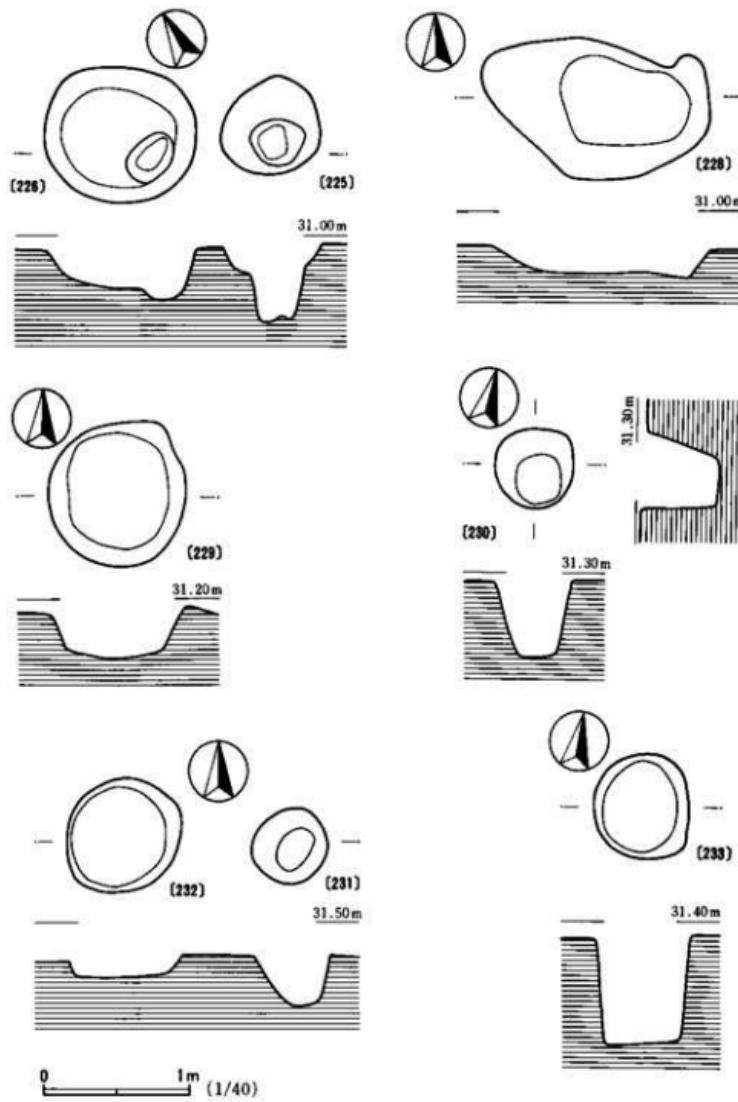
(遺物出土状況と出土遺物) 本跡からは縄文式土器と石器が出土している。出土点数は破片で約550点を数えるが完形となったものは検出されなかった。また遺物は雑然とした覆土中から特に集中することなく出土している。出土土器は堀之内I・II式である。第29図1は口縁部が無文となっており、2・3・8の胴部は地文に縄文を施し、そのうえに沈線による文様を



第23図 南区縄文時代土坑検出状況 (1/160)



第24図 南区検出土坑実測図①

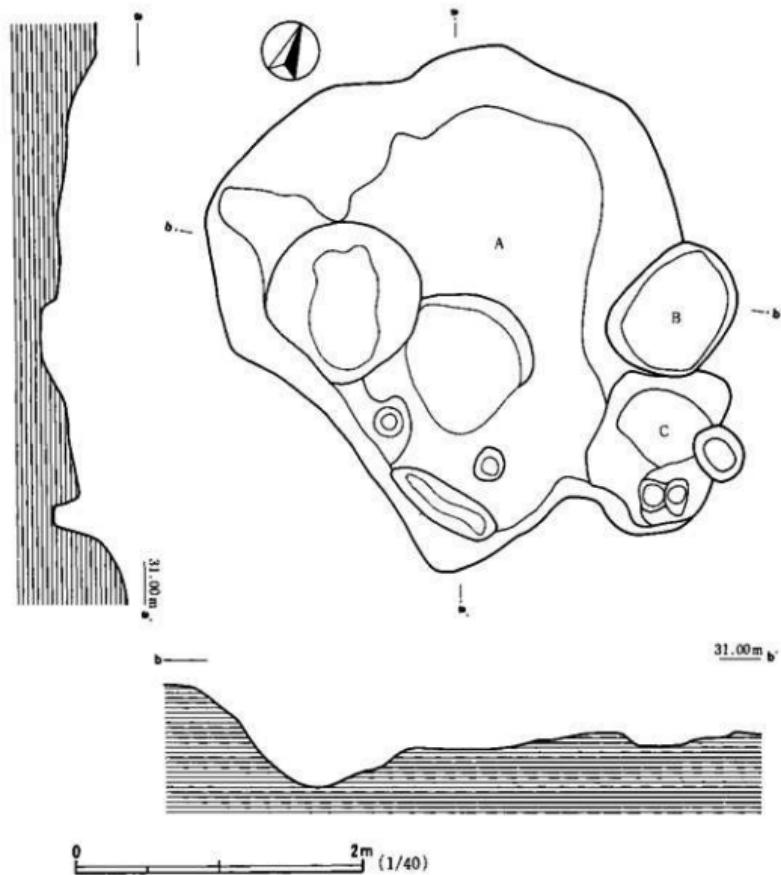


第25図 南区検出土坑実測図②

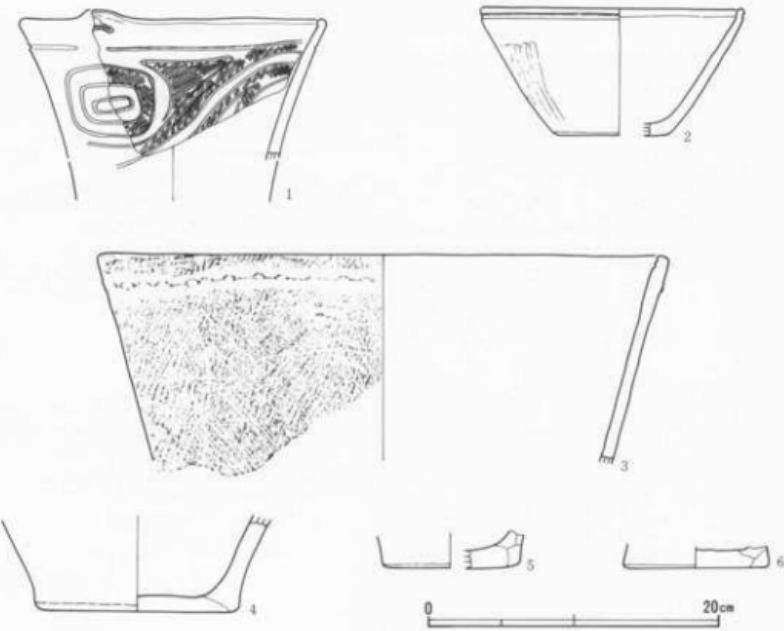


第26图 南区出土坑内出土土器拓影图 (1/3)

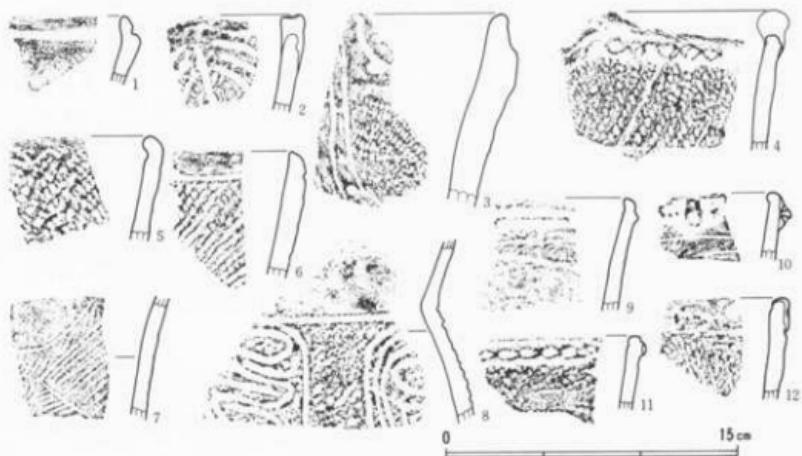
描き出している。いわゆる粗製土器では第28図3、第29図4・11、第30図13～16の口縁部に紐線文が付けられている。加曾利B式との区別が難しいところである。第28図2の鉢形土器は口縁部に凹線がめぐるが体部は無文となる。第30図17・18は磨石で18については両面中央部に凹部がみられる。石材は17が砂岩で18が安山岩である。



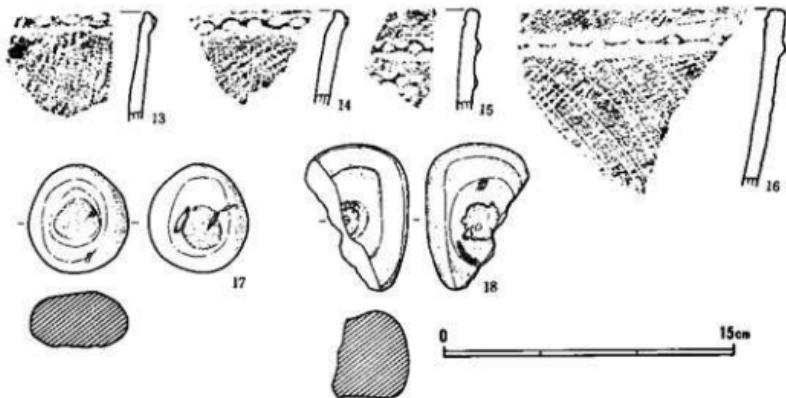
第27図 219号跡実測図



第28図 219号跡出土遺物実測図 (1/4)



第29図 219号跡出土遺物拓影図① (1/3)



第30図 219号跡出土土器拓影図②・石器実測図 (1/3)

219号跡出土土器 (第28図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・文様
1	深鉢	上半分	(21.0) — —	密 〔スコリア・長石〕 良 黄褐色	胴部はゆるやかに外側に反るように立ち上がり。口縁部は内側に曲げられて丸く終わる。口縁部に低い突起が1個遺存し、胴部は磨消繩文によって曲線的な文様が描かれる。
2	鉢	口縁一部 底部分	(17.0) (8.7) (7.1)	密(砂) 良 橙褐色	体部は直線的に立ち上がり。口縁部がやや上向き加減となり端部は丸く終わる。文様は口縁上部に一本の沈線文が一周するだけで他は無文となる。
3	深鉢	口縁部分	(39.0) — —	密(砂) 普通 暗褐色	胴部は直線的に立ち上がり。口唇部は角頭状となる。口唇部からやや下がった位置に縦線文が貼り付けられ胴部は纏文を地文とし、そのうえに纏位羽状沈線文が施される。

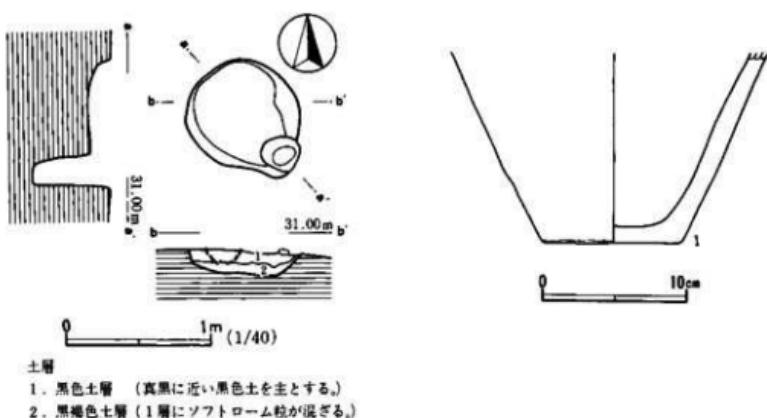
220号跡 (第31図、図版5)

(位置) G3-04グリッドに位置する。

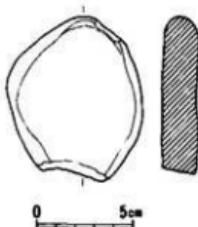
(遺構) 長径50cm、短径40cmを測り南東部分には深さ55cmのピットが掘り込まれている。しかしこの深めの小ピットが土坑に付属して設けられたものなのか別個の遺構なのかは明確ではない。他の部分では壁はゆるやかな傾斜で立ち上がっている。

(遺物出土状況と出土遺物) 検出面で第31図右の土器と第32図の石器が確認された。土器は大形の深鉢になると考えられるが底部だけが残されていた。土器の底面は土坑の底面には接しておらず、ちょうど2層の上位に乗るような状態で出土している。石器の石材は比較的偏平

な安山岩で、敲石として使用されていたかもしれないが、使用痕は不鮮明である。



第31図 220号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)



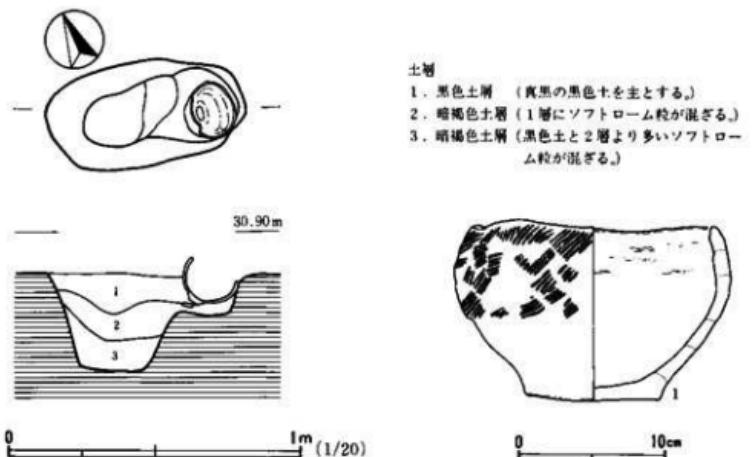
第32図 220号跡出土石器実測図 (1/3)

227号跡 (第33図、図版5)

(位置) G3-08グリッドに位置し、003号跡と接する。

(造構) 長径68cm、短径36cmの長楕円形の掘り込みを有し、東から西にかけて深くなり、最も深くなる部分で検出面から32cmとなる。長軸での断面形では西側で急な立ち上がりを示し、東側では一度底面から立ち上がり、テラス状に一段設けて再び急な角度で立ち上がる形となる。

(遺物出土状況と出土遺物) 本跡からは2点の遺物が出土した。2点とも一度段を設けた掘り込みの浅くなる部分で検出したものである。第33図右の鉢はほぼ完形で、やや傾き気味であったが正位に置かれ、もう1点はこの土器の底部の下から出土した破片である。



第33図 227号跡実測図・同出土遺物実測図 (1/4)

227号跡出土土器 (第33図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・文様
1	鉢	ほぼ完形	16.6 11.6 9.1	密(砂) 普通 暗褐色	全体に内湾しながら立ち上がり、上半部で大きく脹らんで口縁部に至る。口縁は液状とまではならないが平口縁となっていない。上半部は節の細い繩文を施す。(図版27)

240号跡 (第34図)

(位置) I2-04グリッドに位置し一部を505号跡によって切断される。

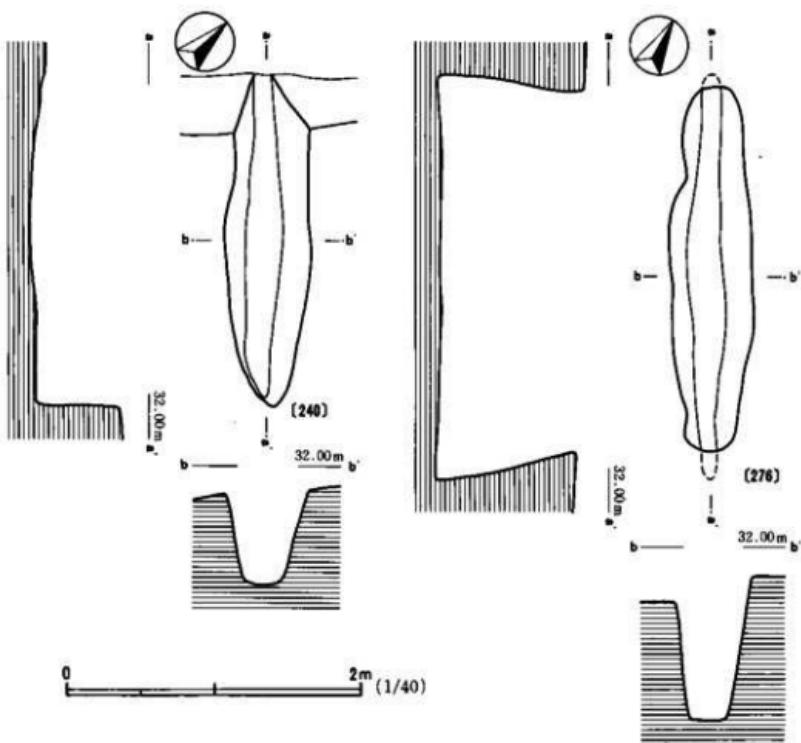
(構造) 長径は不明。検出面での短径60cm、深さ65cmで、底面の短径26cmを測る。平面形は長楕円形を呈し、壁は急な角度で立ち上がる。また長軸での方向はN-46°-Wを示す。底面は平坦にされ、小ピットなどは検出されていない。遺物は全く出土していないが、绳文時代の落し穴と考えられる。

276号跡 (第34図)

(位置) I2-05グリッドに位置する。

(構造) 検出面での規模は長径245cm、短径56cmを測り、深さは96cmとなる。平面形は長楕円形となり長軸方向はN-26°-Wを向く。底面では長軸方向の両端がオーバーハングされており長径274cm、短径22cmを測り、短軸方向の両壁は急激な立ち上がりを示す。底面は幅は狭い

が、平坦で、ピットなどは検出されなかった。覆土はロームブロックが主で、240号跡同様遺物は1点も出土しなかった。



第34図 240・276号跡実測図

(3) グリッド出土遺物

土器 (第35図～第46図)

グリッドから出土した土器は前期から後期にかけてであるが、前・中期は僅かで、後期が主体となっている。以下のように第I群から第IV群に分類した。

第I群土器 繩文時代前期の土器

第II群土器 繩文時代中期の土器

第III群土器 繩文時代後期前葉の土器

第IV群土器 繩文時代後期中葉～末葉の土器

第2表 南区検出縄文時代土坑・落し穴一覧表

番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	旧番号
211	F 3-19	35	32	18	396
212	F 3-19	25	21	17	395
213	F 3-19	37	35	43	394
214	F 3-23	63	45	46	397
215	F 3-25	82	26	21	389
216	F 3-24	100	80	53	390
217	G 3-04	113	96	43	387
218	G 3-04	52	50	55	388
219A	F 3-24	355	300	74	381
219B	F 3-23	97	72	12	391
219C	F 3-23	40	32	39.3	380
220	G 3-04	50	40	17.5	382
221	G 3-03	101	70	39	379
222	G 3-03	—	98	48	378

番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	旧番号
223	G 3-04	61	55	71	383
224	G 3-09	127	65	14	384
225	G 3-04	67	66	52	385
226	G 3-05	104	92	36	386
227	G 3-08	68	36	32	392
228	G 3-06	153	90	22	377
229	G 3-12	96	94	35	375
230	G 3-15	55	53	52	372
231	G 3-16	52	49	35	373
232	G 3-16-17	76	77	15	374
233	G 3-21	70	65	71	371
240	I 2-04	—	60	65	358
276	I 2-05	245	56	96	369

第I群土器（第35図1～20）

A類 黒浜式土器を本類とした(1～4)。同一個体と考えられ、胎土に纖維を含み、RLを原体とする縄文が施文される。

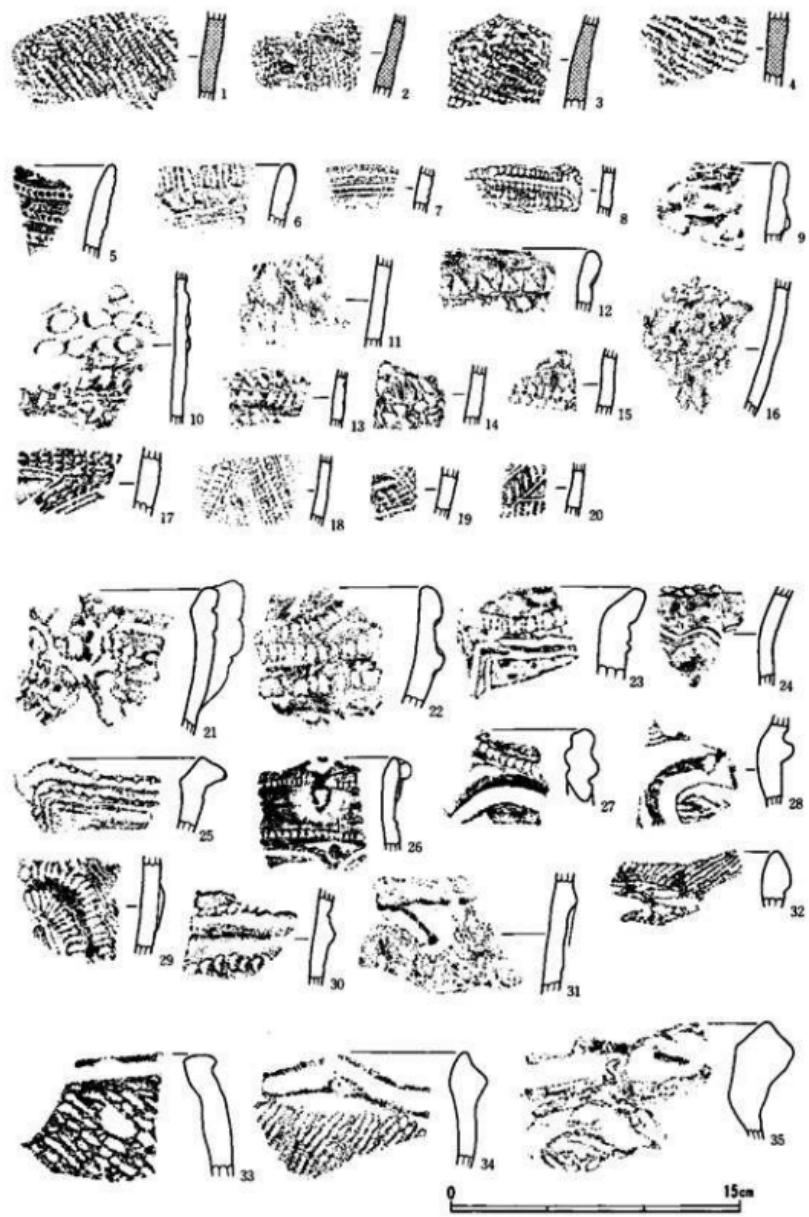
B類 諸磯式土器である(5)。半截竹管による連続爪形文を施した諸磯b式と考えられる細片である。

C類 浮島式土器を本類とした(6～16)。6は口唇部に刻み目が施され、7には有節沈線文が施されている。9・10は凹凸文が認められるもので、9は輪積み痕を残しそのうえに押捺を加え、10は左方向へ粘土を押し出すようにして凹凸を生んでいる。11は貝殻腹縁によって波状貝殻文が施文され、10・12～16はいわゆる三角文が描出されている。

D類 興津式土器を本類とした(17～20)。沈線文による文様が描かれ、そのなかに波状貝殻文が密に施文されているいわゆる磨消貝殻文の土器である。

第II群土器（第35図21～第36図63）

A類 阿玉台式土器を本類とした（第35図21～32）。21～23・27は幅広の角押文が施されている口縁部である。27はおそらく把手の部分と考えられる。25は隆起線文に沿って有節沈線が施文される。29・30の胴部には隆起線文に幅広の角押文、爪形文が付隨し、31は逆U字形に垂下する隆起線文が僅かに遺存している。32は口縁部にLRを原体とする縄文が施されている。全体に胎土に金雲母、長石などが含まれる。色調は暗褐色を呈するものが多い。32が阿玉台IV式、他は阿玉台II・III式に比定される。



第35図 第I群土器拓景図・第II群土器拓影図① (1/3)

B類 加曾利E式土器を本類とした（第35図33～第36図53・55～63）。33～35は口縁部上端に文様が配されているものである。33は沈線文が施され、34・35にはかなり外側に張り出す隆起線文が貼り付けられている。36～50は、いわゆるキャリバー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。36～41は発達した隆起線文によって渦文が作られている。42～44についても衰退をみせた低い隆起線文によって渦文、あるいは棒状となる文様が施される。45～50の口縁部の文様は隆起線文に代って刺突文や沈線文が口縁部を飾る。51～53、55～56の胴部は2本の沈線間に磨消しが入る。57～63は、断面が三角形となる隆起線文が文様を構成し、58・59の口縁部は無文となっている。僅かずつあるが古い段階から新しい段階に至る各型式が認められており、33～41は加曾利E I式、42～44・51～56はII式、45～50はIII式、57～63はIV式にそれぞれ比定されよう。

C類 曾利系の土器に含まれるものと本類とした（54）。胴部の破片で、縦方向に施文した条線文のうえに同じ方向に紐線文を貼り付けている。

第四群土器（第37図64～第41図169・第42図172～第43図205・第46図1～3）

本群は堀之内式土器を一括し、文様構成によりA類～G類に分類した。

A類 地文に繩文が施文されるものを本類とした（第37図64～第40図125）。

A-1 直線や曲線となる沈線文が施文されるものである（64～101）。器形は頸部を有し、口縁部が外反するものと、直線的に立ち上がるものとが認められる。また、口縁部の形態では波状を呈するものと、平口縁が存在している。さらに波状口縁のなかでも、64・77のようにゆるやかになるものと、83・84のように大きく波状を呈す二つが認められる。沈線文は口縁部に沿って施文されるものが多く、この沈線文は割に太いものである。曲線を描く文様は、64・67にUの字形の文様が配され、84・86～88には渦巻き状の文様が施文されている。91～101には縦方向に曲線文が施されている。

A-2 半截竹管状工具によって平行沈線が描かれるもの（102～114）。器形は、直線的に立ち上がって開くものが大部分で、僅かに109のように内傾するものも認められる。口縁部は平口縁で、沈線文は口縁部の上部で平行して施文されており、その下位では縦位あるいは斜方向へ配されている。

A-3 口縁部と平行する沈線文が施文されているもの（115～121）。115～117は頸部に巡らされ、118～121は口縁部に一条の沈線文が認められる。

A-4 口縁部に縦位の粘土紐が貼り付けられ、そのうえに押捺をえたものである（122）。

A-5 条線文が施文されているもの（123～125）。

B類 全面に繩文が施文される土器である（第40図126～143・第46図1・2）。器形では直線的に立ち上がるものが多く、他に外反するものと、ゆるやかに内傾する口縁部が認められる。

C類 沈線文によって文様が構成されるものである（第40図・144～第41図160・第46図3）。

C-1 直線や曲線が組み合わさって文様が構成されているもの（144～150・159・160・第46図3）。第46図3の鉢形土器は上・下の平行沈線文帯の中間に曲線文が展開している。

C-2 曲線によって文様を構成するもの（151・152）。

C-3 雜な沈線文が施文されているもの（153）。

C-4 櫛齒状施文具による条線文が施文されているもの（154～158）。

D類 刺突が沈線文のみが施され、他は無文となっている口縁部である（第41図161～169）。

E類 磨消繩文によって幾何学的文様が描かれる土器である（第42図172～196）。

E-1 曲線的な文様構成をとるもの（172～174）。

E-2 三角形に近い文様構成をとるもの（175～196）。178～182の口縁部には、細い紐線文が付けられ、180・182にはさらに8の字形貼付文が加えられている。183は幾何学的文様の空間に沈線文が充填される。器形はE-1・2とも口縁部はゆるやかに開きながら立ち上がり、口唇部は内側に曲げられた形となる。

F類 口縁部は細い紐線文によって飾られ、やや間隔を置いて磨消繩文帯を配すものである（第42図197～第43図203）。201は波状口縁を呈し、紐線文が三段に施されていて、磨消繩文も平行施文とはならないようである。

G類 口縁部に細い紐線文が貼り付けられ、地文に繩文が施文されているものである（第43図204・205）。204は紐線文上に8の字形貼付文が付けられ、そこから垂下する沈線文が認められる。2点ともゆるやかに外反して開く口縁部である。

第IV群土器（第41図170・171・第43図206～第45図288・第46図4）

本群は後期中葉～末葉の土器を一括した。

A類 加曾利B式土器を本類とした（第41図170・171・第43図206～第45図270・第46図4）。

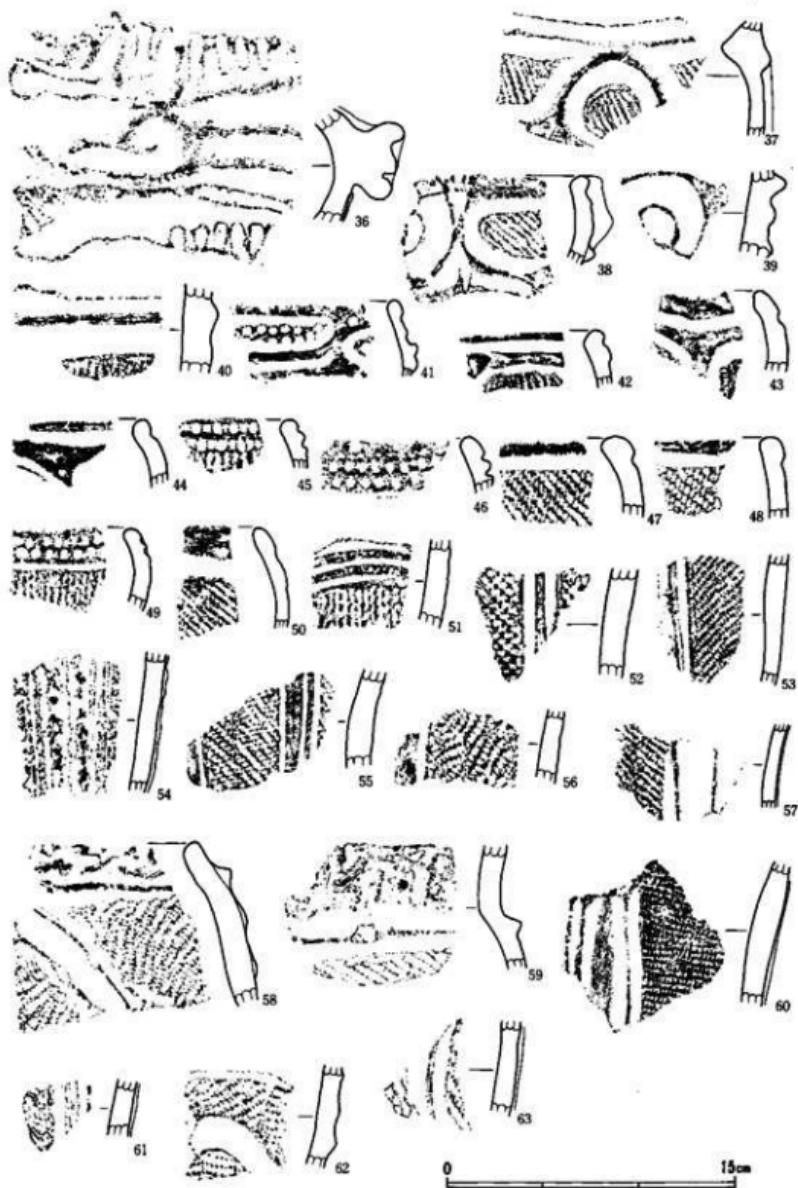
A-1 外面は丁寧に研磨が施されるだけで、内面に文様が施文されるものである（第41図170・171・第43図206～212）。第41図170・171は沈線文によって曲線的な文様が描かれ、他は口縁部と平行する沈線文が数段ずつ施されている。206～212の器形は、底部から胴部下半にかけては急角度で立ち上がり、途中から徐々に外側に開いて口縁部に至る形になると思われる。

A-2 平行沈線文によって画された繩文帯をもつものと、それに磨消による無文帯が設定されるものである（213～227）。215～217・224のように縦方向の区切りの沈線文が付くものも存在する。器形は深鉢になるものと、体部が大きく開き口縁部で内湾する鉢形土器とが認められる。214については第III群に含まれるかもしれない。

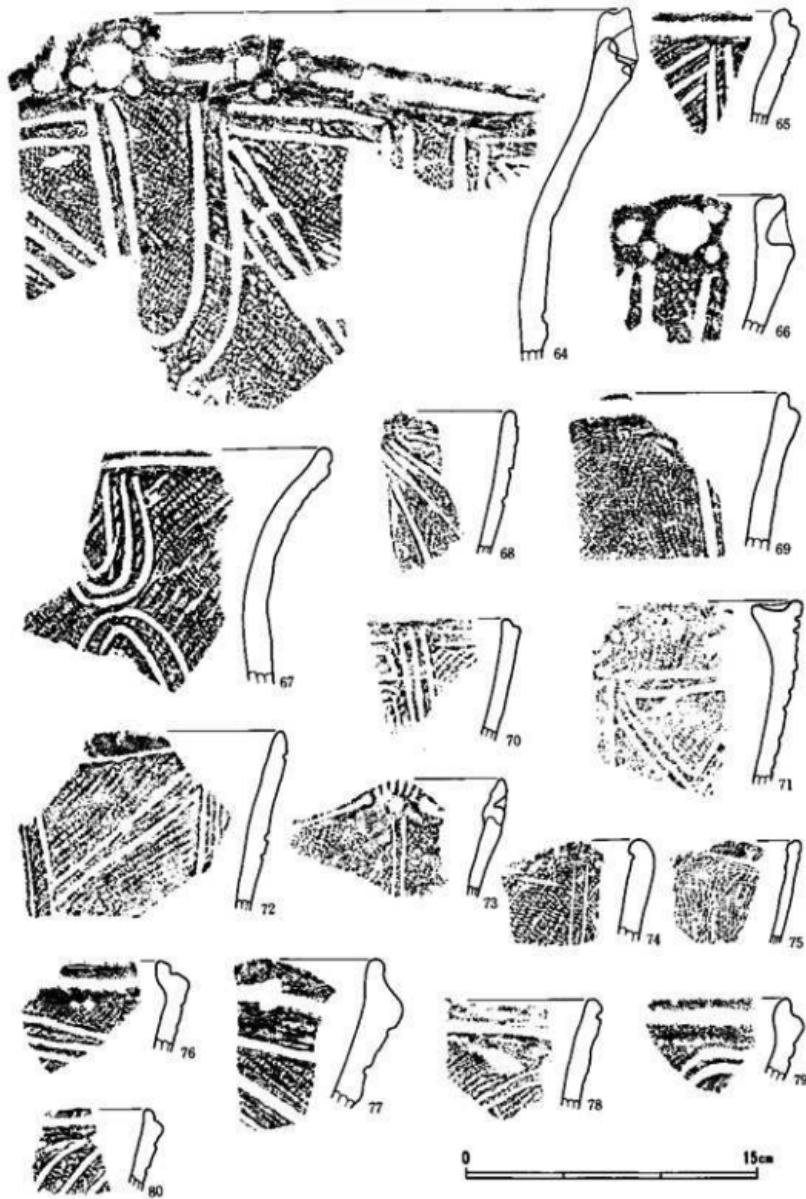
A-3 口縁部が無文となり体部に繩文が施文される鉢形土器である（228）。

A-4 内湾する口縁部に沈線文が施されている鉢形土器である（229～232）。

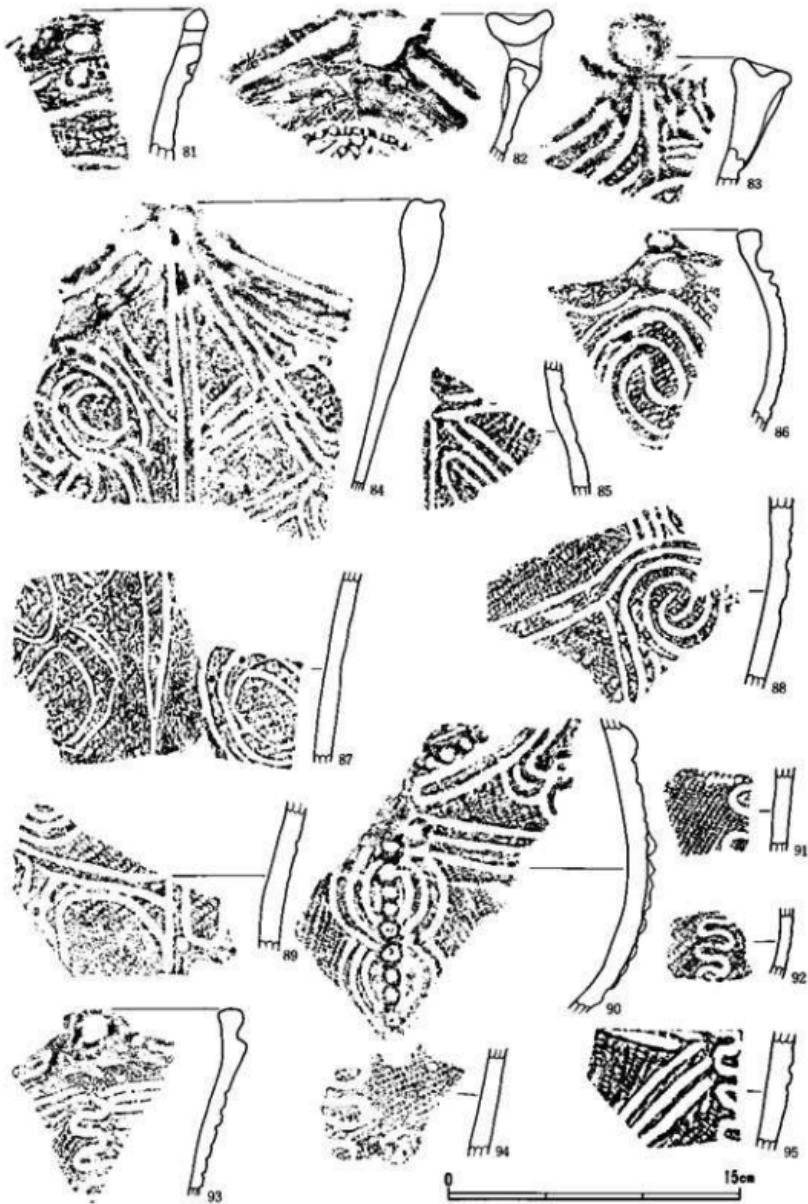
A-5 無文の鉢形土器である（233～234）。



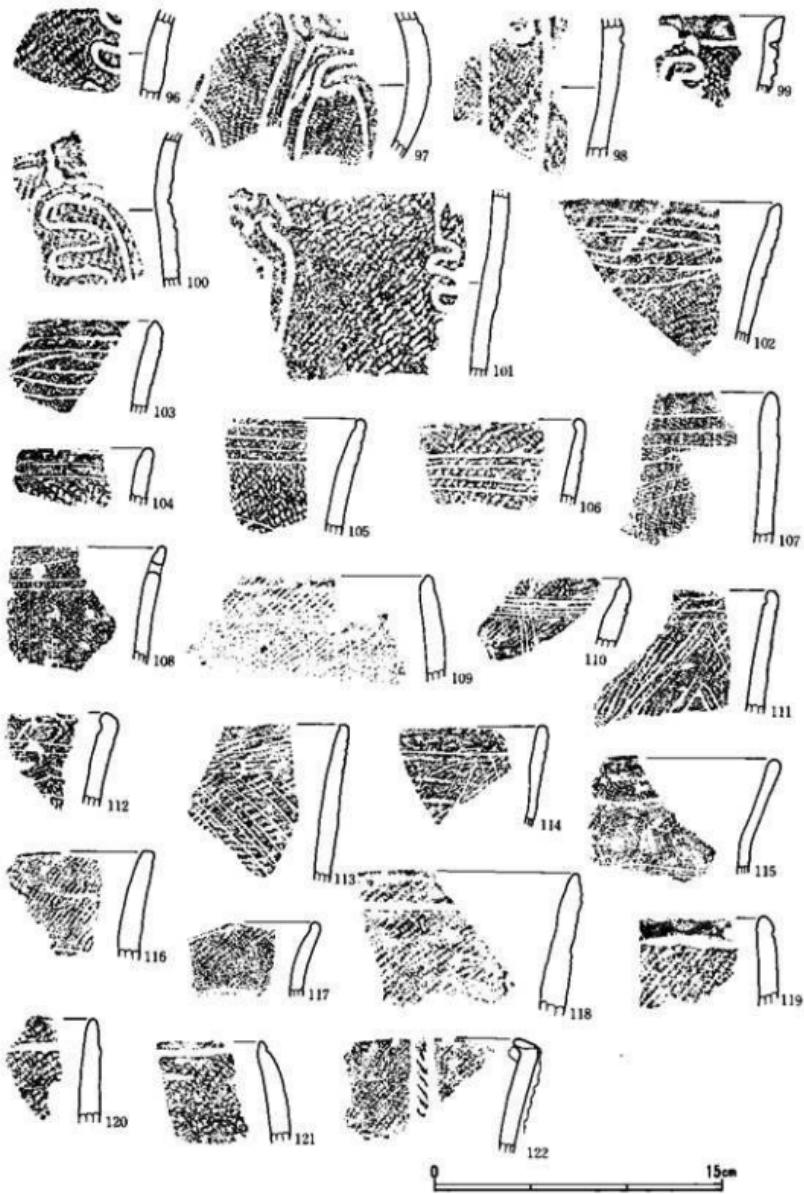
第36図 第II群土器拓影図② (1/3)



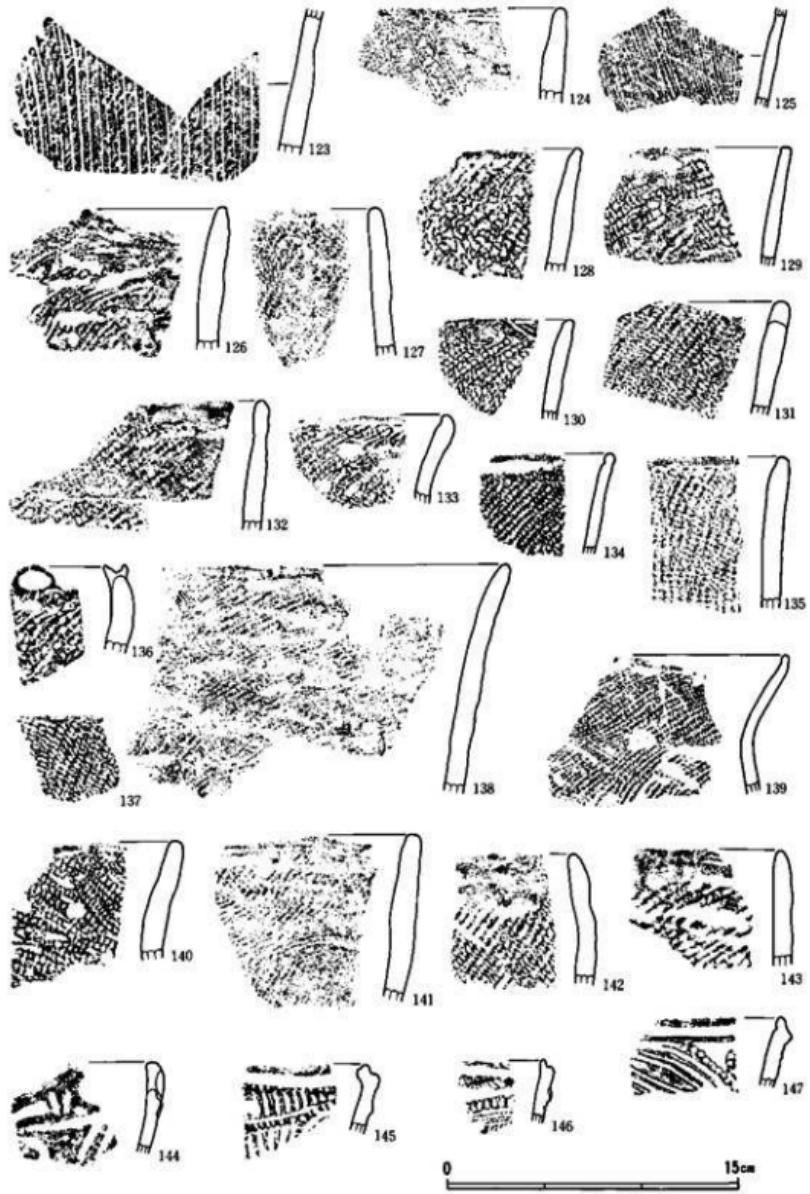
第37图 第三群土器拓影图① (1/3)



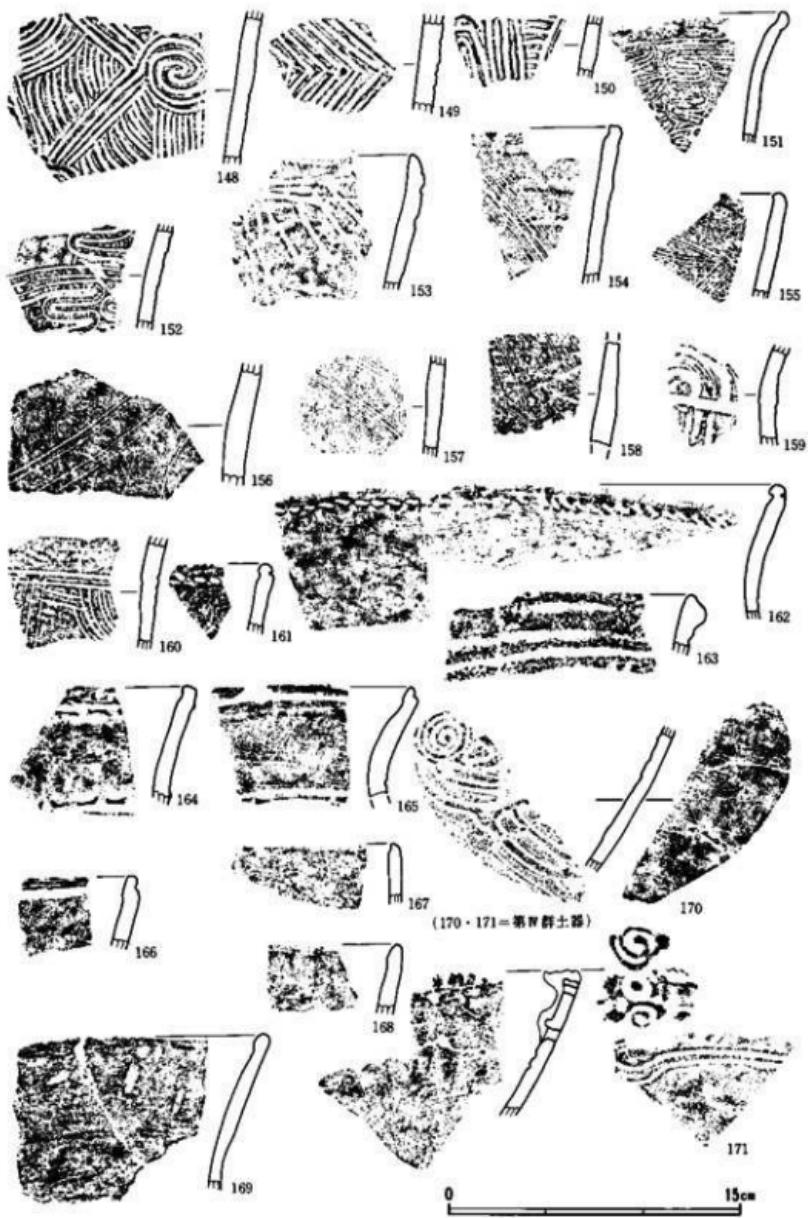
第38図 第Ⅲ群上器拓影図② (1/3)



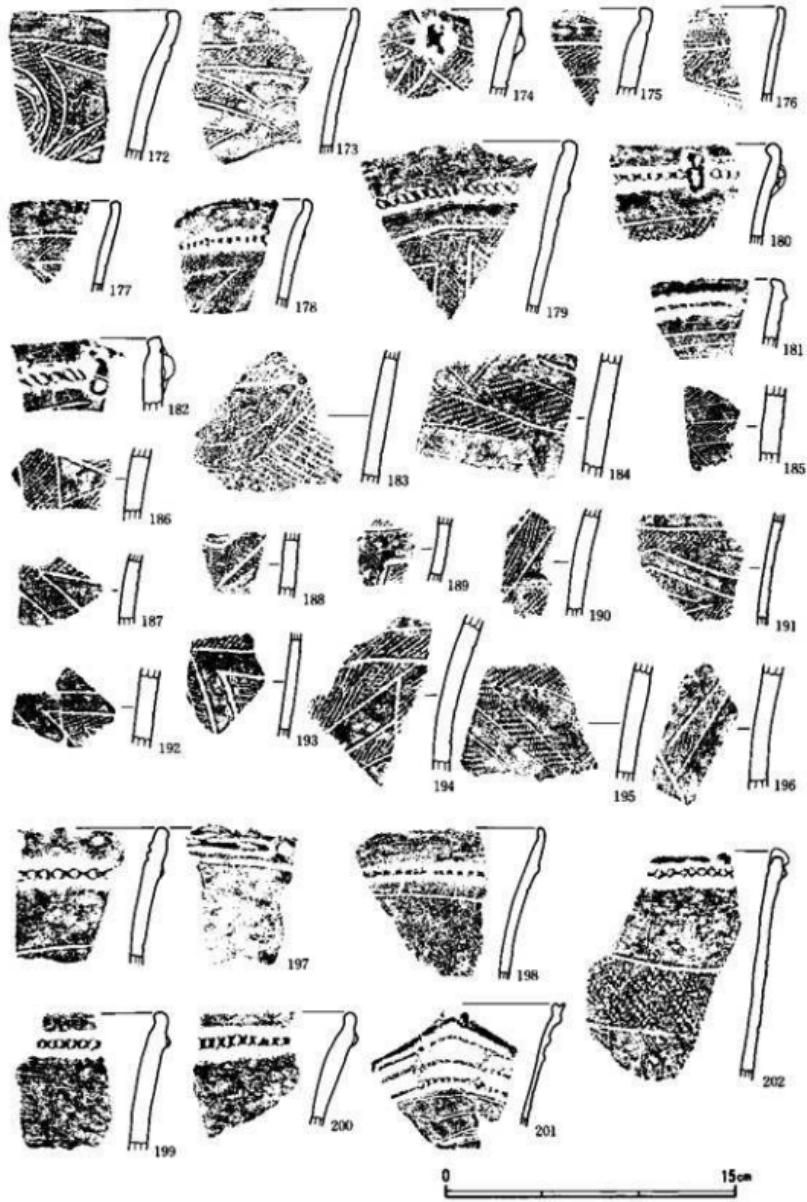
第39図 第Ⅲ群土器拓影図③ (1/3)



第40图 第Ⅲ群土器拓影图④ (1/3)



第41図 第Ⅲ群土器拓影図⑤ (1/3)



第42圖 第三群土器拓影圖⑥ (1/3)

A-6 口縁部と胸部に文様帯が設けられ、頸部を無文とするものである（235～237）。235は繩文、236・237は沈線文が施されている。

A-7 沈線文のみが認められるもの（238・239）。

A-8 口縁部に沈線文によって画された帶状繩文が施され、無文帯を中心にしてその下部に沈線文が施されるものである（240）。

A-9 磨消繩文に、口縁部や頸部に刻み目が加えられ文様を構成するものである（241～251）。器形は深鉢と、胸部が張り出し、頸部でかなり絞られ、再び口縁部が大きく開く鉢形土器とが認められる。

A-10 異形台付土器である（第46図4）。

A-11 口唇部に刻み目が施され、体部に斜行沈線文が走る鉢形土器である（252～254）。

A-12 いわゆる粗製土器である（255～270）。255～258は口縁部の上端に1段紐線文が貼り付けられ、これを2段としているのが259～263である。264～267は節の荒い原体を用いて施文した地文のうえに沈線文が引かれている。269には細い沈線文が横走し、270は格子目状に施文されている。

B類 安行式土器を本類とした（第45図271～288）。

B-1 口縁部に帶繩文が巡るものである（271～278）。271・272には突起が付けられている。

B-2 口縁部に紐線文が貼り付けられ、その下位に沈線文が施文されているものである（279～282）。

B-3 おそらく2段の紐線文が貼り付けられていたと考えられ、その間が文様帯となる粗製土器である（283～288）。

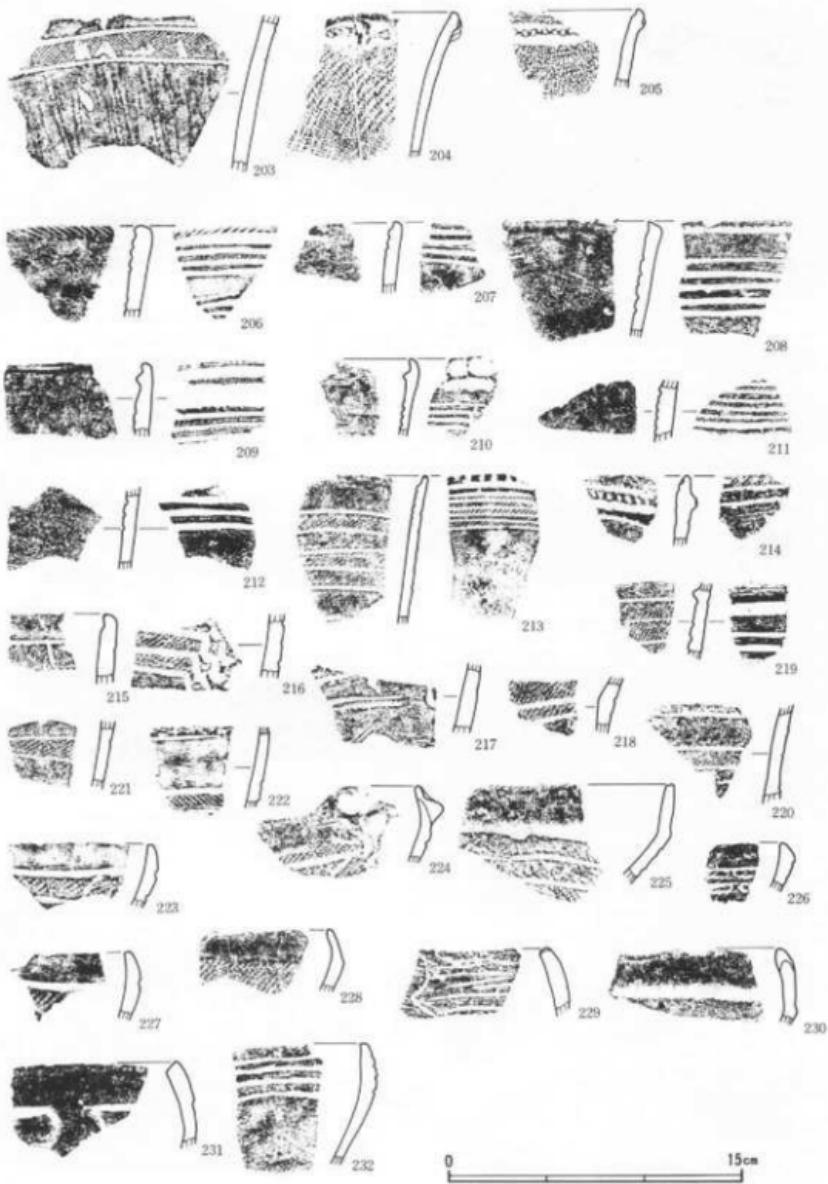
石器（第47図～第49図）

グリッドから出土した石器は、破片となっているものも含め総数で51点と少ない。その内訳は、打製石斧1、磨製石斧3、敲石3、磨石19、凹石2、石皿6、石錐1、スクレイパー1、剝片15となっている。

打製石斧（第47図1）。唯一の打製石斧である。形はいわゆる分銅形に整えられている。両面に自然面を残し、刃部は使用のため丸味を帯びる。石材は凝灰岩で、器長9.4cmを測る。

磨製石斧（第47図2～4）。2・3は基部が中程で折れており、刃部のみが遺存している。2点とも刃こぼれがみられ、3は側縁部にもそれが認められる。石材は2が凝灰岩で、3は安山岩を使用している。4は碧玉製で、器長5.6cmの大変小形のものである。丁寧に作られており、刃こぼれもみられないで実用品ではなかったと考えられる。

敲石（第47図5～7）。5・7は長軸方向の両端を主な使用部位にしていると考えられる。石材は両方とも安山岩である。7は砂岩の自然石を用いており、使用中に割れたものと思われる。



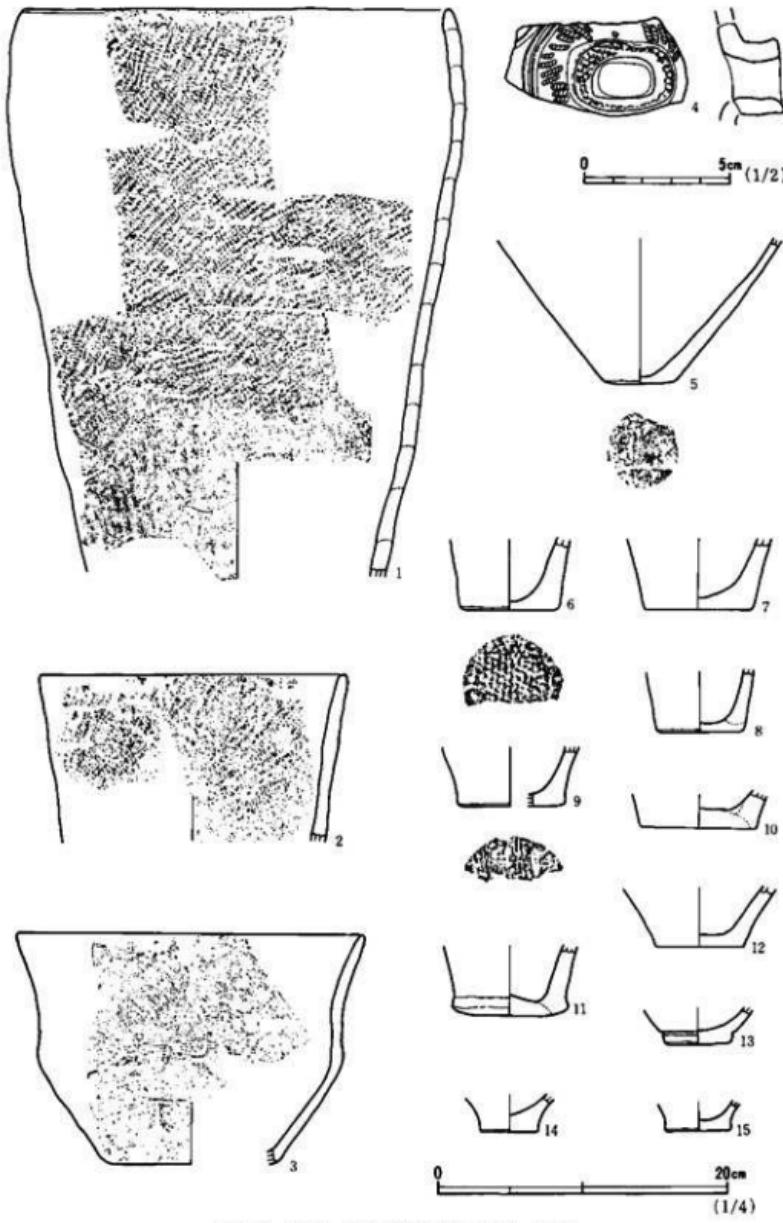
第43図 第III群土器拓影図⑦・第IV群土器拓影図① (1/3)



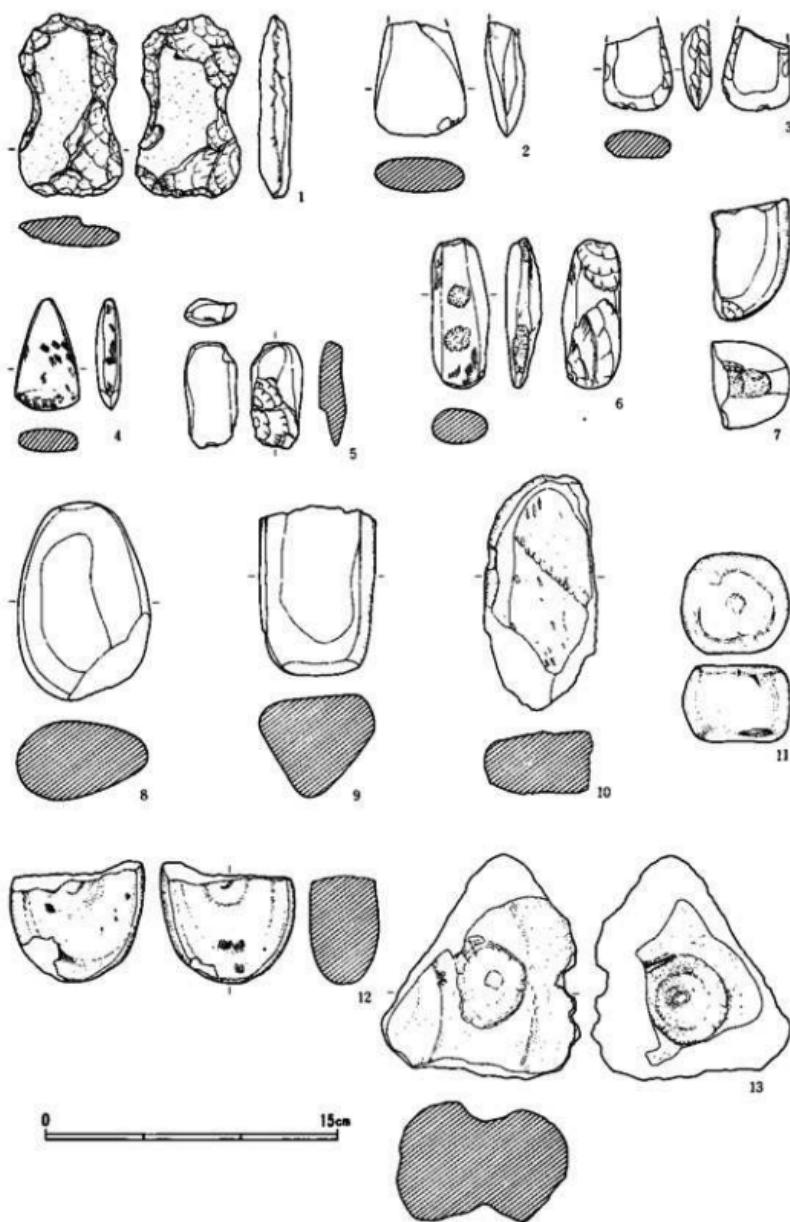
第44図 第IV群土器拓影図② (1/3)



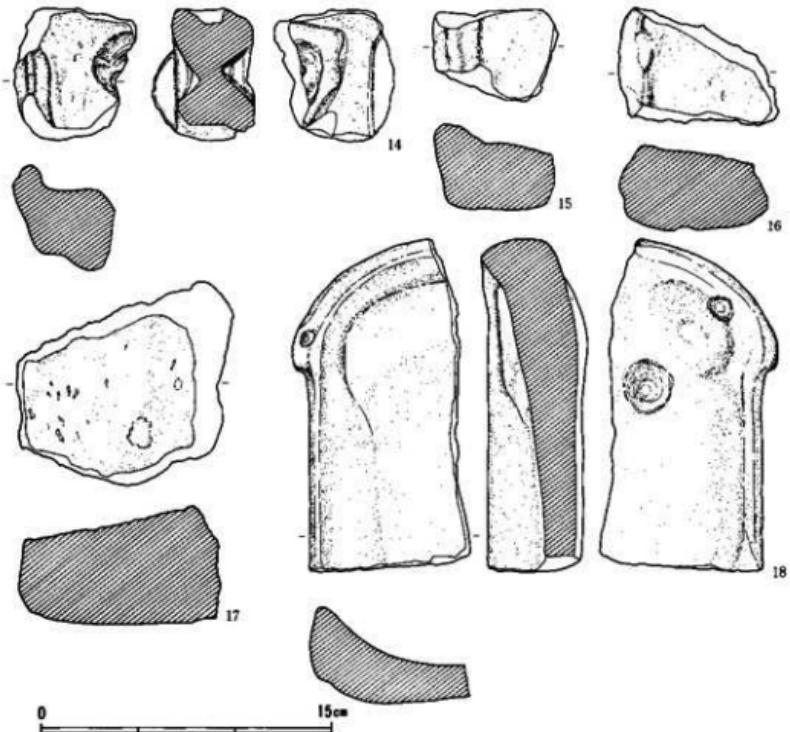
第45図 第IV群土器拓影図③ (1/3)



第46圖 第III・IV群土器実測図 (1/4)・(1/2)



第47図 石器実測図① (1/3)



第48図 石器実測図② (1/3)

磨石(第47図8~12)。形態は様々となっている。石材は8が砂岩である他は、すべて安山岩である。また安山岩でも9のみが表面が密な状態を呈しており、図示していない15点も含めると、多くは10のような多孔質の石材が使用されている。11・12の両面中央部には僅かな窪みが認められる。完形となっているのは11の1点で、長径5.5cm、短径4.95cm、厚さ3.8cmを測る。

凹石(第47図13~第48図14)。石皿からの転用である。いずれも両面に凹部をもつ。石材は安山岩。

石皿(第48図15~18)。完形となるものはなく、それぞれ石皿の一部分にすぎない。15・16・18には縁が作り出され、特に18には脚も存在し、かなり丁寧な作りであったことが窺われる。いずれも多孔質の安山岩に加工を施したものである。

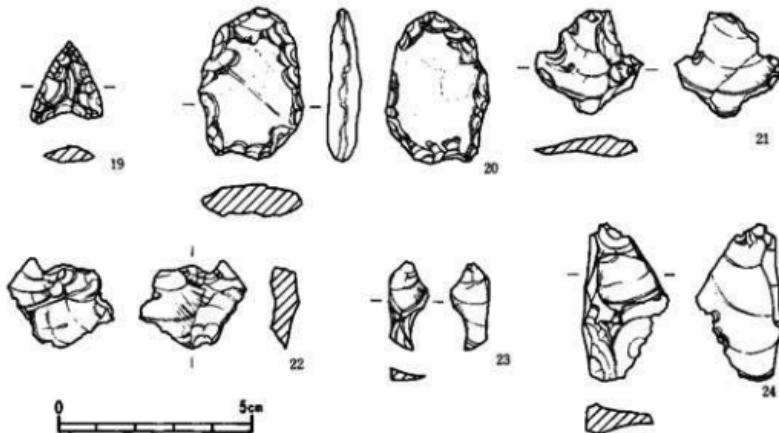
石鎌(第49図19)。チャート製で完存している。基部に抉りが付けられるがそう深くはならぬ。

スクレイパー（第49図20）。偏平なメノウの自然石の周辺に刃部を作出し、横円形に近いラウンドスクレイパーに加工している。器長3.84cm、器幅3.65cm。

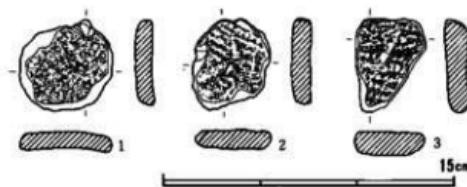
剝片（第49図21～24）。石材は21～23が黒曜石で、24はチャートである。

土製品（第50図）

グリッドから出土した土製品としては1～3の土器片錐が出土したにすぎない。また完存しているものは認められず、紐掛けの刻みもどちらか一方が残っているだけである。2は4カ所に刻みを有していたと思われる。



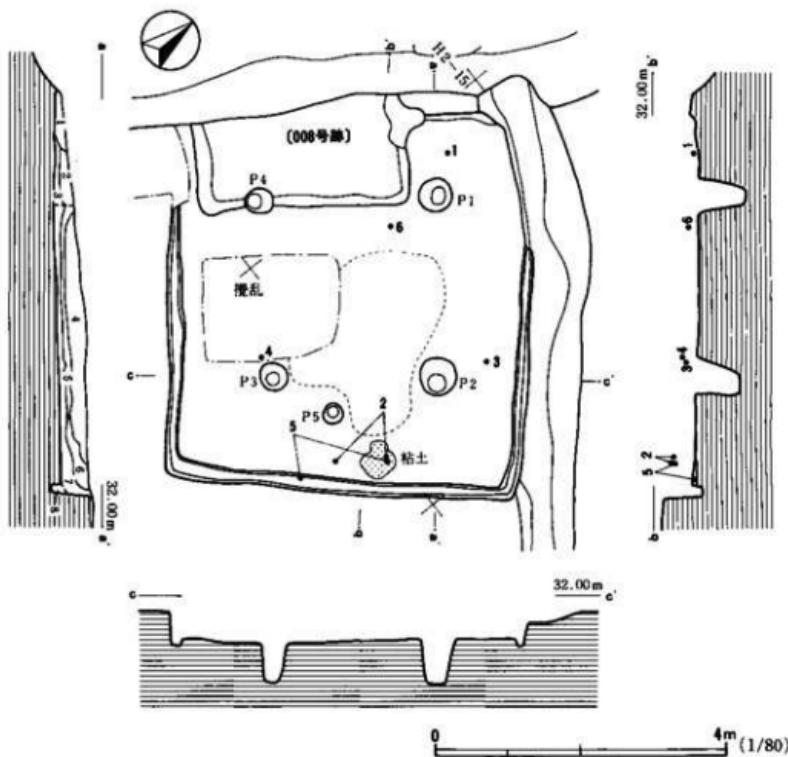
第49図 石器実測図③ (2/3)



第50図 土製品実測図 (1/3)

2. 古墳時代

古墳時代の遺構は、後期に比定される堅穴住居跡4軒のみである。4軒とも南区の中央部で検出されているが、集中してはいない。そのうち3軒については、出土遺物及び主軸方向が極めて近似し、ほぼ同時期と考えられる。



土層

1. 黒灰色土層 (山砂を多く含む黒色土を主に燒土粒が含まれる。)
2. 黒色土層 (全体に砂質の黒色土に燒土粒、小ロームブロックを含む。)
3. 黑褐色土層 (砂質の黒色土を主として燒土粒、ローム粒を含む。)
4. 黑色土層 (全体にしまりの弱い黒色土に小ロームブロックが多く含まれ、また僅かに燒土粒も含む。)
5. 黑褐色土層 (4層よりローム粒が多く含まれ、燒土粒、炭化物片を含む)
6. 暗褐色土層 (ローム粒を主として小ロームブロックが含まれ、黒色土が僅かに混ざる。)
7. 暗黄褐色土層 (ソフトロームを主とし、6層より少量の小ロームブロックを含む。)
8. 暗黄褐色土層 (ソフトロームを主とする。)

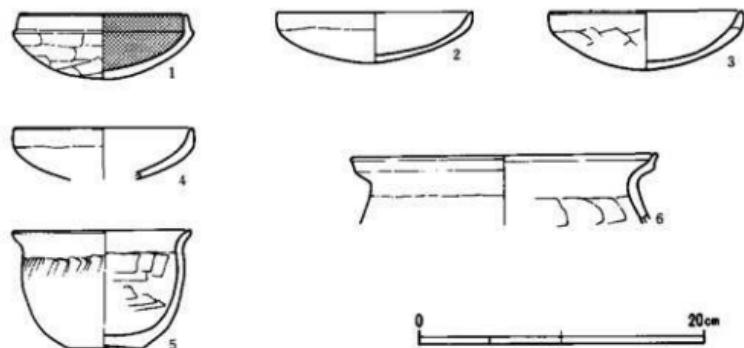
第51図 009号跡実測図

009号跡 (第51図、図版6)

(位置) H2-14グリッドを主に位置する。008号跡、506号跡と重複関係にあり、その両方に切かれている。

(遺構) 北西-南東で4.80m 南東壁で4.60mを測り、正方形に近い整った平面形を呈する。北西側には008号跡と攪乱があり、北東壁の半分は506号跡によって切られる。それ以外では壁の遺存も良好で、南東コーナー部で40cmの壁高を示し、立ち上がりは垂直に近い。壁溝は一部を除き検出され、幅、深さとも比較的変化はない。床は中央部で硬質な面が認められ、壁に近づくにつれ軟らかくなる。P1, P2, P3, P4は柱穴となり、柱穴間の間隔は240cm前後を測る。また入口と考えられる方向にP5が検出されている。カマドは北西壁に構築されていたと考えられるが、008号跡の構築によって完全に消失している。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から土器が出土しているが量は多くない。床面に近い位置からは図示した遺物が出土し、これらが本跡に伴う遺物と考えられる。またP5と壁の中間から灰白色の粘土が床に貼り付いた状態で検出されている。



第52図 009号跡出土遺物実測図 (1/4)

009号跡出土土器 (第52図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	11.8 4.45 —	密(小石) 普通 外面 黒色 内面 黒色	体部は全体に丸味をもち、口縁部との境に外に張りだす棱を設ける。口縁部は直線的に内傾。外面体部はヘラケズリの後軽いミガキ。口縁部ヨコナデ。内面ヘラミガキの後黒色処理。(図版43)
2	杯	%	13.8 3.5 —	密 普通 茶褐色	体部はゆるやかな丸味をもち、口縁部は弱い棱から短く立ち上がる。外面体部はヘラケズリの後ミガキ。口縁部はヨコナデ後ミガキ。内面は全体にヘラミガキ。

3	杯	%	13.5 4.0 —	密 普通 外面 暗褐色 内面 赤褐色	体部はゆるやかな丸味をもち、口縁部は弱い棱から直立気味に立ち上がる。口唇部は尖り気味となる。外面体部はヘラケズリの後ミガキ。口縁部はヨコナデ後ミガキ。内面は全体にヘラミガキ。
4	杯	%	(12.5) (3.6) —	密(スコリア) 普通 茶褐色	体部はゆるやかな丸味をもち、口縁部は弱い棱から直立気味に立ち上がる。外面体部はヘラケズリの後ミガキ。口縁部はナデ痕を残さないミガキ。内面は全体にヘラミガキ。
5	小型甕	%	12.5 8.0 5.2	密(砂) 普通 外面 暗褐色 内面 黒褐色	安定した底部から胴部は僅かに内湾するように立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。外面体部は斜方向へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。内面体部はヘラナデ。口縁部ヨコナデ。(図版43)

017号跡 (第53図、図版6)

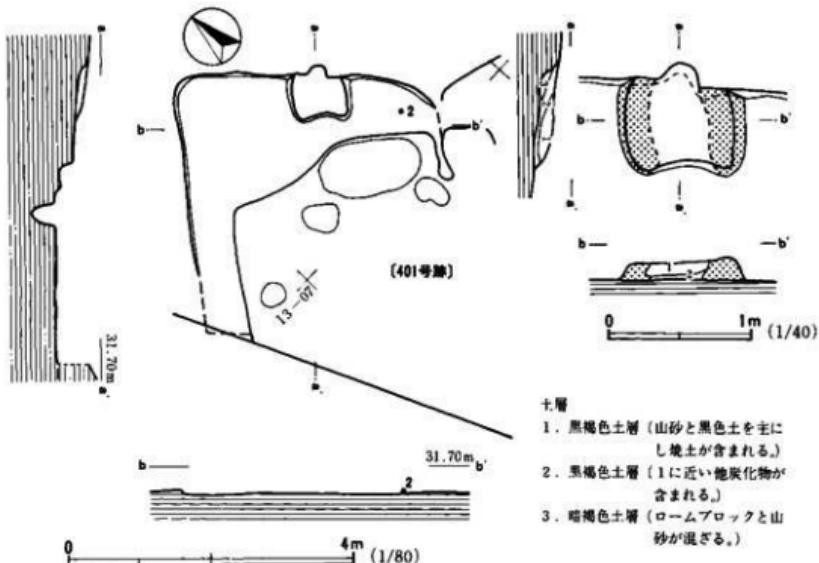
(位置) I 3-01グリッドを主に位置する。019号跡、及び401号跡と重複関係にあり、401号跡によって切られていることは明らかである。

(遺構) 大部分が401号跡によって切られているので規模は明らかでない。遺存する部分から復元すると、一辺3.50m前後の不整な隅丸方形になると想われる。検出面から床面までは良く残る部分で10cm程である。また壁が遺存するところでも壁溝は検出されていない。床面はカマドの前面など平坦に構築されているがやや軟弱で、固くなる範囲は観察されなかった。柱穴は1ヵ所も検出されず、また貯蔵穴などの施設も発見されなかった。カマドは北東壁に設けられる。袖は山砂を主にロームブロックが混ざり、現況での焚口の幅は42cmで、壁への掘り込みは20cmを残している。

(遺物出土状況と出土遺物) 遺物は図示した2個体が出土しているにすぎない。2はカマドの右側の床面上に押しつぶされたような状態で出土したものである。

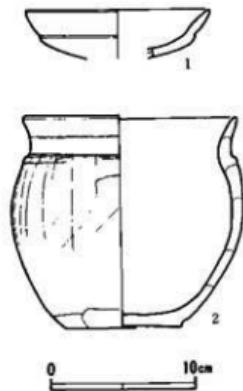
017号跡出土土器 (第54図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	(12.9) (3.3) —	密(長石) 普通 暗茶褐色	体部は浅くゆるやかに開き、口縁部との境に僅かに張り出す棱を設ける。口縁部は直線的に外側に開き、口唇部は尖り気味となる。外面体部はヘラケズリの後ミガキ。口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後全体にミガキ。
2	甕	完形	14.9 14.4 8.0	密(砂) 普通 茶褐色	安定した底部から胴部はそう張ることなく内湾しながら立ち上がる。最大径を中位からやや上に置き、口縁部は僅かに外反して開く。外面胴部は斜方向へのヘラケズリの後ナデ。口縁部ヨコナデ。内面胴部はナデ。口縁部ヨコナデ。(図版43)



第53図 017号跡実測図・同カマド実測図

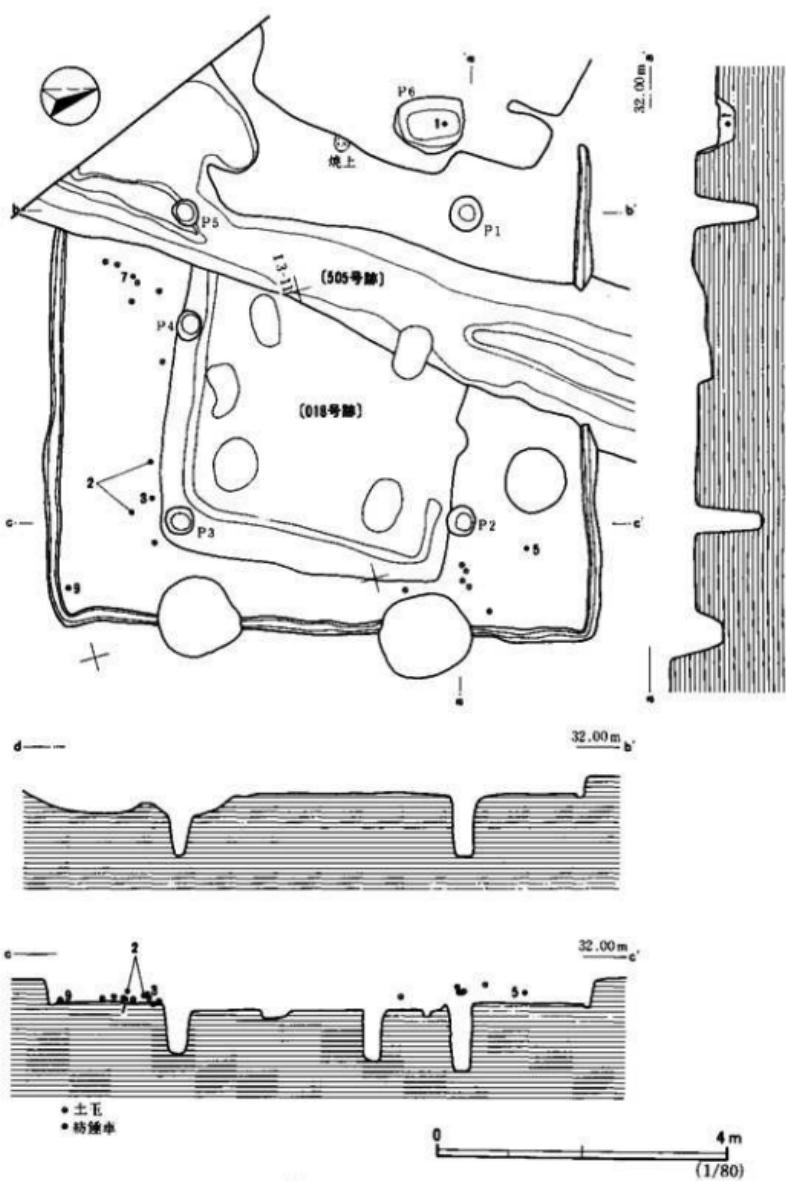
019号跡 (第55図、図版7)



第54図 017号跡出土遺物実測図 (1/4)

(位置) 12-10+15グリッドを主に位置する。本跡周辺からは多数の遺構が検出されており、017, 018, 241, 242, 244, 401, 505号跡と重複関係にある。017号跡との新旧関係は検討を要するが、他の遺構については本跡より新しくなることは確実である。

(遺構) 上述のとおり本跡は他の遺構によって大部分が切断されている。かろうじて規模をとどめた東壁では7.55mを測り、全体としても整った正方形に近い平面形を有していたと考えられる。壁については遺存する部分では垂直に近い立ち上がりを示し、浅めであるが壁下に溝が検出されている。遺構中央部は018号跡が構築されたため、広範囲で本来の床面が失われている。壁側を沿うような状況で遺存する床面はやや軟弱となっている。本跡に伴うと考えられ



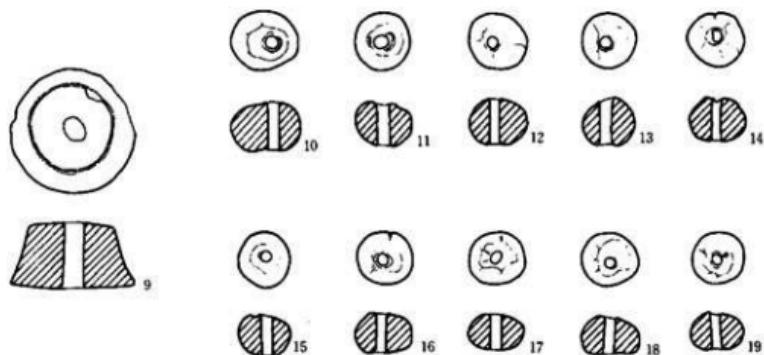
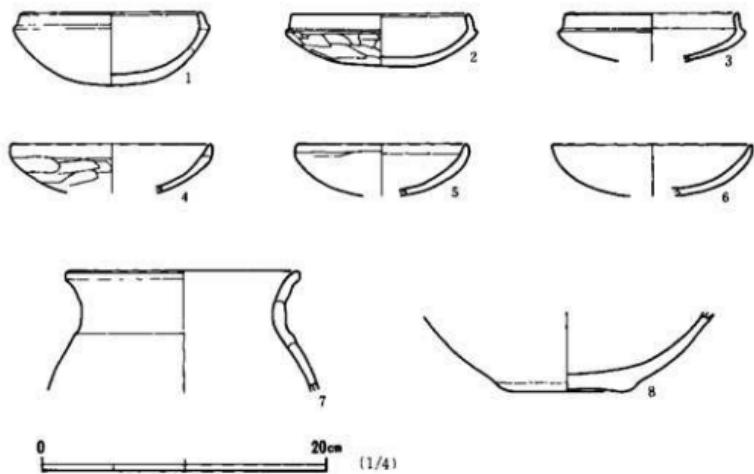
第55図 019号跡実測図

るピットは5カ所検出されている。P1, P2, P3, P5は柱穴と考えられ、P4は36cmの深さを有するが他のピットよりは浅く、補柱穴となる可能性が強い。各柱穴間はほぼ400cmで、かなり整然とした配置が窺われる。P1の西側には貯蔵穴が設けられている。カマドは全く遺存しないが、西側に焼土が残る部分もあるため、状況からして西壁の中央に構築されていたと思われる。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から出土している以外では、401号跡の床面下に残されていた貯蔵穴中から杯が1点出土している。また覆土中及び床面から土鍤が出土しているが、それらは2ヶ所で集中するように検出されている。南東コーナー部の床面から出土した土製紡錘車9は、上面径2.9cm、下面径4.4cm、高さ2.3cmを測る。

019号跡出土土器(第56図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	12.8 5.1 —	密(スコリア) 普通 黒褐色	体部は半球状に丸味を有し、口縁部との境に弱く張り出す棱を設ける。口縁部は後部から直線的に内傾する。外面体部はヘラケズリ後ミガキ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面全体にミガキ。(図版43)
2	杯	%	12.7 3.6 —	密(スコリア) 石英 外面 黒色 内面 黑褐色	体部下半は平坦に近く、上半は内湾気味に立ち上がり口縁部との境に外側に張り出す棱を設ける。口縁部は後部から内傾し、全体に浅めとなる。外面体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面全体にミガキ。(図版43)
3	杯	%	(12.2) (3.3) —	密(長石) 良 暗褐色	体部はゆるやかに開き、口縁部との境に外側にやや強く張り出す棱を設ける。口縁部は後部から途中で器厚を増して内傾する。外面体部はヘラケズリの後ミガキ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面丁寧なミガキ。
4	杯	%	(14.1) (3.5) —	密(長石) やや不良 暗褐色	体部上半はゆるやかに開いてゆき。口縁部は短く上につまみ上げられるように立ち上がる。口縁部は尖り気味となり先端は丸味をもつ。外面体部ヘラケズリの後ナデ。口縁部ナデ。内面全体にミガキ。
5	杯	%	(12.0) (3.7) —	密 良 暗茶褐色	体部は全体に丸味をもって開き、口縁部との境には明瞭な棱は設けず、短く上につまみ上げたように口縁部を立ちがらす。外面体部ヘラケズリ後ミガキ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面全体にナデ。
6	杯	%	(14.2) (3.6) —	密 やや不良 黒褐色	体部は半球状に丸味を有し、特に口縁部との境は設けず口縁部に至る。外面全体にヘラケズリの後ミガキ。内面全体にヨコナデ後ミガキ。
7	甕	上半のみ	(16.4) — —	密(長石・石英) 普通 明茶褐色	あまり張りをもたない肩部から頸部は直線的に立ち上がり、ゆるやかに外反して口縁部は開く。外面肩部ヘラケズリの後ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。
8	甕	底部全周	— — 9.3	密(長石・石英) 普通 茶褐色	安定した底部から湾曲しながら大きく外側に開いてゆく。外面は縱方向のヘラケズリの後一部に難なミガキ。内面ヘラナデ。



第56图 019号路出土遗物实测图 (1/4)•(1/2)

026号跡（第57図、図版8）

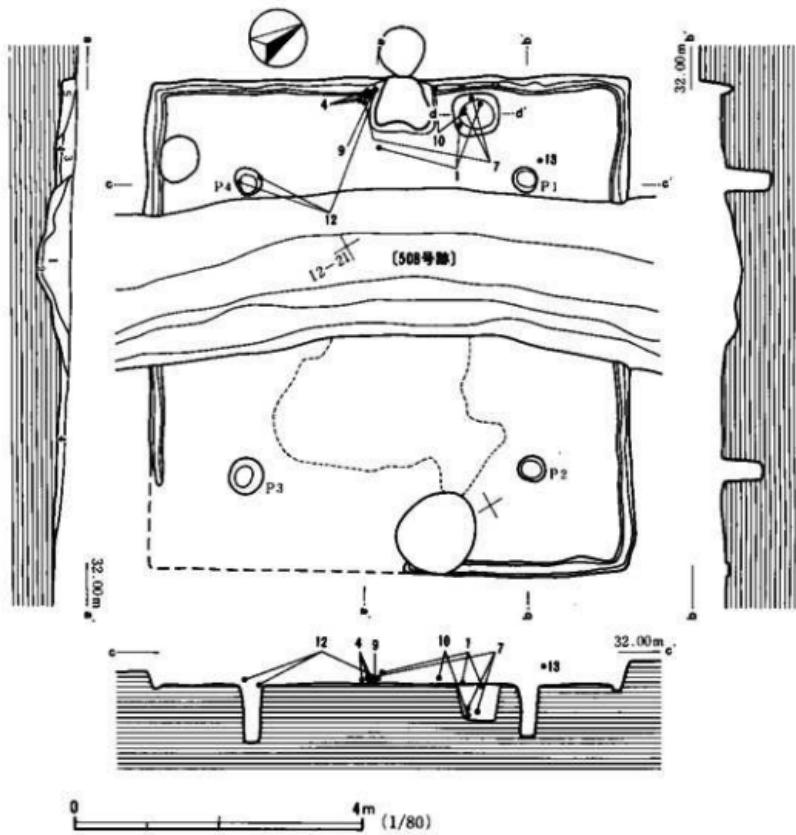
（位置） 11-20・25グリッドを主として位置する。横断するような形となっている508号跡のほか、263、274号跡が本跡を切っている。

（遺構） 検出面で一部はすでに削平されていたが、一辺6.65mの整った正方形を呈する。四つのコーナー部は直角に近く、壁も垂直に近い立ち上がりを示す。また深さや幅は部分によって異なるが壁溝がめぐる。床面は遺存する部分では平坦に構築されており、508号跡の南東側で良好な硬質部分が残されている。柱穴はP1、P2、P3、P4の4カ所検出され、柱穴間には395cm間隔という整然とした配置が認められる。いずれも円形の掘り込みで真直に掘られる。カマドは北西壁中央に設けられている。煙道部は不明。焚口の幅48cmを測り、両袖の内側は火熱により赤色に変化し硬質となる。カマドの右には長径65cm、短径60cm、深さ52cmの貯蔵穴が設けられている。

（遺物出土状況と出土遺物） 本跡からは土師器、土製品が出土している。覆土中から出土している遺物は小破片にすぎず、器種がわかる土器はカマドの両側と貯蔵穴から出土している。貯蔵穴から7個体の杯が出土しているが、完形となるものはない。8については本跡の床面に密着して出土したが、伴うものではなく参考資料として示した。13の土製支脚はカマド内から出土したものではなく覆土中から出土したものである。

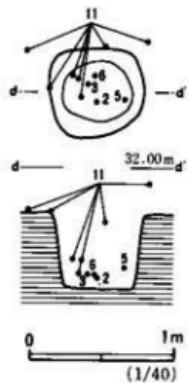
026号跡出土土器（第59図）

番号	器種	遺存状態	口径 高 底 径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	12.8 4.5 —	密(スコリア) 普通 外面 暗褐色 内面 黒色	体部下半はゆるやかに開き、中位から内湾しながら立ち上がりロ縁部との境に稜を設ける。ロ縁部は稜部から僅かに内傾して立ち上がる。外面体部へラケズリ後ミガキ。ロ縁部ヨコナデ後ミガキ。内面ナデからミガキの後黒色処理。(図版43)
2	杯	%	(12.4) (3.9) —	密 普通 茶褐色	体部下半はゆるやかに開き、中位から内湾しながら外側に強く張り出す後に至る。ロ縁部は後部から直線的に内傾する。外面体部へラケズリの後ミガキ。ロ縁部ヨコナデの後ミガキ。内面ナデの後ミガキ。(図版43)
3	杯	%	12.6 4.1 —	緻密 良 茶褐色	体部は全体に丸味を有し、外側に張り出す後部からロ縁部は僅かに内傾して立ち上がる。外面体部へラケズリ後ミガキ。ロ縁部ヨコナデ後ミガキ。内面全体にナデの後ミガキ。(図版43)
4	杯	%	(13.2) (3.6) —	密 やや不良 外面 黑褐色 内面 黒色	丸味をもつ体部上半から軽く張り出す後部に至り、ロ縁部は内傾して立ち上がり。ロ唇端部に丸味を有する。外面体部へラケズリの後軽いミガキ。ロ縁部ヨコナデの後軽いミガキ。内面ナデから軽いミガキ。内面の黒色は、黒色処理によるものと断定し難い。

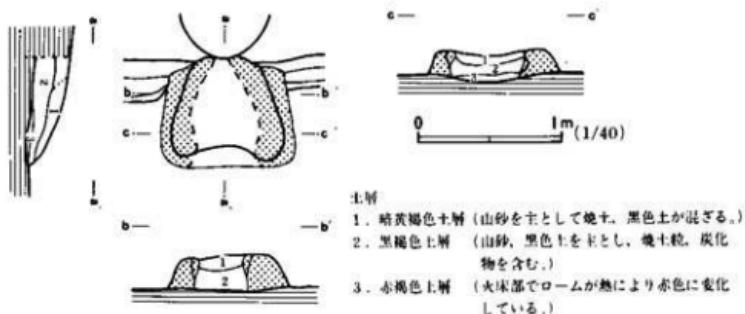


土層

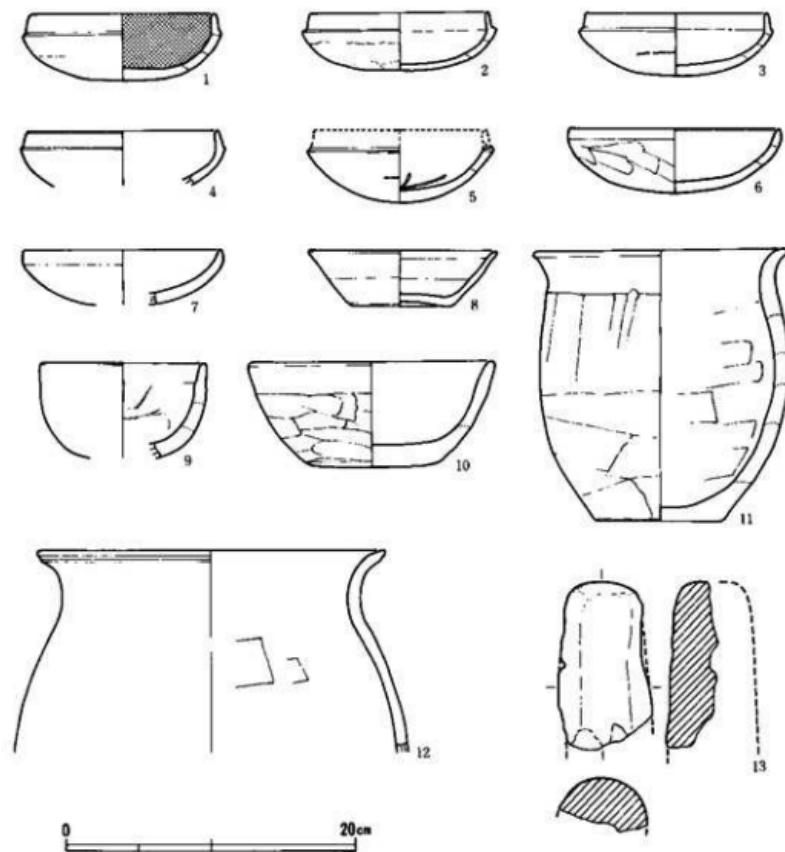
1. 黒色上層 (しまりの弱い黒色土を主として、小ロームブロックを含む。)
2. 黒褐色土層 (ロームブロックを多く含む。)
3. 黑褐色上層 (黒色土に粒の荒いローム粒を多く含む。)
4. 暗褐色土層 (ローム粒を主として黒色土が混ざる。)
5. (カマドの構築材で山砂を主とする。)



第57図 026号調査実測図・貯藏穴内遺物出土状況



第58図 026号跨カマド実測図



第59図 026号跨出上遺物実測図 (1/4)

5	杯	体部 $\frac{1}{2}$	— 〔4.0〕 —	密(石英) 普通 外面 茶褐色 内面 暗褐色	半球状に丸味を帯びる体部から外側に張り出す口縁部との境の後に至る。外面ヘラケズリの後ミガキ。内面全体にミガキのうえに6本の放射状暗文を施す。(図版43)
6	杯	$\frac{1}{6}$	(14.4) (4.2) —	密(石英多) 普通 外面 褐色 内面 黑褐色	体部から口縁部に至るまで丸味をもって開く。体部と口縁部との接は大変弱く、口縁部はやや尖り気味となる。外面体部ヘラケズリの後ミガキ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面はヘラによる一本一本のミガキ。(図版43)
7	杯	$\frac{1}{4}$	(13.6) 〔3.7〕 —	やや粗(石英) やや不良 黑褐色	体部はゆるやかに開き、口縁部との境に明瞭な接は設けず、短く尖り気味に口縁部は立ち上がる。外面体部ヘラケズリ後ミガキ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。内面全体にミガキ。
8	杯	完形	13.0 3.7 6.8	密(砂) 普通 暗褐色	やや上底となった底部から約45度の傾斜で直線的に立ち上がる。口縁部はほんの僅か外反し、口唇部は丸味を帯びる。ロクロ調整されるがロクロ目は弱い。底部は回転糸切り無調整。(図版43)
9	鉢	$\frac{1}{6}$	(11.4) 〔6.2〕 —	密(石英・長石) やや不良 茶褐色	丸底と考えられ、底部から体部は半球状となり、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部内面は浅く窪む。外面の調整は器面の磨耗により不明。内面ヘラナデ。
10	鉢	体部 $\frac{1}{4}$ 底部全周	(17.0) (7.0) 9.0	密(石英・長石) 普通 茶褐色	丸底とまでならないが、曲面となる不安定な底部から体部は僅かに内湾して立ち上がり口縁部に至る。外面体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後軽いミガキ。内面全体にミガキ。(図版44)
11	甕	$\frac{1}{6}$	17.4 18.0 8.8	密(砂) 普通 茶褐色	安定した底部から、胴部中位に弱い張りをもちながら立ち上がる。口縁部は底部からゆるやかに外反する。外面胴部はヘラケズリ後ナデであるが、上半が継、下半が横方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面胴部横方向ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。(図版44)
12	甕	上半の $\frac{1}{4}$	(23.8) — —	密(石英・長石) 普通 暗黄褐色	あまり張りをもたない肩部からゆるやかに口縁部は外反する。口唇部はつまみ出されたようになり段を有する。外面胴部ナデ。口縁部ヨコナデ。内面胴部横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。

3. 奈良・平安時代

いわゆる歴史時代に比定される遺構は、豎穴住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴跡か土墻基と考えられるピット51カ所である。住居跡のうち005, 006, 012, 030号跡の4軒については、調査部分が限られるなどしていたため遺物も少なく、時期決定に不安が残るところである。南北台地平坦部で検出されているピットは、掘立柱建物跡の柱跡になると考えられるものと、土墻基として捉えられるものとがあるが、個々のピットについて性格付けを行なうことは困難な状況である。

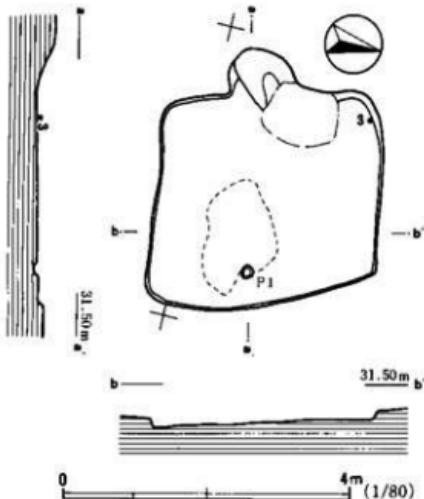
(1) 住居跡と出土遺物

001号跡 (第60図、図版8)

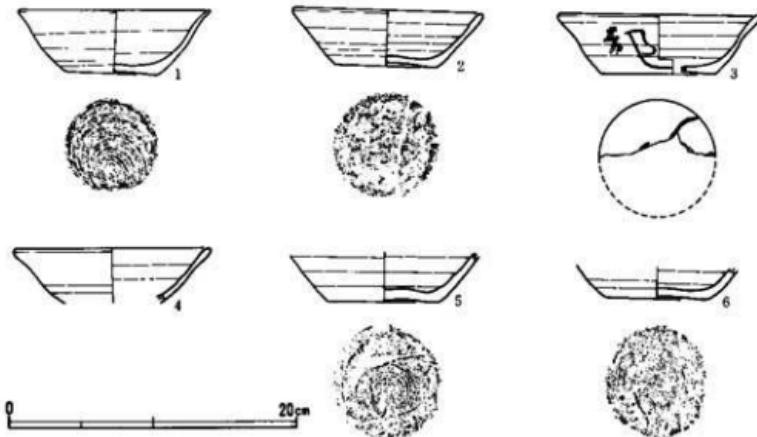
(位置) 北区で検出され唯一の住居跡でB7-04グリッドに位置する。

(遺構) 竹の根によるとと思われる破壊が各所に認められる。平面形は南東コーナー部がやや張り出し、南北の壁が若干長めとなる不整な長方形を呈する。規模は $2.84m \times 3.10m$ となる。壁はゆるやかな立ち上がりをみせるようであるが、良好な部分で15cm程の壁高を残すのみであるのではっきりしたことはわからない。壁の下には溝は検出されていない。床は入口の方に向と考えられるP1の周辺で踏み固められた様子を窺わせているが、他は軟らかな状態となっている。また全体に南側の方が低くなる。カマドと対面する壁の前にP1が検出されている他は、柱穴とするようなピットは発見されなかった。P1についても大変浅いため入口に付随するピットと断定し難いところである。カマドは西壁のほぼ中央に設けられている。遺構全体が浅いうえ、カマドの北側には大きな攪乱が入っているため、遺存は非常に悪くなっている。構築材もほとんど崩壊しているような状態である。

(遺物出土状況と出土遺物) 遺構の平面検出を進めている途中で第61図3を除く遺物が出土してきた。竹の根がはびこって平面形を確認できる状況ではなかったが、おそらく覆土中の遺物を考えることができよう。床面からは3と土師器の小破片が出土した。3の側面には「都」と墨書きされており、底面の一部にも墨書の痕跡が認められる。



第60図 001号跡実測図



第61図 001号跡出土遺物実測図 (1/4)

001号跡出土土器 (第61図)

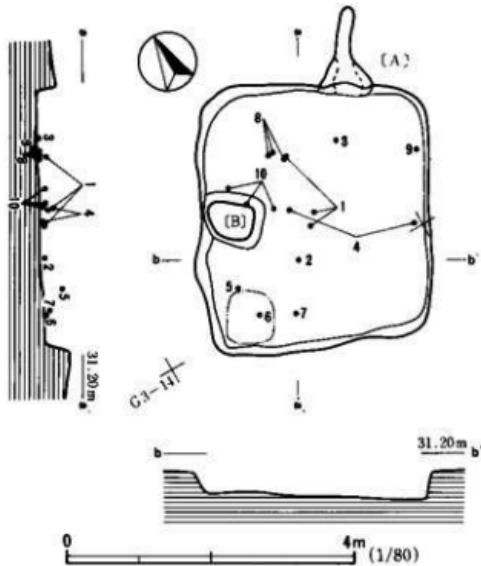
番号	器種	遺存状態	口径 器底 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	13.3 4.4 6.4	密(スコリア) 普通 暗褐色	体部は上位まで僅かに内湾するように立ち上がり、口縁部では器厚を減じ短くゆるやかに外反する。ロクロ調整され底部は回転糸切り無調整。(図版44)
2	杯	%	(13.4) (3.9) 7.3	密(長石) やや不良 黄褐色	安定した底部から体部は直線的に立ち上がり、中位で器厚を減じ、口縁部で再び器厚を増しそのまま聞く。ロクロ調整され底部は最終的にヘラケズリを施す。
3	杯	%	14.0 4.1 8.0	密(スコリア-長石) やや不良 暗褐色	安定した底部から体部中位まで内湾気味に立ち上がり、器厚が減じた部位から、口縁部は僅かに外側に聞く。体部に「都」と墨書きされる。ロクロ調整され底部回転糸切り無調整。(図版44)
4	杯	上半 %	(13.6) 3.6 —	密(スコリア-長石) 普通 明褐色	体部下半からゆるやかな角度で聞き、口縁部は器厚を僅かに増し、そのまま聞く。ロクロ調整されるがロクロ目は弱い。
5	杯	下半全周	— — 7.8	密(長石) 普通 暗褐色	安定した底部から直線的に体部下半は立ち上がる。ロクロ調整され底部回転糸切り無調整。
6	杯	底部全周	— — 7.0	密(砂) 普通 黄褐色	体部下半は僅かに内湾して立ち上がる。ロクロ調整され底部回転糸切り無調整。

003号跡（第62図、図版9）

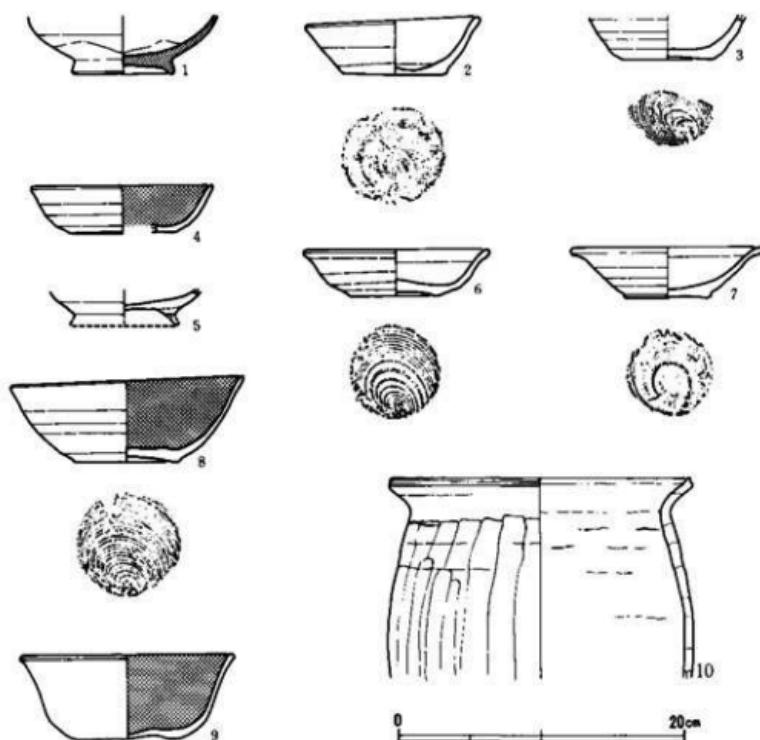
（位置） 南区のG3-08グリッドを主に位置し、他の遺構との重複関係はない。

（遺構） 3.10m×3.40mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈す。検出面から床面までは30cmを測る。壁は比較的良好で、南東壁では急な立ち上がりをみせて、他はゆるやかに傾斜して立ち上がる。壁の下には溝は認められない。床面は特に固いという状態ではないが、一部の攪乱部以外では凹凸は少ない。全体としてはやや東に傾斜する。ピットは柱穴及び入口に設けられるものを含め1ヵ所も検出されなかった。カマドは北東壁に設けられている〔A〕と、カマドに類似する機能を果たしたと考えられ〔B〕が存在する。〔A〕の袖は山砂と黒色土で構築されているが遺存は不良である。煙道を長くしているのが特徴である。一方〔B〕はカマドと同じように粘土と山砂を主に構築されているが、袖の部分がはっきりせず、カマドと断定するにはその材料が乏しいといえる。

（遺物出土状況と出土遺物） 本跡からは灰釉陶器、緑釉陶器、土師器が出土している。完形品は1点だけである。遺物は床面に接してか、やや浮いた位置から多く出土している。図示できなかったが、緑釉陶器の腕の一部と考えられる小破片が出土しており、これにはやや色調の濃い緑の釉が掛けられている。これはカマド〔A〕の南で床に接するような状態で出土している。



第62図 003号跡実測図



第63図 003号跡出土遺物実測図 (1/4)

003号跡出土土器 (第63図)

番号	器種	遺存状態	口径 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	灰釉 碗	下半分	— — (7.0)	密 良 灰白色	体部下半はゆるやかに立ち上がり、しだいに器厚が薄くなる。底部にはやや内溝するようハの字形に聞く高台が付く。外部底面は回転ナデ調整。体部下半は回転ヘラケズリ。灰釉は濁け掛けによる。(図版44)
2	杯	完形	12.2 3.8 7.3	密(石英・スコリ7) やや不良 橙褐色	体部中间でやや張りをみせるが、底部から比較的急な角度で立ち上がる。ロクロ調整され、底部は回転糸切りの後回転ナデ調整される。(図版44)
3	杯	底部1/2	— — (6.4)	密(長石) 良 外面 暗褐色 内面 明褐色	体部下端が一度外側に張り出し、そこから直線的に立ち上がる。ロクロ調整され、底部は回転糸切り無調整。

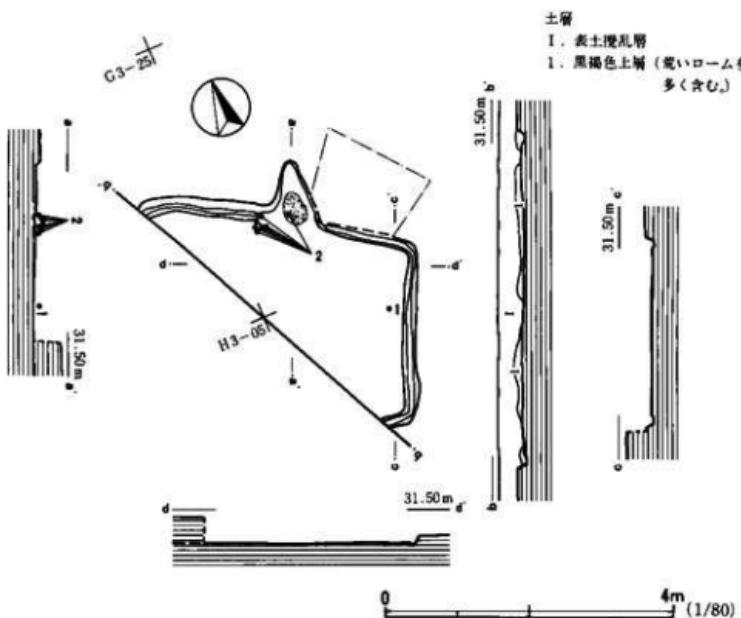
4	杯	%	(12.6) (3.3) (6.1)	密 やや不良 外面 暗褐色 内面 黑色	体部下端が一度外側に張り出し、外面は内済し内面は直線的に立ち上がる。ロクロ調整され、底部は回転糸切り無調整。内面ミガキ後黒色処理。
5	椀	底部%	— — (7.0)	密(長石) 良 黄褐色	体部下半はゆるやかな丸味をもって立ち上がる様子がみられる。底部には直線的にハの字形に開く高台が付く。底部は回転糸切り。内面ミガキ。
6	杯	体部% 底部全周	13.0 3.1 6.5	密(石英) 良 明黄褐色	体部下端部で一度外側に開いて張りをもち。体部は内済気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部内面は若干盛り上がり、器高は低い。ロクロ調整され底部回転糸切り後無調整。(図版44)
7	杯	体部% 底部全周	(13.4) (3.4) 6.4	密(長石) 普通 暗褐色	体部は全体的に大きく外側に聞くようにして立ち上がり。口縁部は強く外反する。器高は低く浅い。ロクロ調整され、底部回転糸切り後回転ナデ調整。
8	杯	体部% 底部全周	(16.1) (5.5) (7.2)	密(スコリア) やや不良 外面 暗褐色 内面 黑褐色	安定した底部から体部はゆるやかに内済しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部内面は体部との境で全体に一段盛り上がる。ロクロ調整され、底部回転糸切り無調整。内面ミガキ後黒色処理。
9	杯	体部% 底部%	(14.8) (5.6) (7.2)	密 普通 外面 黑褐色 内面 黑色	不整な底部から体部下端は丸味をもち、中ほどは直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、口唇部は面取りされる。ロクロ調整され、底部回転糸切り後手もちらヘラケズリ。体部下端へラケズリ。内面ミガキ後黒色処理。
10	甕	上半%	(20.8) — —	密(スコリア) 普通 暗褐色	頸部にあまり張りはみられず、頸部から急激に口縁部は外反し、口唇部は上につまみ上げられる。外面胴部は縦方向へラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面胴部縦なナデ。口縁部ヨコナデ。(図版44)

004号跡（第64図、図版9）

(位置) G3-24グリッドに位置し、発掘した部分では他の遺構との重複は認められない。

(遺構) 調査範囲と調査区域外との境界であったため遺構の約半分を調査したにとどまる。北東壁の上端で3.90m、南東壁で2.50mを測り、平面形は隅丸長方形を呈するものと想定される。ただし壁の遺存は大変悪く、検出面から床面まで僅か7~10cm程度の掘り込みしか残していない。壁溝は検出した部分の壁下には掘られているが、床面から5cm程と浅く、溝中に特にピットなども掘られていない。床面はハードローム層まで掘り下げた面に構築されている。固い部分は一部にしか認められず、全体に凹凸を生じている。また、柱穴と考えられるピットは検出されなかった。カマドは北東壁の中央に設けられている。すでに構築材は削平されており、火床が表れているような状態であるので構造は不明である。

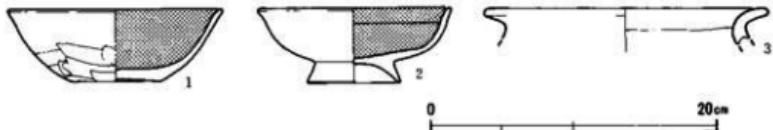
(遺物出土状況と出土遺物) 遺物は土師器が少量出土している。第65図1, 2とも状況から考えて本跡に伴う遺物と考えられる。他は小破片である。



第64図 004号跡実測図

004号跡出土土器 (第65図)

番号	器種	遺存状態	口徑 器底 径	胎土 成色	器形の特徴・調整	
					高さ	調査
1	杯	口縁一部 底部全周	(15.0) (5.0) 6.2	密(長石) 普通 暗褐色	体部は全体的にゆるやかに内湾しながら立ち上がり。 口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され底部回転糸 切り後無調整。外面体部下半横方向手もちへラケズリ。 内面ミガキの後黒色処理。	
2	椀	%	13.5 2.2 6.6	密(砂) やや不良 外面 暗黄褐色 内面 黒色	体部の下半は外側にやや張り出して開き、途中で内湾 して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。底部には ハの字形に聞く高台が付く。ロクロ調整され、外面は そのうえをナデ調整し、内面はミガキの後黒色処理。 (図版44)	
3	甌	口縁部%	(19.8) — —	密(長石) 普通 茶褐色	口縁部は颈部から急速に外側へ外反する。外内面とも ヨコナデ。	



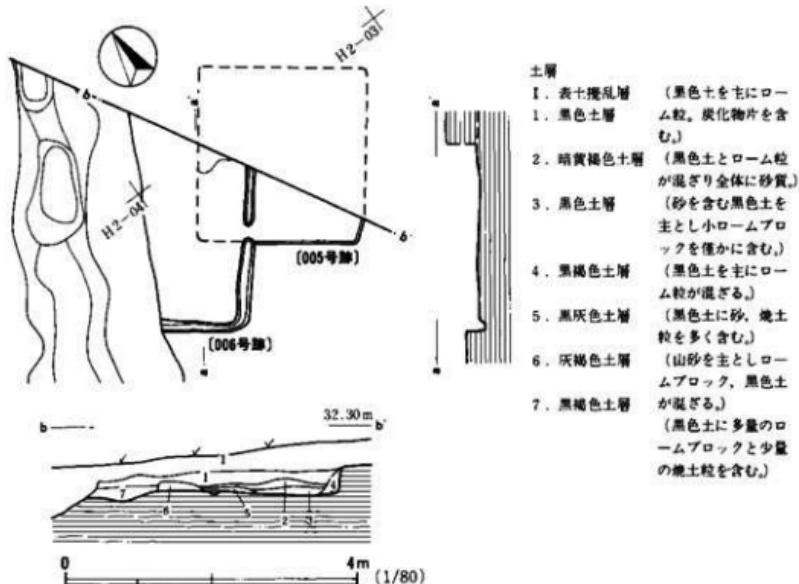
第65図 004号跡出土遺物実測図 (1/4)

005号跡 (第66図)

(位置) H2-03グリッドを主に位置し、大半が調査区域の外に広がる。また006号跡と重複関係にあり、その新旧関係についてはここでふれておきたい。両者の新旧関係は平面的に捉えることができず、以下2点の精査の所見により005号跡が新しいと断定した。まず006号跡の壁溝が005号跡の貼り床の下から検出されたこと。またもう1点は005号跡のカマドの一部と思われる山砂が、006号跡の床面と断面に確認されたことによる。

(遺構) 25~28cmの掘り込みがあるが、ほんの一部しか調査できず規模は不明である。壁溝と柱穴については検出されず、床面は固くはないが、平坦な状況を示している。カマドも断面に僅かに確認できるにとどまり、構造は不明である。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から土師器の小破片が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。



第66図 005・006号跡実測図

006号跡 (第66図)

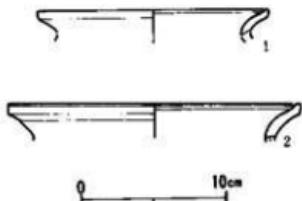
(位置) H2-03グリッドを主に位置し、005号跡、505号跡に切られる。

(遺構) 一部を精査したにすぎないので規模については不明である。良好に遺存する部分で壁高17cmを測り、深さ5~8cm、幅12cm前後の壁溝がめぐる。床面は全体に小さな凹凸がみられる。柱穴は検出されなかった。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から土師器の小破片が出土している。1、2の裏の口縁部がかろうじて図示できるにすぎない。

006号跡出土土器 (第67図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	甕	口縁部%	(16.0) — —	密 普通 暗褐色	口縁部は頸部から急激に外反し、口唇部はつまみ上げられ、尖り気味となる。外内面ともヨコナデ。
2	甕	口縁部%	(20.3) — —	密 普通 暗褐色	口縁部は頸部から急激に外反し、口唇部はつまみ上げられる。外内面ともヨコナデ。

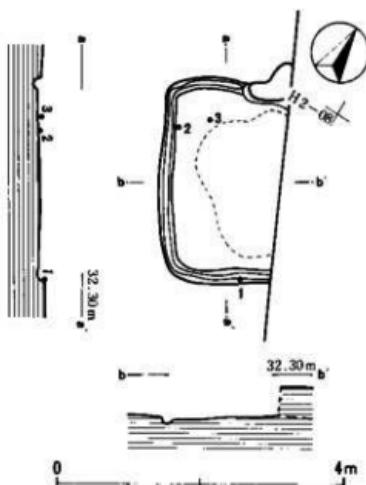


第67図 006号跡出土遺物実測図 (1/4)

007号跡 (第68図、図版10)

(位置) H2-08グリッドに位置し、東側は調査区域外となっている。

(遺構) 遺構の半分が調査区域外であるので全体については知ることができない。遺存は不良で掘り込みも10cm前後と浅く、平面規模も南北壁で2.70mであるのでかなり小形の住居跡であることが考えられる。形態は隅の丸くなる方形である可能性が強い。検出部分の壁下には



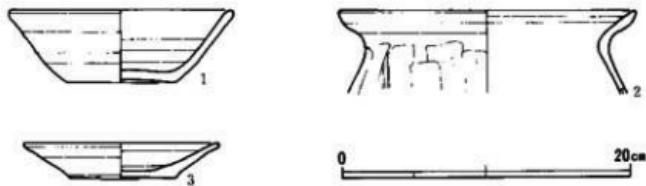
第68図 007号跡実測図

浅い壁溝がめぐっている。床は全体に平坦で中央部を中心に固く踏み込まれた様子を残している。柱穴は検出されなかった。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土の堆積が僅かであるため、この覆土中の遺物は床面に近い位置での遺物ということになるが、第69図以外の遺物は小破片で量も少ない。1は南壁の壁溝から出土し、3の皿は床面に貼り付いたような状態で出土している。

007号跡出土土器（第69図）

番号	器種	遺存状態	口径 高 底 径	胎 土 焼 成 色 調	器形の特徴・調整
1	杯	口縁一部 底部全周	(15.6) (4.9) 7.4	密 (スコリア・長石) 普通 暗褐色	安定した底部から直線的に立ち上がり、口縁部も外反しない。全体に厚手に作られる。ロクロ調整され、底部回転糸切り後無調整。
2	甕	上半分	(20.6) — —	密(スコリア・ 長石・石英) 普通 褐色	口縁部は頸部から急激に外反して開く。口唇部は途中で厚さを増し、端部は尖り気味となる。外面腹部はタタキ目の痕跡を残したうえに縱方向のヘラケズリ。口縁部外内面ともヨコナナデ。内面胴部ナナデ。
3	皿	完形	13.5 2.4 7.4	密(スコリア・長石) 普通 暗褐色	安定した底部から約30度で直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。底部内面は平坦で、体部との境は一段高まりをみせる。ロクロ調整され底部は最終的に手もちへラケズリ。(図版44)



第69図 007号跡出土遺物実測図(1/4)

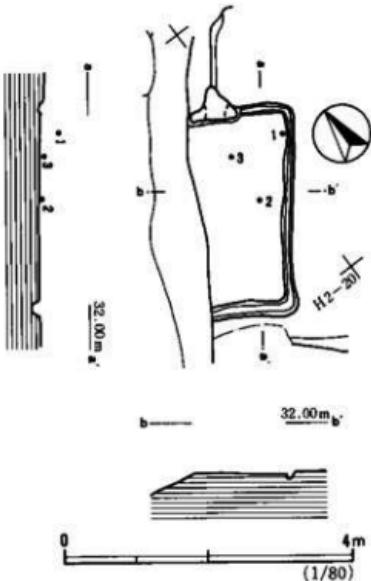
008号跡(第70図)

(位置) H2-15グリッドに位置し、009号跡を切って構築され、北側部分は504号跡溝状遺構によって破壊されている。

(遺構) 大半が504号跡によって切られているので全体について不明である。009号跡と重複する南東壁でも壁の立ち上がりは不明瞭で、また床面もほぼ同レベルに構築されている。壁溝は検出されているが、幅も深さも一定しない。南東壁は2.96mを測り、全体としては隅の若干丸くなる形を呈していたものと考えられる。床面は特に硬質となる部分もなく、軟らかな

状態である。ピットについては1ヵ所も検出されなかった。カマドは北東壁に設けられており、袖の下部を残すのみで天井部を含め大部分は削平されている。袖には黄白色を呈す山砂と粘土が用いられていたようである。

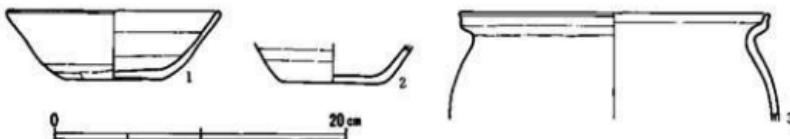
(遺物出土状況と出土遺物) 本跡からは土師器が出土している。床面に近い位置から出土しているがほとんどが破片である。



第70図 008号跡実測図

008号跡出土土器(第71図)

番号	器種	遺存状態	口徑 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整	
					1	2
1	杯	体部約 底部全周	(14.6) (4.6) 6.6	密(スコリア) 普通 黄褐色	安定した底部から体部下端で内済し、そこから直線的に立ち上がる。ロクロ調整されるがロクロ目は弱い。底部回転糸切り後一方向の手もちへラケズリ。体部下端手もちへラケズリ。(図版45)	
2	杯	底部全周	— — 7.0	密(スコリア) やや不良 黄褐色	体部下端で内済し、約55度の角度で立ち上がる。ロクロ調整される。底部は回転糸切り後手もちへラケズリによって調整されたと考えられる。	
3	甕	口縁部約	(21.3) — —	密(石英) 普通 茶褐色	肩が僅かに張り、口縁部は頸部から急激に外反し、口唇部はつまみ上げられる。調整は外内面ともナデによる。	



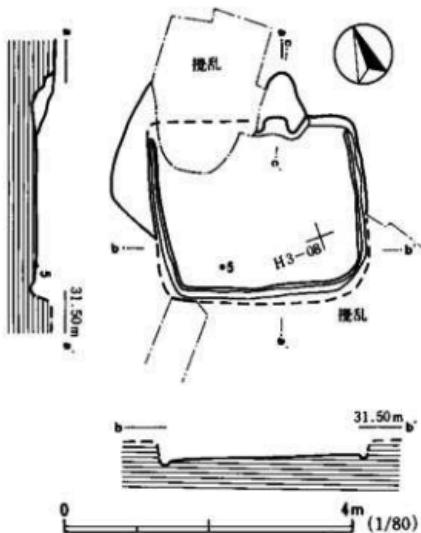
第71図 008号跡出土遺物実測図(1/4)

010号跡（第72図、図版10）

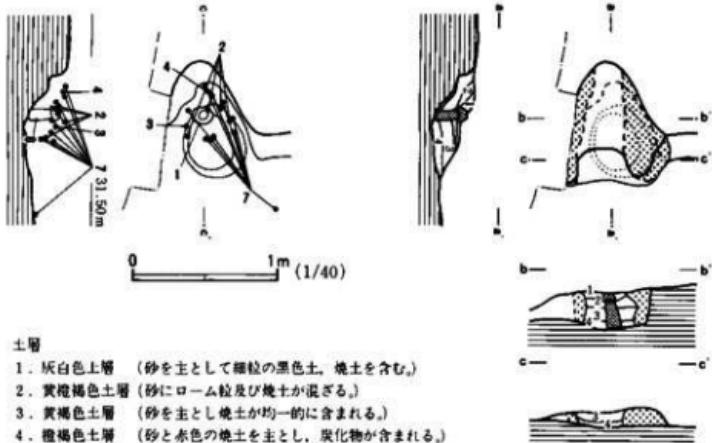
（位置） H3-03グリッドを主に位置する。

（遺構） 半分以上に大きな擾乱を受けており、検出面で平面形を明らかにすることは困難な状況であった。幸い遺構の南側では擾乱も床面までには達しておらず、床面を追って平面形を確定することができた。残念なことに北側の半分はかなり深くまで擾乱が及んでおり、壁は復元して考えるしかない。一応規模については下端で考えた場合 $2.10m \times 2.70m$ となり、東一西がやや長くなる隅丸長方形の平面形を復元することができる。壁高は北東のコーナー部周辺で25cmを示し、カマドの東側を除いて壁溝が検出されている。床面は全体に平坦で固く踏み込まれている。また柱穴、ピットについては検出されなかった。カマドは北壁の中央から僅かに東に寄った位置に設けられている。天井部はすでに崩壊し、左袖部も擾乱によって多くを失っている。現況では壁への掘り込みは約50cmを測り、35度前後の立ち上がりを示している。

（遺物出土状況と出土遺物） 本跡に伴うと考えられる遺物は第72図に示したもののがすべてである。そのうち5を除く遺物はカマド内から出土している。8の土製支脚は高さ23.4cmを測り、その上に1の杯が伏せられた状態で置かれていた。7の甕はその周辺から出土し、杯についても同様に火床面からかなり浮いた位置で出土している。



第72図 010号跡実測図



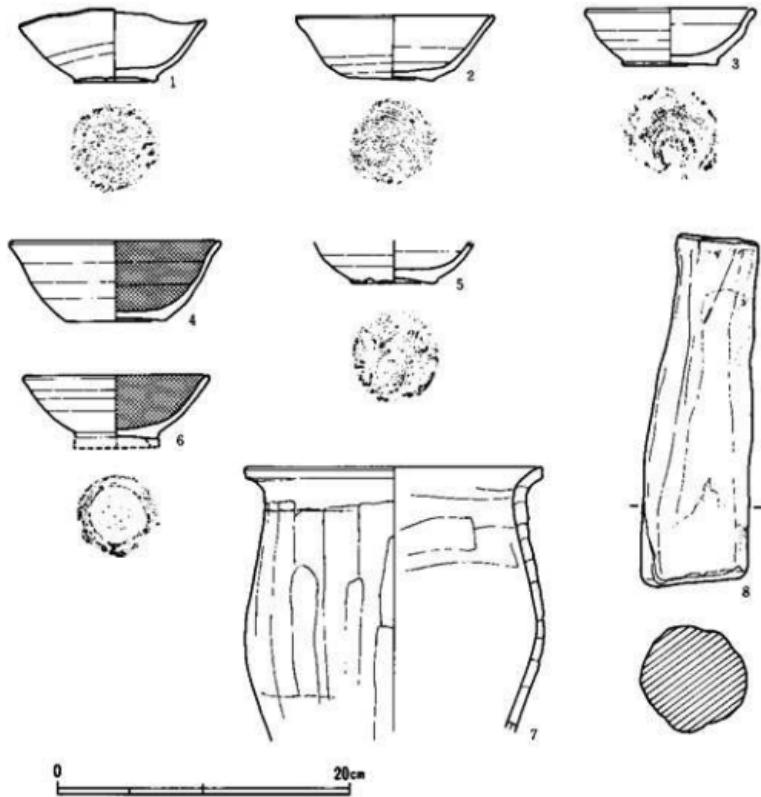
土層

1. 灰白色土層 (砂を主として細粒の黒色土。焼土を含む。)
2. 黄褐色土層 (砂にローム粒及び焼土が混ざる。)
3. 黄褐色土層 (砂を主とし焼土が均一的に含まれる。)
4. 暗褐色土層 (砂と赤色の焼土を主とし、炭化物が含まれる。)

第73図 010号跡カマド内遺物出土状況・同カマド実測図

010号跡出土土器 (第74図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	12.7 5.0 5.7	密(石英・長石) 普通 暗褐色	不安定な底部から体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され、底部回転糸切り後無調整。全体に歪む。(図版45)
2	杯	口縁部約 底部全周	(13.6) (4.4) 5.7	密(石英・長石) 普通 赤茶褐色	底部下端は一度外側に開いて張りをもち、体部は直線的に立ち上がる。ロクロ調整されるがロクロは弱い。底部回転糸切り後無調整。
3	杯	口縁一部 底部全周	(11.6) (3.9) 6.5	密(砂) 普通 褐色	底部端部に粘土のはみ出しがあり、体部下半は内湾し途中でやや張り。口縁部はゆるやかに外反する。ロクロ調整され底部回転糸切り後無調整。
4	杯	%	(14.4) (5.3) (6.8)	密(長石) 普通 外面 黒褐色 内面 黑色	体部下半で僅かに張りをもつが、全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され底部回転糸切り無調整。内面ミガキ後黒色処理。
5	杯	底部全周	— — 6.0	密 普通 茶褐色	内面底部は比較的平坦で、体部下半は内湾しながら立ち上がる。ロクロ調整され底部回転糸切り後無調整。
6	杯	体部一部 底部全周	(12.7) (4.2) 5.7	密(長石) やや不良 外面 暗褐色 内面 黑色	体部は全体的にゆるやかに内湾して立ち上がる。底部には高台が付けられていたと思うが剥落している。ロクロ調整。内面ミガキ後黒色処理。
7	甕	底部欠損	20.3 (18.3) —	密(雲母) 普通 暗褐色	胴部に僅かの張りをもち、口縁部は頸部から急激に外反する。外面胴部は輻方向のヘラケズリ後軽いナデ。内面胴部横方向のヘラナデ。口縁部外内面ともヨコナデ。(図版45)



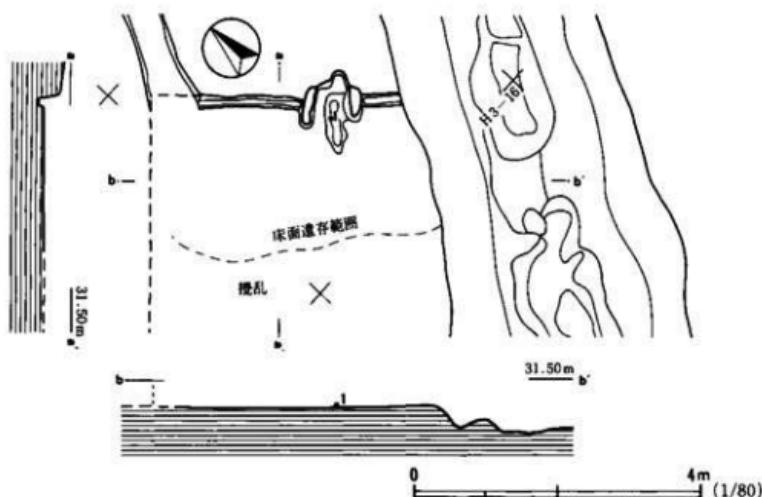
第74図 010号跡出土遺物実測図(1/4)

011号跡 (第75図)

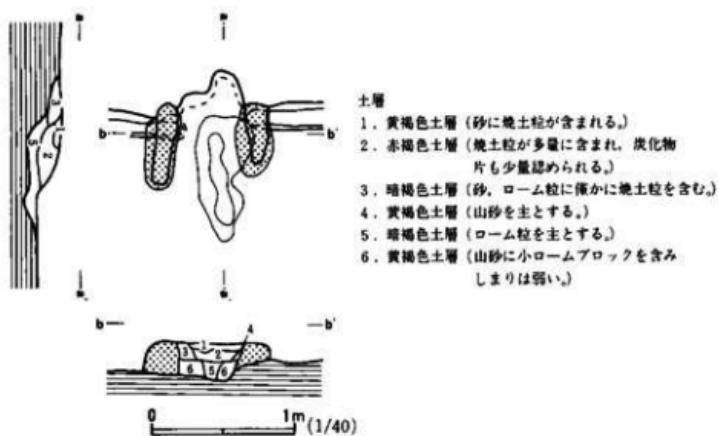
(位置) H3-11グリッドを主に位置する。南東側は504号跡によって切られ、さらに遺構の大部分は後世の搅乱により破壊されている。

(遺構) カマドの存在を確認し得なかったならば、おそらく住居跡と断定するのが不可能であったであろう。それほど破壊されていた。したがって図上では平面形の復元を試みることはできるが、正確な規模となると知る術は残されていない。壁は北東側の一部が搅乱を免かれ、検出面から25cmの壁高を測ることができる。壁の遺存する部分については壁溝が検出されており、壁はほぼ垂直な立ち上がりをみせている。床面はカマドの南西に確認されるだけである。特に硬質とはなっていないが平坦に構築されている。また床面の残る範囲からは柱穴は検出されなかった。カマドは両袖部の下半が遺存して、焚口の幅は45cmを測る。現況では壁への掘り

込みは25cmで、煙道はゆるやかに立ち上がる。また火袋部から焚口の前面にかけて浅い掘り込みが認められる。



第75図 011号跡実測図

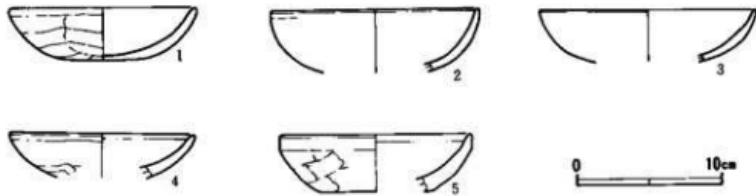


第76図 011号跡カマド実測図

(遺物出土状況と出土遺物) 本跡からは土師器が出土している。床面からは1がカマドに入るような状況で出土し、他はカマド南西側の覆土中から出土している。いずれも破片で完形品は含まれていない。

011号跡出土土器 (第77図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	(13.0) — —	密(石美) やや不良 暗褐色	体部下半はゆるやかに開き、途中から内湾しながら立ち上がる。外面体部は横方向のヘラケズリ。内面ヨコナデ後ミガキ。
2	杯	%	(14.6) — —	密 普通 暗褐色	体部途中から全体に内湾しながら立ち上がる。外面体部ヘラケズリ後ミガキ。内面全体にミガキ。
3	杯	%	(15.0) — —	密(スコリア) 普通 茶褐色	体部は全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面体部ヘラケズリ後ミガキ。内面全体にミガキ。
4	杯	%	(12.8) — —	密(長石) 普通 暗褐色	体部は全体にゆるやかに内湾し、外に開くように立ち上がる。外面体部ヘラケズリ後ナデ。内面全体にヨコナデ後ミガキ。
5	杯	%	(13.4) (3.9) (7.8)	密(スコリア) 普通 暗褐色	底部は平坦であった可能性が強い。体部は内湾しながら短く立ち上がり、後部から口縁部は上に立ち上がる。外面体部はヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面全体にナデ。



第77図 011号跡出土遺物実測図 (1/4)

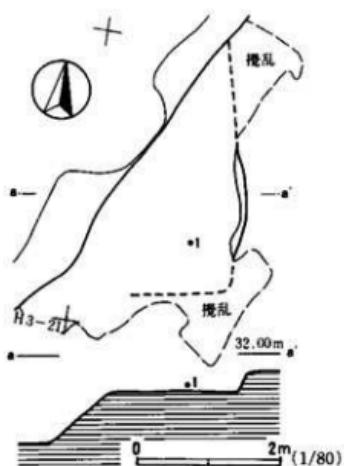
012号跡 (第78図)

(位置) H2-20グリッドを主に位置する。505号跡に切られるほか、大きく後世の攪乱により破壊されている。

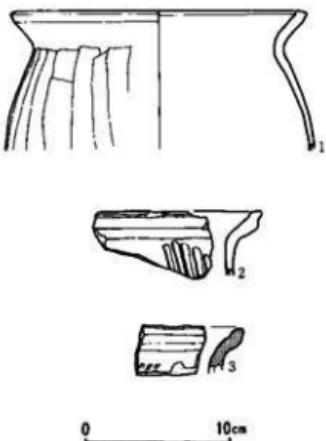
(遺構) 攪乱部と異なる覆土を掘り進めたところ床面と考えられる平坦な、固い面を捉えることができた。しかし壁については、東壁の一部が130cm遺存していただけであった。したがって規模や平面形など詳細については全く知ることができない。床の状態から考え住居跡であ

ることには間違いないと考える。

(遺物出土状況と出土遺物) 床面の遺存する覆土中から僅かに出土している。



第78図 012号跡実測図



第79図 012号跡出土遺物実測図 (1/4)

012号跡出土土器 (第79図)

番号	器種	遺存状態	口径 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	甕	口縁部	(20.6) — —	密(石英・長石) 普通 褐色	肩部に張りをもたず、口縁部は頸部から急激に外反する。口唇部は、面取り状の平坦面を有し、内側に棱が張り出す。外面部軸方向へのラケズリ。内面ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。

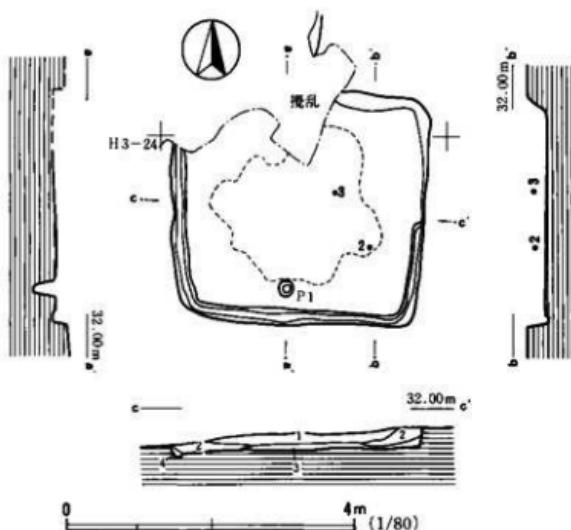
013号跡 (第80図、図版11)

(位置) H3-23グリッドを主に位置する。北側は012号跡と重複関係があったと考えられるが、間に後世の擾乱が入る。東側は014号跡と接する。

(遺構) 北西部分が擾乱により不明であるが、東壁3.06m、南壁3.30mを測り、各辺ほぼ東西、南北を向く。検出面から床面までは15~30cmの深さを有し、東壁中央から南壁、西壁の下には壁溝が検出されている。北壁残存部は27cmの壁高を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は小さな凹凸が観察されるものの、中央部の比較的広い範囲で大変固い様子を保っている。全体としてはやや西側が低くなる傾向がみられる。主柱穴となるピットは発見されていないが、南壁際にP1が検出された。深さは30cmで真直に掘られている。入口に伴うピットと考えられ

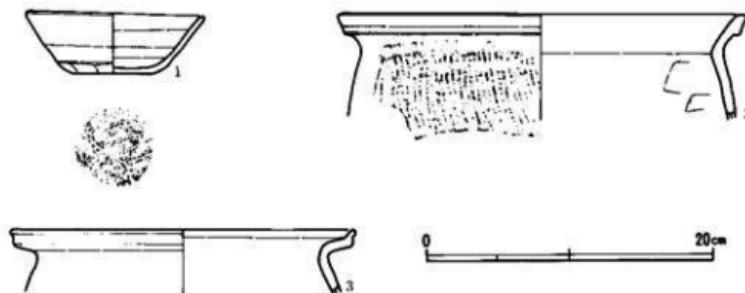
る。

(遺物出土状況と出土遺物) 土師器と須恵器が出土しているが完形品はない。破片は覆土の上層から中位にかけて多く出土し、床面からの遺物は少ない。須恵器は甕、蓋が認められ、土師器は甕の破片が多い。



- 上層
1. 黒色土層 (黒色土を主とし、小ロームブロック及び焼土粒を含む。)
2. 黒色土層 (1層より暗くなり、ローム粒を僅かに含む。)
3. 黒灰色土層 (黒色土と山砂が混ざり、ローム粒及び焼土粒が含まれる。)
4. 暗褐色土層 (ソフトロームを主とし、黒色土、ロームブロックが含まれる。)

第80図 013号跡実測図



第81図 013号跡出土遺物実測図 (1/4)

013号跡出土土器（第81図）

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	%	12.5 4.1 5.4	密(砂) やや不良 暗褐色	体部下端で内湾し、そこから直線的に立ち上がる。口クロ調整され、底部は回転糸切り後一方の手もちヘラケズリ。(図版45)
2	甕	口縁部%	(28.5) — —	密(石英・長石) 普通 暗褐色	肩部に張りはなく、口縁部は頸部からくの字形に外反し、口唇部は肥厚する。外面肩部叩き。口縁部外側ともヨコナデ。内面肩部横方向ヘラナデ。
3	甕	口縁部%	(24.0) — —	密(石英・長石) 良 茶褐色	口縁部は頸部から急激に外反し、口唇部は上につまみ上げられる。外側とも口縁部ヨコナデ。

014号跡（第82図、図版11）

（位置） H2-24グリッドを主に位置する。016号跡のうえに貼床を設けて構築し、505号跡によって切られている。505号跡に切られる以前は015号跡とも重複関係を有していたと考えられる。

（遺構） 大部分が505号跡によって破壊されているため全体については不明である。現況では検出面から床面まで12~15cmの掘り込みを残し、遺存する北西壁は2.80mを測る。床面は全体に軟弱で凹凸があり、遺存する床面の範囲及び505号跡のなかから柱穴となるようなビットは検出されていない。カマドの痕跡は全く残らず、北・東・南いずれの壁であったか不明である。

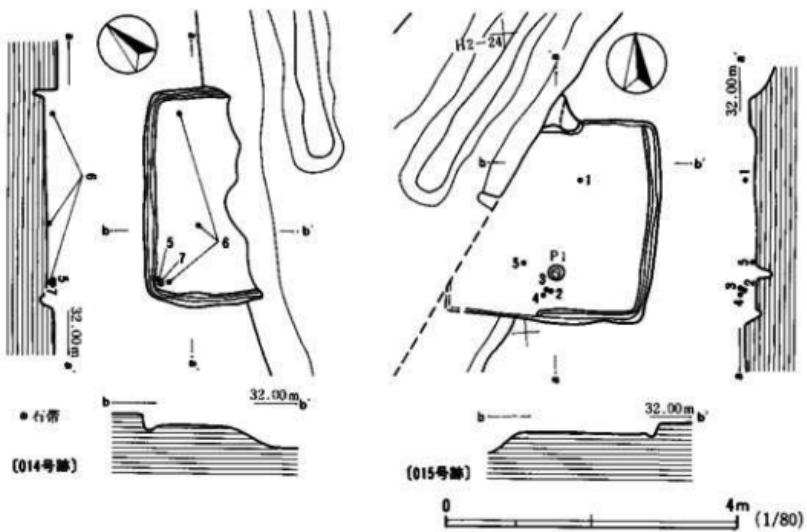
（遺物出土状況と出土遺物） 本跡からは土器類では須恵器と土師器が出土している。遺物は覆土中から散在して出土したものが多く、床面から出土した土器も含め完形品は認められない。南東コーナー部からは石帯が出土している。丸柄で左右長33.3mm、上下長23.5mm、厚さ6mmを測る。表面は丁寧に研磨され光沢をもつ。裏面には3ヶ所にかがり穴を穿ち、周辺は面取りが施されている。玄武岩製。

015号跡（第82図、図版12）

（位置） H2-23グリッドを主に位置し、一部は016号跡のうえに貼床を設け構築され、505号跡によって3分の1を切られる。

（遺構） 一辺2.70m前後の方形を呈していたものと考えられる。検出面から床面までは17cmの掘り込みを残すのみで、壁の遺存も南側では良い状態とはいえない。床面は中央でやや固くなっている様子が窺われるが、周辺は軟らかく凹凸も生じている。入口の方向と考えられる南壁側にP1が検出されたほか、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁に設置されているが大半が破壊され、また削平されているため、右袖が残るだけで構造については明らかにし得ない。

(遺物出土状況と出土遺物) 遺物は土師器が主体となるが量は多くない。床面からやや浮いたところから主に出土し、杯、甕、皿の器種が確認される。杯では図示した3、4以外にも内面に黒色処理が施される個体が出土している。5は床面に接し、正位で出土した。

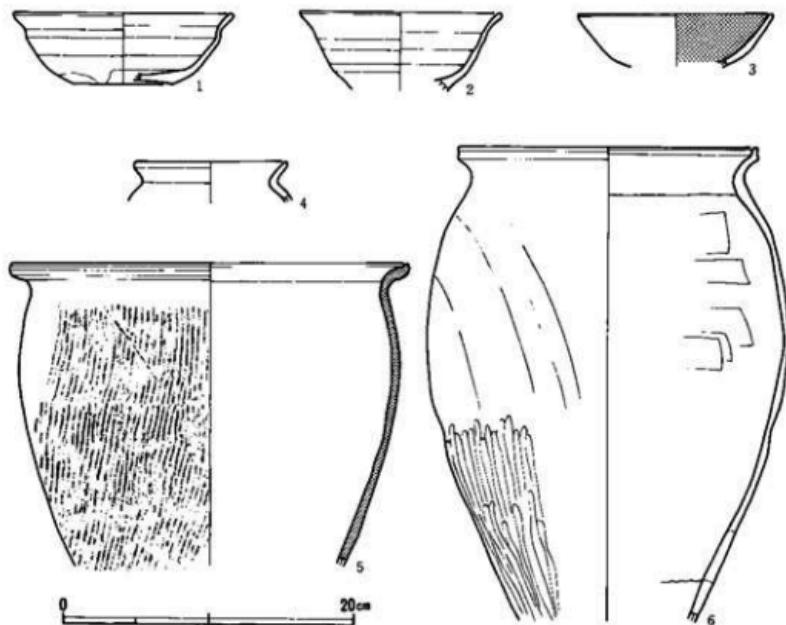


第82図 014・015号跡実測図

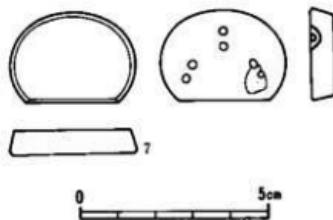
014号跡出土土器 (第83図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	口縁一部 底部丸	(15.0) (4.7) (6.8)	密(石英) 良 黄褐色	体部下半は内湾しながら立ち上がり、口縁部は体部の上位でくの字形に外反する。ロクロ調整され、底部は切り放し方不明で最終的にナデ調整。体部下端手もちらケズリ。
2	杯	体部丸	(14.0) — —	密(石英) 普通 暗褐色	体部下半で一部外側に開いて張りをもち、そこから内湾して立ち上がる。口縁部はゆるやかに外反。全体に深く作られる。ロクロ調整。
3	杯	体部丸	(13.5) — —	密 普通 外面 黒褐色 内面 黒色	体部下半は内湾気味で、途中から直線的に立ち上がる。ロクロ調整されるが外面のロクロ目は弱い。内面全体にミガキ後黒色処理。
4	小型甕	口縁部丸	(10.5) — —	密(スコリア) 普通 黒褐色	口縁部は頸部からくの字形に外反し、口唇部はつまみ上げられる。外内面とも口縁部ヨコナデ。

5	須恵器 甕	%	(27.2)	密(石英) 普通 黒灰色	最大径を胴部のかなり上位に有し。口縁部は頸部から急激に外反する。口唇部はつまみ上げられ内面は凹線状となる。外面胴部叩き。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。
6	甕	%	(20.5)	密(砂) 普通 暗褐色	長胴の上位に最大径を有し。口縁部は外湾して開き、口唇部はつまみ上げられる。外面胴部下半は細かな縱方向へのヘラケズリ。上半はケズリの後ナデ。内面胴部横方向ヘラナデ。口縁部は外内面ともヨコナデ。



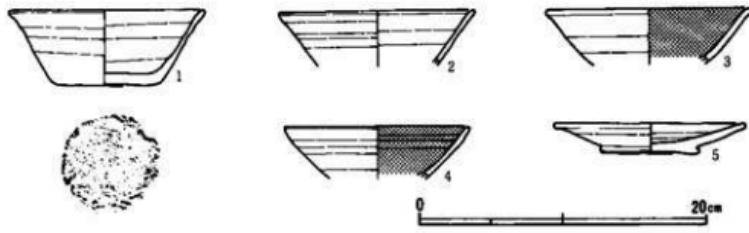
第83図 014号跡出土遺物実測図 (1/4)



第84図 014号跡出土石器実測図 (2/3)

015号跡出土土器 (第85図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	粘土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	口縁部及 底部全周	(13.7) (5.1) 7.5	密(石英・長石) 普通 黒褐色	体部下端には丸味を有するが、全体に直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され、底部は回転糸切り後無調整。(図版45)
2	杯	体部	(13.8) — —	密(石英) 普通 茶褐色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部もほとんど外反しない。口唇部内側に弱い棱がめぐる。ロクロ調整。
3	杯	体部	(14.4) — —	密 普通 外面 單褐色 内面 黒色	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され、内面全体にミガキの後黒色処理。
4	杯	体部	(13.0) — —	密 普通 外面 明褐色 内面 黒色	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は外反しない。ロクロ調整され、内面全体にミガキの後黒色処理。
5	皿	完形	12.3 2.1 5.8	密(砂) 良 暗褐色	底部端部には粘土のめくれ上がりの張り出し部分がめぐり、体部は大きく開いて口縁部に至る。内面底部は平坦で直線的に開く。ロクロ調整され、底部は回転糸切り後無調整。(図版45)



第85図 015号跡出土遺物実測図 (1/4)

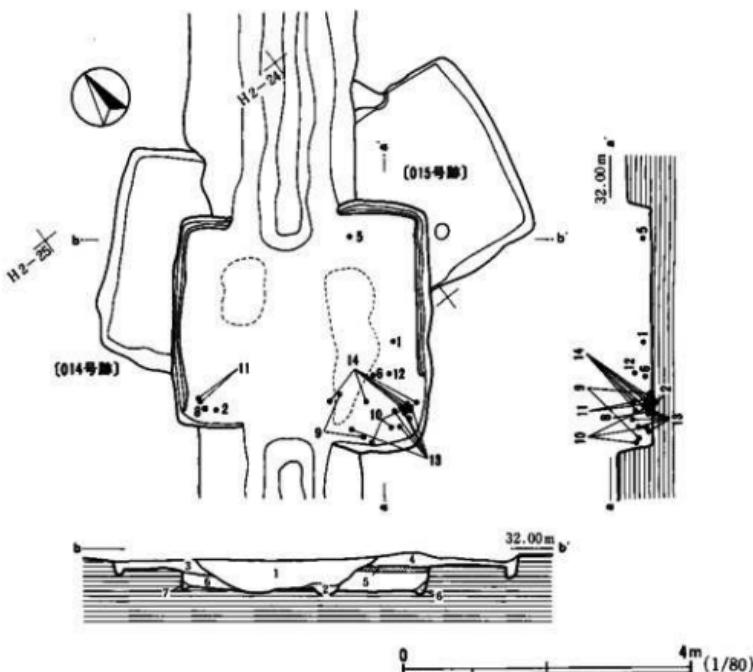
016号跡 (第86図、図版12)

(位置) H2-24, I2-04グリッドを主に位置する。本跡のうえに014・015号跡が構築されており、その後505号跡が縦断するように切断する。

(遺構) 下端での各壁の長さは、北西壁2.75m、北東壁3.30m、南東壁3.10m、南西壁3.30mをそれぞれ測る。これから復元すると、長方形か台形に近い平面形であったことが推測される。溝で切られている以外では、014・015号跡より深い掘り込みを有していたため壁は良好に遺存している。立ち上がりはほぼ垂直で、南西壁以外では浅い壁溝が検出されている。床面は中央部に固く踏み込まれた部分が残されている。平坦に構築されていたと考えられるが、周辺

では軟らかく凹凸もみられる。柱穴は検出されていない。カマドは北東壁に設けられていたと考えられる。

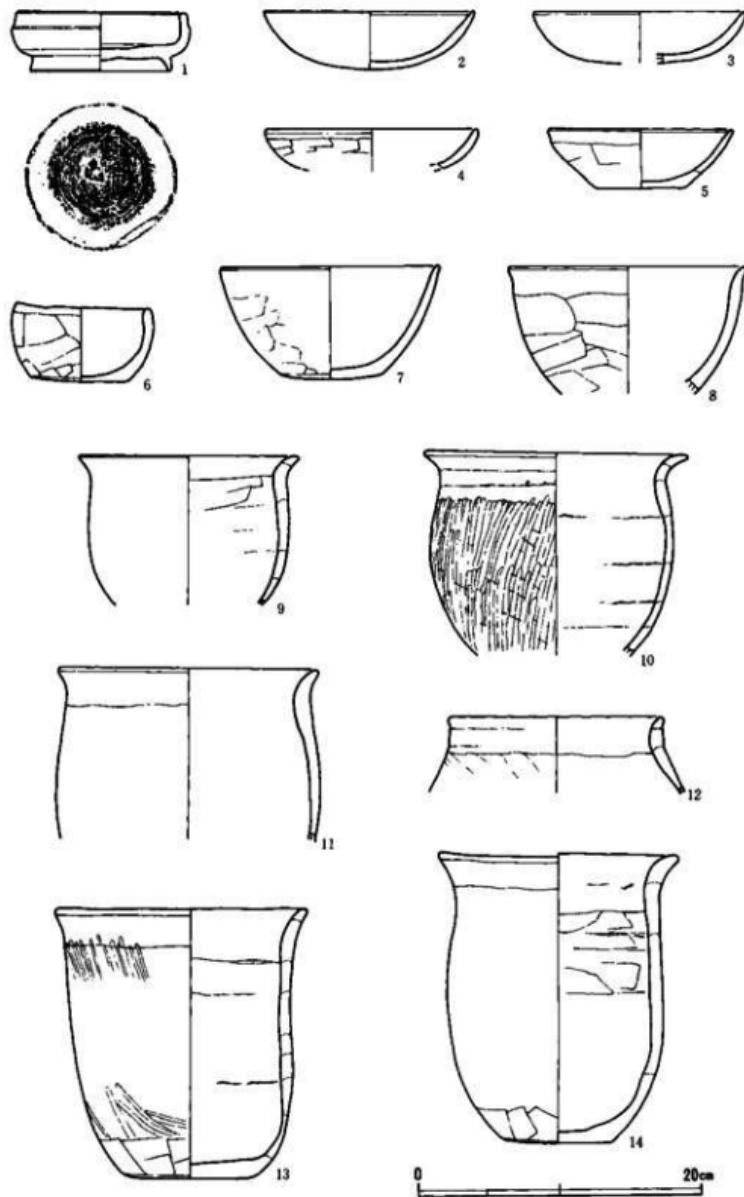
(遺物出土状況と出土遺物) 中央部では不明だが遺物は6層下部から出土している。住居跡が廃棄されてからそれほど時を経ない間に、周辺から投げ入れたような出土状況を示す。一括遺物と考えて差し支えないと考えている。遺物は土師器が主体となるが1点のみ須恵器の杯の破片が含まれている。1は合子形の土師器で、全体が赤彩されるという特徴的な土器である。また底面には焼成後にヘラ状工具を用いて「□麻呂」と人名を刻書している。初めの一文字については、はっきりと読みとれないが、「倭」と読めないこともない。13、14の壺は胴部があ



土層

1. 黒色土層 (細粒の黒色土を主とし、ローム粒及び焼土粒を含みしまりが弱い。)
2. 黒褐色土層 (黒色土に小ロームブロックが含まれる。)
3. 暗褐色土層 (黒色土とソフトロームが混ざり、小ロームブロックが含まれる。)
4. 黒色土層 (細粒の黒色土を主とし、焼土粒が含まれる。)
5. 暗黄褐色土層 (15号跡の粘床部分で、黒色土とローム粒が混ざり、ロームブロックを多く含む。全体にしまりがあり、粘質な感じである。)
6. 暗褐色土層 (黒色土とソフトロームが混ざり、小ロームブロック及び焼土粒が均一的に含まれる。)
7. 暗褐色土層 (黒色土を主として荒いローム粒を含む。)

第86図 016号跡実測図



第87图 016号墓出土遗物实测图 (1/4)

まり張らないという特徴をもつものである。

016号跡出土土器（第87図）

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	合子	ほぼ完形	11.8 4.2 9.9	密(砂) 良 暗赤色	体部は下端で丸味をつけ短く内湾して立ち上がり、口縁部は梗部から直線的に内傾する。内面底部は平坦で外面底部にはハの字形に開く高台が付く。底部も含め全体にロクロによる回転ナデ調整を施し、内面はヘラミガキされる。また全体に赤彩を施す。(図版45)
2	杯	%	15.0 4.1 —	密(砂) 良 黒褐色	体部は全体にゆるやかに内湾して立ち上がる。外面はヘラケズリ後ミガキ。内面ヨコナデ後丁寧なミガキ。(図版45)
3	杯	口縁部% 体部%	(15.0) — —	密(砂) 普通 明褐色	体部は全体にゆるやかに内湾して立ち上がる。中位で器厚を増す。外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ヨコナデ後丁寧なミガキ。
4	杯	体部%	(15.2) — —	密(長石) 普通 暗褐色	体部上半はゆるやかに内湾して立ち上がる。外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ヨコナデ後ミガキ。
5	杯	%	13.0 4.3 6.4	密 やや不良 暗褐色	安定した底部から体部は直線的に立ち上がり、上位外面に弱い張りを設け口縁部に至る。外面体部はヘラケズリ後ナデ。口縁部ナデ。内面は全体にヨコナデ後ナデ。(図版45)
6	鉢	完形	9.4 5.1 7.0	密(スコリア) 普通 暗褐色	やや不安定となる底部から体部は急激に内湾して立ち上がる。外面体部ヘラケズリ。内面は全体にヨコナデ。(図版46)
7	鉢	%	15.5 7.7 7.3	密 良 黒褐色	不安定な底部から体部は比較的急な角度で立ち上がり、全体にゆるやかに内湾する。外面ヘラケズリ後ミガキ。内面全体にヨコナデ後丁寧なミガキ。(図版46)
8	鉢	体部%	(16.8) — —	密 良 明茶褐色	体部は全体に内湾して立ち上がり、中位では急角度となり、口縁部は端部を外反させる。外面体部はヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面全体に丁寧なヘラナデ。
9	甕	体部%	(15.5) — —	密(砂) 良 暗茶褐色	胴部は全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。頸部でやや肥厚し、口縁部は外反する。外面胴部ヘラケズリ後軽いミガキ。内面胴部ヘラナデ。口縁部は外内面ともヨコナデ。(図版46)
10	甕	底部欠損	18.8 (14.0) —	密 普通 暗褐色	胴部は全体に丸味をもたせながら内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から外湾して開く。外面胴部はヘラケズリ後ミガキ。内面胴部ナデ。口縁部は外内面ともヨコナデ。(図版46)
11	甕	上半%	(18.2) — —	密(スコリア) やや不良 暗褐色	胴部はあまり張りをもたず、口縁部は途中で肥厚しゆるやかに外反する。外面胴部はヘラケズリ後軽いミガキ。内面胴部ナデ。口縁部は外内面ともヨコナデ。

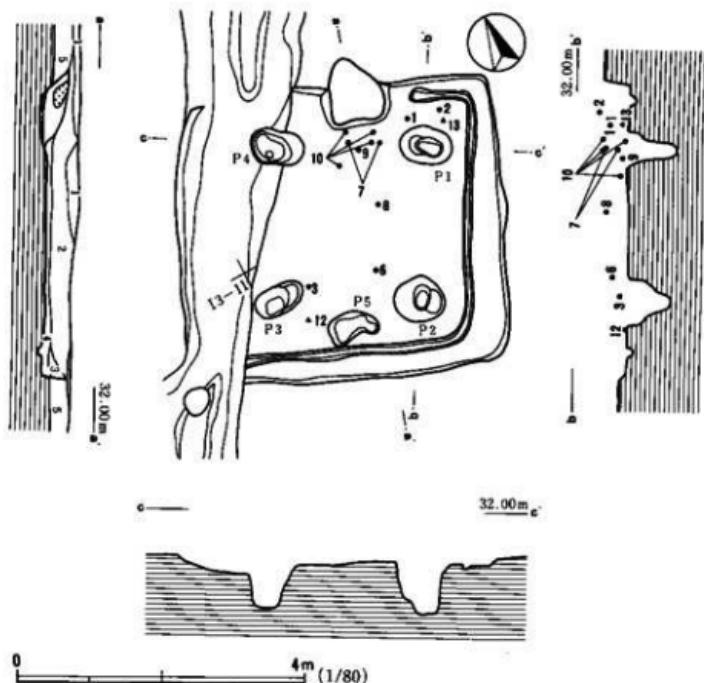
12	壺	口縁部	(15.2) — —	密(砂) 普通 外面 暗赤色 内面 明褐色	口縁部は肥厚して外面では内傾し、内面では外湾するよう立ち上がる。外内面とも口縁部ヨコナデ。外面は赤彩される。
13	甕	ほぼ完形	17.7 18.5 9.4	密(小石) 良 暗褐色	やや不安定な底部から胴部はあまり張りをもたず直立するよう立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。外面胴部下端はヘラケズリ、中位ヘラケズリ後輪いミガキ。内面胴部ナデ。外内面とも口縁部はヨコナデ。胴部下半の一部は薄く作られる。(図版46)
14	甕	ほぼ完形	16.9 19.8 7.7	密(砂 (スコリア) 普通 暗褐色	胴部下半に丸味を有し、中位はゆるやかに内済するが特に張る様子はなく立ち上がる。口縁部は途中で肥厚しゆるやかに外反する。外面胴部下端はヘラケズリ。中位ヘラケズリ後ミガキ。内面胴部ヘラナデ。口縁部外内面ともヨコナデ。(図版46)

018号跡 (第88図、図版13)

(位置) 12-10・15グリッドを主に位置する。ちょうど019号跡の中心部に収まるような形で構築され、505号跡によって3分の1が切断されている。

(遺構) 北西壁の遺存状態が悪いが、一辺4.00mの規模を有していたと考えられる。断面で観察されるところでは、壁はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は4ヵ所検出され、いずれも梢円形の掘り込み面から一度段が付き、さらに深く掘られる。また壁下には溝が設けられていないが、その内側から溝が検出されている。このような形跡から判断すると、一度拡張された可能性があると考えることができる。その場合、カマドについては、その設置場所の移動は行なわれなかつたと思われる。入口に設けられているP5については掘り過ぎもあり本来の形状を失している。床面は平坦であるが全体に軟かといえるであろう。カマドは良質な粘土と山砂で構築され、両袖部と天井部の煙道側が遺存する。焚口の幅は55cmを測り、火袋部に厚さ5cmの火床が残る。煙道部は35度の角度で直線的に立ち上がる。

(遺物出土状況と出土遺物) 大部分が覆土中から出土している。床面に近い位置で出土した遺物についても、特に集中するといった傾向は認められない。5はカマド内から出土し、9, 10はカマドの前で口縁部を床に向けた状態で出土している。11の土製支脚はカマド内から正位で出土し、高さ14.4cm、下面径11.9cmを測りかなり安定している。12は刀子で現長6.5cm、刃部を3.7cm残すのみで多くを欠損する。13の鎌についても同様で一部しか遺存しない。14は土器底部に加工を施して紡錘車にしたもので、復元径5.1cm、厚さ0.8cmを測る。



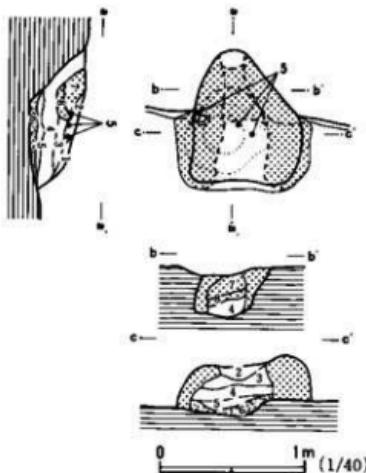
土層

1. 黒色土層 (砂質の黒色土が主で僅かに燒土粒を含む。)
2. 黑褐色土層 (黒色土にローム粒が混ざり、小ロームブロック及び燒土粒を含む。)
3. 黑褐色土層 (黒色土にローム粒が混ざり2層に近いが、ロームブロックは含まれない。)
4. 暗褐色土層 (小ロームブロック、燒土粒、砂が含まれ粘性をもつ部分がある。)
5. 黒色土層 (黒色土とソフトローム繊維が混ざり、荒いローム粒を均一的に含む。)

第88図 018号跡実測図

018号跡出土土器 (第90図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	少	(13.0) (4.15) (8.0)	密(長石・石英) 良 濃青灰色	安定した底部から体部は約60度の角度で立ち上がり、中位から僅かに外に開く。口唇部は若干肥厚し丸く終わる。ロクロ調整され底部は切り放し方不明で一方の手もちヘラケズリ。体部下端手もちヘラケズリ。 (図版46図)
2	須恵器 杯	少	(13.4) (4.2) (8.0)	密(雲母・石英) 不良 黒灰色	体部は約60度で直線的に立ち上がる。ロクロ調整されロクロ目は内面の方が外面より強い。底部手もちヘラケズリ。体部下端手もちヘラケズリ。

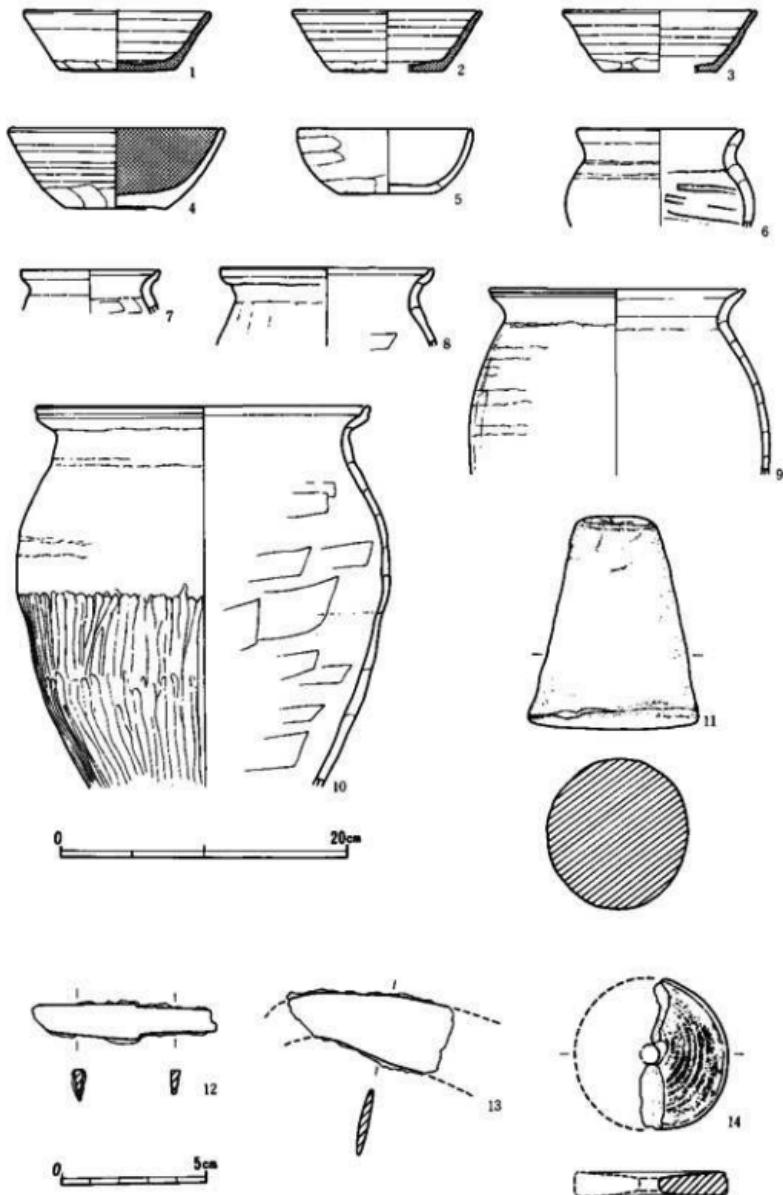


土層

1. 暗褐色土層 (山砂と黒色土が混ざる。)
2. 暗褐色土層 (山砂と黒色土が混ざり、焼土粒が含まれる。)
3. 暗褐色土層 (山砂と黒色土を主に、焼土を含む。)
4. 灰褐色土層 (山砂を主として焼土を多く含む。)
5. 穗状褐色土層 (山砂に4層より多く焼土が含まれる。)
6. 橙褐色土層 (火床部でロームが赤色変化する。)
7. 黄褐色土層 (山砂が生で粘土、黒色土が混ざる。)
8. 橙褐色土層 (7層と同様であるが火熱による赤色)

第89図 018号跡 カマド実測図

3	須恵器 杯	%	(13.4) (4.2) (8.0)	密(石英) 普通 暗青灰色	体部は約55度で直線的に立ち上がり、上位で器厚が減じ、口縁部でやや肥厚する。ロクロ調整される。底部手もちらけ目。
4	杯	口縁一部 底部全周	(15.0) (5.6) 7.0	密 やや不良 外面 黄褐色 内面 黒色	安定した底部から体部は全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。ロクロ調整。底部は手もちへらけ目。体部下端は幅1.8cm程手もちへらけ目。内面は全体にミガキの後黒色処理。(図版46)
5	杯	%	12.3 4.5 6.9	密 やや不良 暗褐色	体部下端は丸味をもちやや張り、体部は内湾しながら立ち上がる。外側部と底部は手もちへらけ目。内面全体にミガキ。
6	小型甕	上半%	(11.6) — —	密(スコリア) 普通 暗褐色	胴部に張りを有し、口縁部はゆるやかに外反する。外側は全体にミガキ。内面胴部は半截竹管状工具によるナデ。口縁部ミガキ。
7	小型甕	口縁部%	(9.6) — —	密(スコリア) 普通 暗褐色	口縁部は頸部から外反し、口唇部をつまみ上げる。外側とも口縁部はヨコナデ。
8	甕	口縁部%	(15.0) — —	密(砂) 普通 暗褐色	頸部で一度外傾し、口縁部はそこからくの字形に開き、口唇部をつまみ上げる。外側胴部はへらけ目後ナデ。内面胴部ナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。
9	甕	胴部下半 欠損	17.8 — —	密(砂) 良 茶褐色	胴部上半は全体に丸味を有し、口縁部は外反して端部はさらに外側につまみ出されるようになる。口縁部内面に棱がめぐる。外側胴部はへらけ目後ナデ。内面胴部ナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。(図版46)
10	甕	口縁部% 胴上半%	(23.2) — —	密 普通 外面 暗褐色 内面 黑褐色	胴部上位に最大径を有し、頸部でやや内傾し、口縁部はそこから急激に外反し、口唇部はつまみ上げられる。外側胴部下半は細い縱方向へらけ目。上半ナデ。内面胴部へラナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。



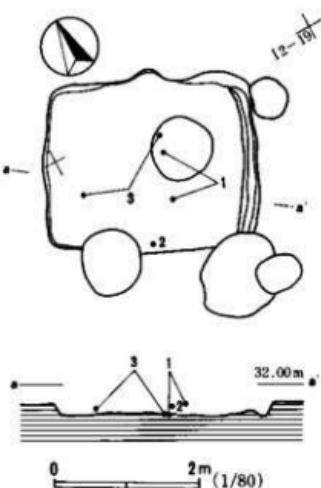
第90図 018号跡出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)

020号跡（第91図、図版13）

（位置） 12-19グリッドを主に位置する。
257~259・261号跡が本跡と重複する。

（遺構） 検出面から床面まで18cm前後の掘り込みしかないうえに、上記のピットによって各所が切断されている。遺存状態は極めて不良である。平面形は長辺2.70m、短辺2.10mの不整な長方形を呈する。壁溝は南東壁下にのみ検出されており、床面は全体に凹凸が著しい。また柱穴も検出されていない。カマドもすでに削平されており、設置場所についても北東壁のロームに残された火熱変化部分にその痕跡をとどめるだけである。

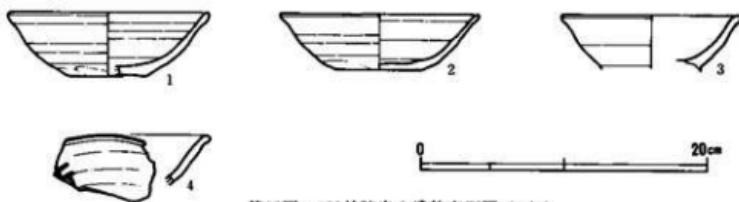
（遺物出土状況と出土遺物） 遺物はすべて床面に近いレベルで出土しているといってよいであろう。ただし全部が本跡に伴うと断定はできない。破片ばかりであるが、遺構中央部から多く出土する傾向がある。4は杯の体部に墨書が認められるが、一部分であるため判読は不可能である。



第91図 020号跡実測図

020号跡出土土器（第92図）

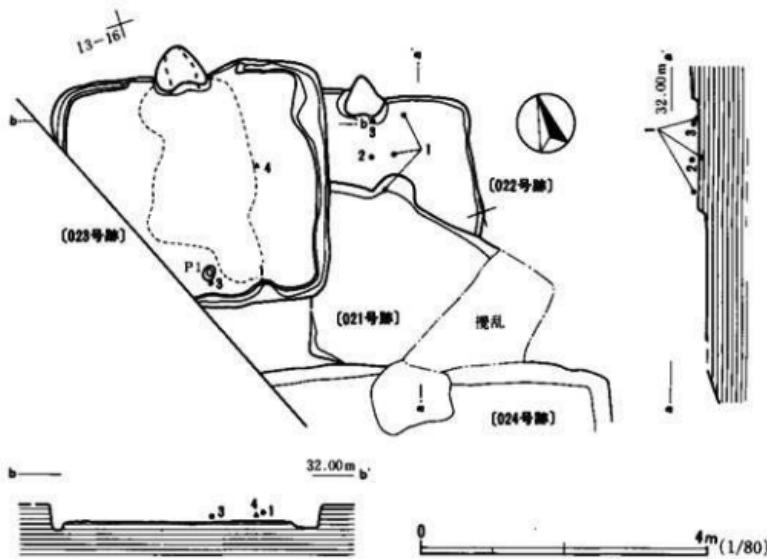
番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	口	(14.0) (4.4) (5.2)	粗(スコリア) 普通 明褐色	やや不安定な底部から体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。ロクロ調整。底部は回転糸切り後無調整。体部下端僅なヘラケズリ。
2	杯	口縁一部 底部少	(14.0) (3.8) (6.0)	密(スコリア) 普通 明褐色	体部下端で一度張りをもち、そこから約50度の角度で立ち上がり。口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整。底部手もちヘラケズリ。体部下端部分的に手もちヘラケズリ。
3	杯	体部少	(12.5) — —	密(スコリア) 普通 外面 灰褐色 内面 黒褐色	体部は中位で僅かに張りをもつよう内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整。内面ミガキ。



第92図 020号跡出土遺物実測図 (1/4)

021号跡 (第93図)

(位置) I 2-25グリッドを主に位置する。本跡は022~024号跡の3軒の住居跡と重複関係にあるため、ここでこの4軒の新旧関係についてふれておきたい。遺構確認の段階では、022号跡と024号跡の間に大きな攪乱があったため、021号跡は確認することができなかった。022号跡の精査を開始してからその存在を知ることができたのである。その結果021号跡は022号跡の床面を切っていることがわかり、また022の貼床を023号跡のうえに確認することはできなかったが、遺物の検討から022号跡が新しいと判断できたのである。したがって023→022→021という新旧関係が捉えられたのである。024号跡との関係は客観的事実を欠くが、021の方が新しいと考えて間違いないと思われる。



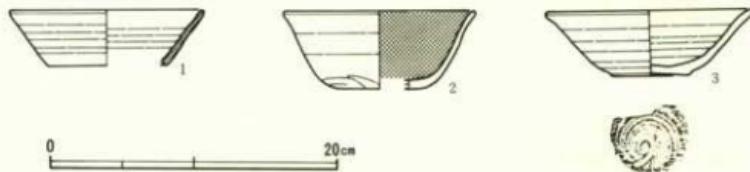
第93図 021・022・023号跡実測図

(遺構) 挖り込みを8~10cmしか残していないので不明な点が多い。一辺2.70m程度の小形住居跡であったと考えられ、現況からするとかなり不整な方形を呈していたものとみられる。床面は平坦に構築されているが、固く残る部分は認められず、柱穴も検出されない。北東壁には、焼土と山砂の遺存が観察され、壁への掘り込みを僅かに残す、カマドの痕跡が認められる。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から土師器の小破片が出土しているが、図示可能な遺物は3点しか出土していない。

021号跡出土土器 (第94図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	体部 $\frac{1}{2}$	(13.6) (3.7) (8.4)	密(雲母・長石) やや不良 淡灰色	体部は約55度で直線的に開き、口縁部も外反しない。 ロクロ調整され外面のロクロ目は弱く内面でやや強い。
2	杯	体部一部 底部 $\frac{1}{2}$	(13.4) (5.3) (6.0)	密 普通 外面 暗黄褐色 内面 黒色	体部下半に丸味をもち体部中位は直線的に立ち上がり、 口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整され体部下端手 もちへラケズリ。内面全体にミガキの後黒色処理。
3	杯	体部一部 底部 $\frac{1}{2}$	(14.6) (4.4) 5.5	密(スコリア) 良 茶褐色	径の小さな底部から体部下端はやや張り、中位は直線 的に開き、口縁部はゆるやかに外反する。底部内面中 央に小さな盛り上がりが認められる。ロクロ調整され 底部回転糸切り無調整。



第94図 021号跡出土遺物実測図 (1/4)

022号跡 (第93図、図版14)

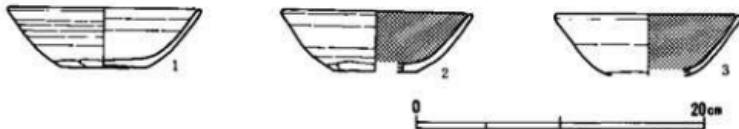
(位置) I 2-19グリッドを主に位置する。

(遺構) 023とのとおしのセクションベルトでも、本跡の床面と壁の立ち上がりをおさえることができなかった。規模については、一辺3.00m程度の方形が想定されるが、詳細は不明である。壁高は10cmを測り、その下に溝は検出されていない。床は平坦に構築されるものの硬質とはなっていない。また柱穴も検出されていない。カマドは北東壁に設けられる。壁への掘り込み、山砂の広がりは確認できるが袖の形を明らかにすることはできなかった。

(遺物出土状況と出土遺物) 遺物は土師器片が主でカマドの前を中心、床面に近い位置で出土している。図示した3点の遺物がすべて本跡に伴うかということについては検討を必要とする。

022号跡出土土器 (第95図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	(13.4) (4.0) 5.9	密(砂) 普通 黒褐色	体部下半はゆるやかに内湾し、中位は直線的に立ち上がり、口縁部も外反しない。ロクロ調整。底部切り放し方不明。最終的に手もちヘラケズリ。体部下端手もちヘラケズリ。
2	杯	$\frac{1}{2}$	(13.4) (4.0) (5.8)	密(スコリア) 普通 外面 極色 内面 黒色	体部下半は内湾し、中位は直線的に立ち上がり。口縁部は端部で小さく外反する。ロクロ調整。底部最終的に手もちヘラケズリ。体部下端手もちヘラケズリ。内面全体にミガキの後黒色処理。
3	杯	体部 $\frac{1}{2}$	13.0 — —	密(長石) 普通 外面 黒褐色 内面 黒色	体部下半は内湾し、中位は直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに肥厚するが外反しない。ロクロ調整。外面体部下端手もちヘラケズリ。内面全体にミガキの後黒色処理。



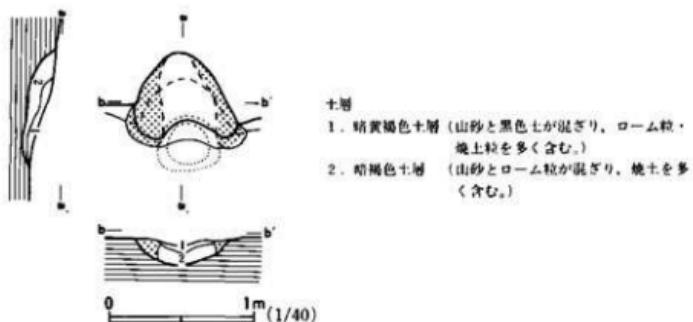
第95図 022号跡出土遺物実測図 (1/4)

023号跡 (第93図、図版14)

(位置) I 2-19グリッドを主に位置し、022号跡の西側に接する。

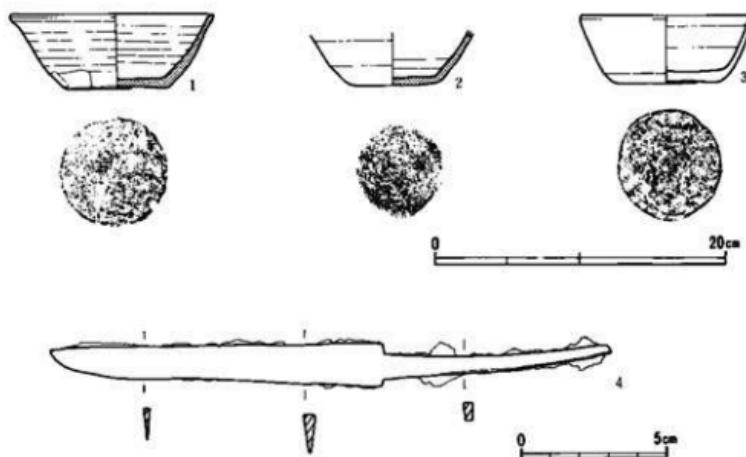
(遺構) 北壁側で3.55m、東壁側で3.10mを測り、隅丸長方形を呈する。検出面から床面までは25cmの掘り込みを有する。壁はやや傾斜しながら立ち上がり、カマドが設けられる部分とその両側を除き壁溝が存在する。溝の深さは5~10cmで、その幅も一定しない。床面は中央部でカマドとP1を結ぶ幅150cmの範囲では、硬質な良好な状態が観察され、東西の壁に近づくにつれ床面は軟らかになる。P1のほか柱穴は検出されていない。カマドは現況で壁への掘り込みを35cm残し、ロームに貼り付けられるような状態で両袖基部が遺存する。火袋部からカマド前面にかけての底部は径40cmで浅く窪む。

(遺物出土状況と出土遺物) カマドの前面を中心に小破片が出土しており、1、3の遺存



第96図 023号跡カマド実測図

が比較的良好な遺物は南壁に接するような位置で出土している。4は刀子で完存する。全長19.3cm, 刃長11.3cm, 茎長8.0cm, 刀部中間での刃幅1.2cmを測る。茎は中間で幅0.55cm, 厚さ0.3cmである。



第97図 023号跡出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)

023号跡出土土器（第97図）

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	口縁部半 下半全周	(14.0) (5.0) 7.3	密(長石) 普通 暗灰色	体部は全体にゆるやかに内湾し、口縁部は一度器厚を減じ、縁部で肥厚して聞く。全体に深めとなる。ロクロ調整。底部は最終的に二方向への手もちヘラケズリ。体部下端周辺手もちヘラケズリ。(図版47)
2	須恵器 杯	底部全周	— — 6.0	密(長石・雲母) やや不良 灰色	体部下端で弱く張り出し、中位にかけて直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部最終的に手もちヘラケズリ。
3	杯	—	11.9 4.5 7.3	密(スコリア) 良 明褐色	体部下端に丸味を付け、体部は比較的急角度で直線的に立ち上がる。ロクロ調整されるが、ロクロ目は大変弱い。底部は最終的に手もちヘラケズリ。(図版47)

024号跡（第98図、図版15）

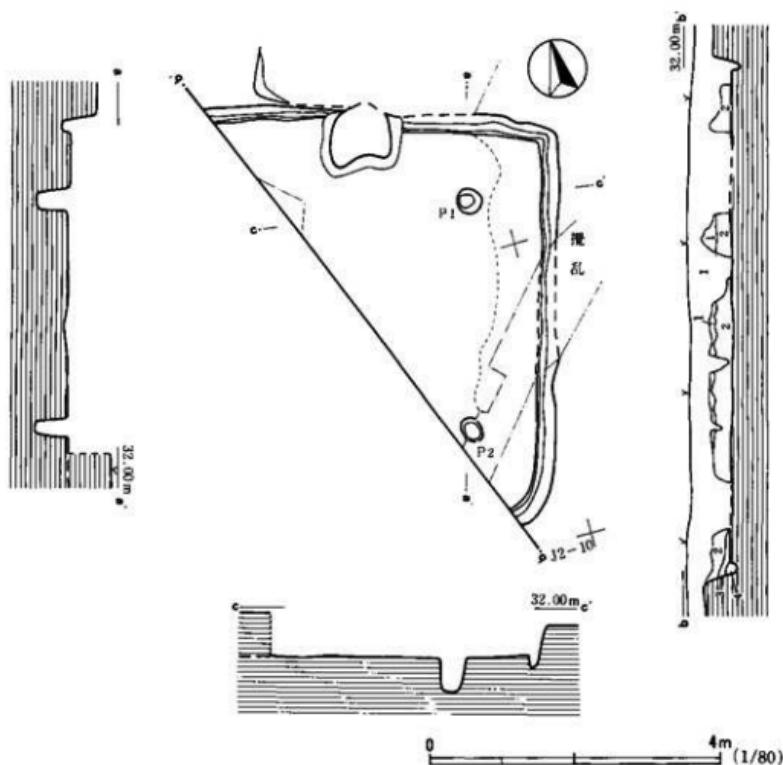
（位置） I-2-25・J-2-05グリッドを主に位置する。北側は021号跡と接し、約半分は調査区域外へ広がる。

（遺構） 2ヵ所のコーナー部を検出することができた。東壁は中間に攪乱が入るが、長さ5.16mを測る。壁は全体にやや傾斜して立ち上がり、壁下には深さ7~10cmの溝が検出されている。検出面から床面までは45cm前後の掘り込みを有する。床面は攪乱を受ける部分を除いては、東壁側でやや歓らかくなるところがあるほか、広い範囲で良好な固い面が確認される。ただ場所によっては小さな凹凸が生じている。柱穴はP1とP2の2ヵ所が検出されており、配列の間隔は310cmである。カマドは北東壁に設けられている。壁に八の字状に貼り付けられた両袖が残るのみで天井部は遺存していない。現況では壁へ掘り込みを20cm測り、火袋部の幅は56cmとなっている。底面には、長径70cm、短径50cmで深さ8cmの火床部が認められる。

（遺物出土状況と出土遺物） 比較的床面までの掘り込みを残していたにもかかわらず、遺物は覆土中から土師器と須恵器の小破片が出土しているだけである。完形となるものは1点もなく、図示した遺物も本跡に伴うものなのか確証は得られない状況である。

024号跡出土土器（第99図）

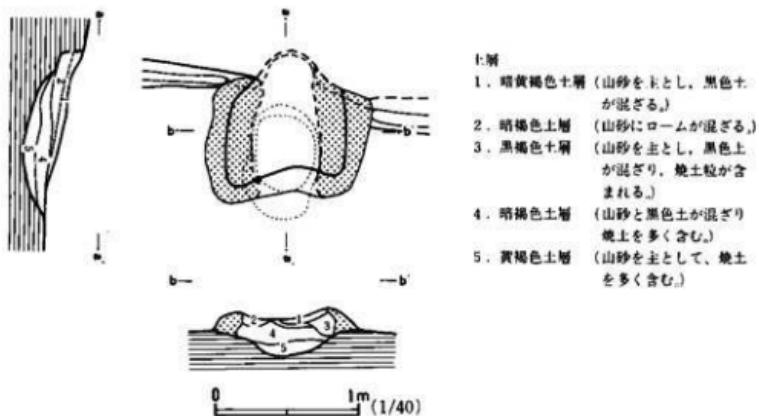
番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
3	甕	口縁部半	(12.5) — —	密(砂) 普通 暗褐色	口縁部は頸部からゆるやかに外湾し、口唇部はつまみ上げられる。口唇部内側は凹線状となる。外面胴部双方へラケズリ。内面ナデ。口縁部は外内面ともヨコナデ。



第98図 024号跡実測図



第99図 024号跡出土遺物実測図 (1/4)



第100図 024号跡カマド実測図

025号跡 (第101図、図版15)

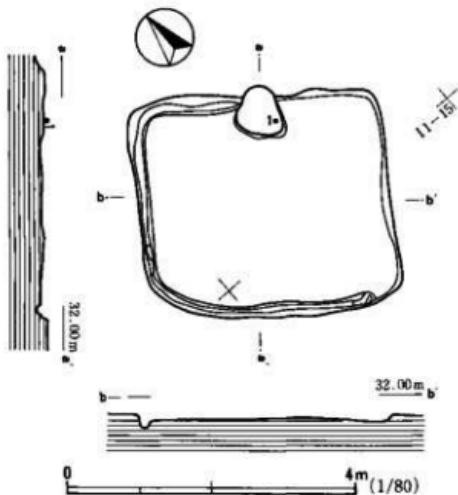
(位置) I 1-10グリッドを主に位置する。

(遺構) 検出面すでにかなり削平された状況を示しており、遺存は極めて悪い。現況では北東壁寄りで3.24m、南東壁側で2.80mを測り、全体としてかなり不整な隅丸長方形となっている。検出面から床面までは僅か5~10cm程度である。壁溝が北東壁カマド左側から南西壁にかけて検出されており、溝の底面に数カ所小ピットが認められる。床面は全体に凹凸を生じているが、特に軟らかな状態でもない。柱穴に関しては1カ所も検出されなかった。カマドは壁への掘り込みを僅かに残してはいるが、袖は砂や粘土が流れだしており、構造は明らかでない。

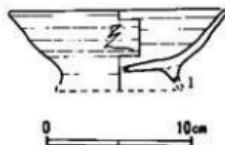
(遺物出土状況と出土遺物) 器形のわかる土器は1のみで、カマドの崩壊部から出土した。体部には焼成後に大変細く「足」と書いた刻書が認められる。

025号跡出土土器 (第102図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	梅	% 高台欠損	(15.0) — (8.0)	審 良 明褐色	体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反して閉く。底部にはハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整され、底部に回転糸切り痕を残す。 (図版47)



第101図 025号跡実測図



第102図 025号跡出土遺物実測図 (1/4)

027号跡 (第103図、図版16)

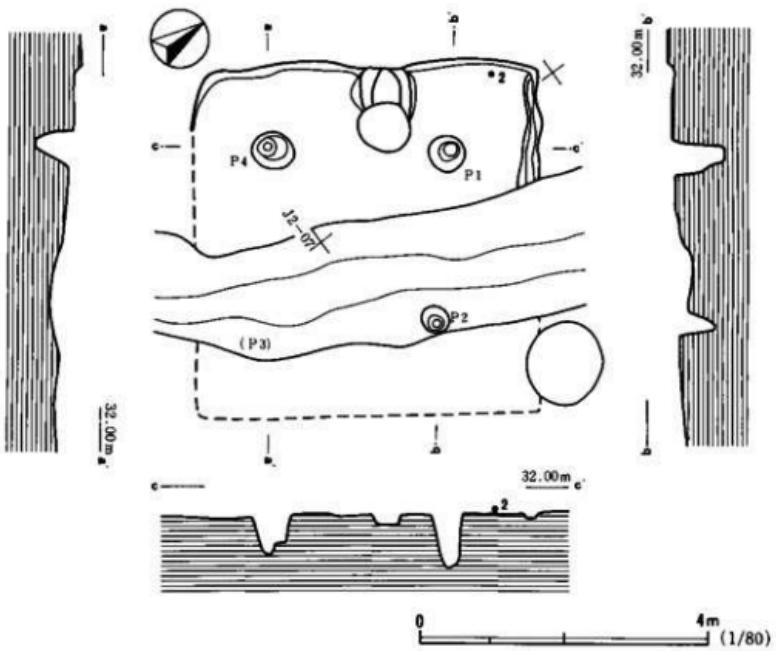
(位置) J2-02グリッドを主に位置し、508号跡に切られている。

(遺構) 遺存状態は極めて悪く、北西壁を残すのみとなっている。規模は下端で4.64mを測る。壁高は10cm程度、北西壁の一部に深さ5cmの溝が検出されている。床面は凹凸が生じており、固い面は残されていない。柱穴は3カ所に検出された。おそらく(P3)の位置にも本来はピットが存在していたと考えられるが、検出することができなかった。カマドは、北西壁中央に設けられるが壁から八の字状に貼り付けられた袖の基部を僅かに残すにすぎない。

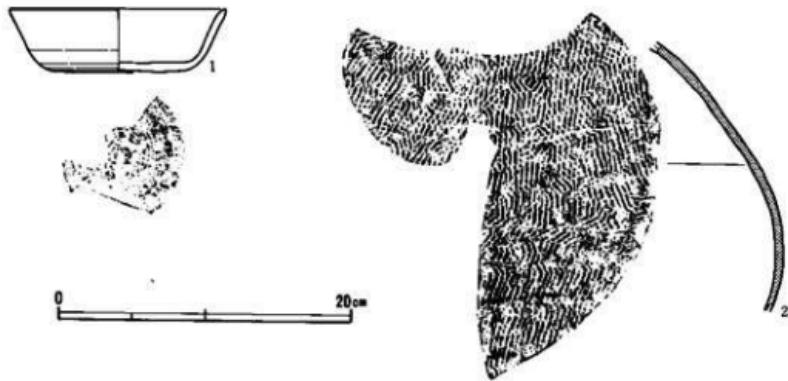
(遺物出土状況と出土遺物) 図示できる遺物は2点で他は小破片で数も僅かである。2はカマドの右側で、床面に密着するように出土している。

027号跡出土土器 (第104図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	△	(14.7) (4.2) (9.2)	密 良 外面 黒色 内面 暗色	安定した底部から体部は下端に丸味を付け比較的急角度で立ち上がる。ロクロ調整。底部は最終的に回転ヘラケズリの後軽いナデ。体部下半回転ヘラケズリ。 (図版47)



第103図 027号跡実測図



第104図 027号跡出土遺物実測図 (1/4)

028号跡 (第105図、図版16)

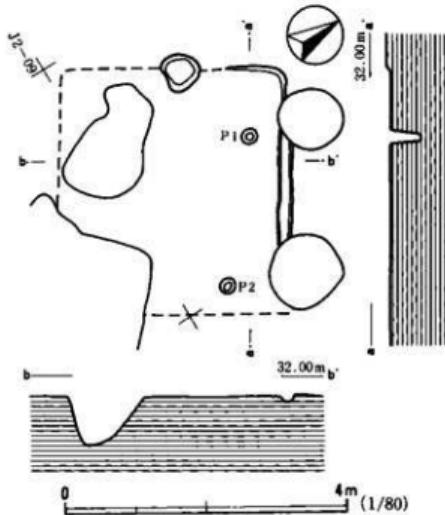
(位置) J2-03グリッドを主に位置し、029号跡と重複関係にある。

(遺構) 検出面すでに大部分が削平された状態で、また284~286号跡によっても切られるため、本来の形状はとどめていない。北東コーナー部に7cmの壁が遺存し、深さ5cm程の溝が一部に検出されているといった状況である。床面は所々に圓い面を残しているため、それを確認することができた。P1, P2については柱穴と断定し難い。カマドは火床部の検出により、その設置場所が判明した。

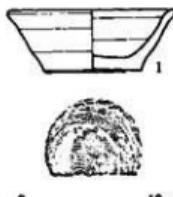
(遺物出土状況と出土遺物) 僅かな破片が出土している。1は遺構検出時にカマドの南東側から出土したものである。

028号跡出土土器 (第106図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	体部1/3 底部2/3	(12.0) (4.3) 7.0	密(スコリア) 普通 外面 橙褐色 内面 暗褐色	安定した底部から体部は弱い張りを認めるものの直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版47)



第105図 028号跡実測図



第106図 028号跡出土遺物実測図 (1/4)

029号跡 (第107図、図版16)

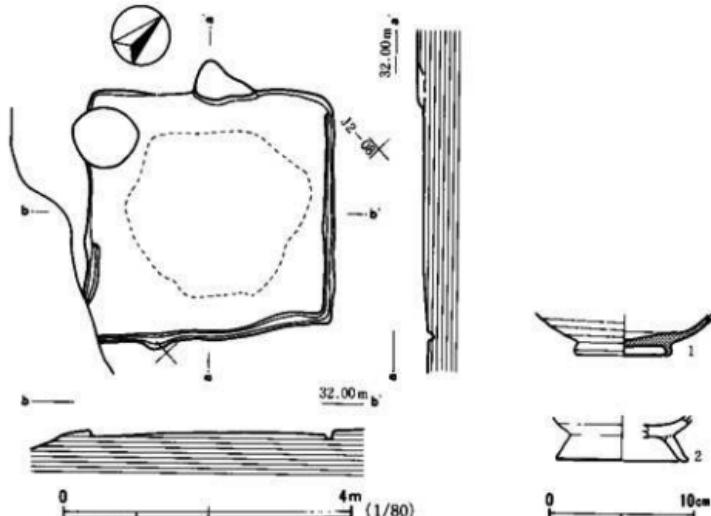
(位置) J2-08グリッドを主に位置する。

(遺構) 規模はやや長くなる北西壁側で3.25m、北東壁で2.85mを測る。南西コーナーは不明であるが、他のコーナー部は僅かに丸味をもつ。平面形はわかるものの検出面から床面までは5~8cmと大変浅い。壁溝は北東壁から南東壁にかけてと、南西壁の一部に検出され、幅10cm、深さは5~9cmである。床面は中央で径約230cmの範囲で固くしまった良好な面が確認された。南西壁寄りは中央よりやや軟らかくなる。柱穴は検出されていない。カマドは崩壊しており、袖も山砂の広がりを残すのみであり、構造は知り得ない。

(遺物出土状況と出土遺物) 破片が覆土中から出土しているが量は少ない。1は灰釉陶器で、2は土師器の高台部。他は図示できない小破片である。

029号跡出土土器 (第108図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	灰釉 椀	高台全周	— — (6.3)	審良 淡灰色	体部下半に弱い張りをもち内済気味に立ち上がる。底部にはハの字形に開き端部が内済する三日月高台が付けられる。ロクロ調整。底部は回転糸切り後回転ナデ調整を施すが、糸切りの痕跡を一部に残す。灰釉崩毛掛け。(図版47)
2	椀	高台1/2	— — (9.1)	密(秒) 普通 黄橙褐色	体部下半は全体に内済して立ち上がる。底部内面は平坦に作られ、外表面はハの字形に外に開く高台が付けられる。ロクロ調整。内面全体にミガキ。底部回転ナデ調整。



第107図 029号跡実測図

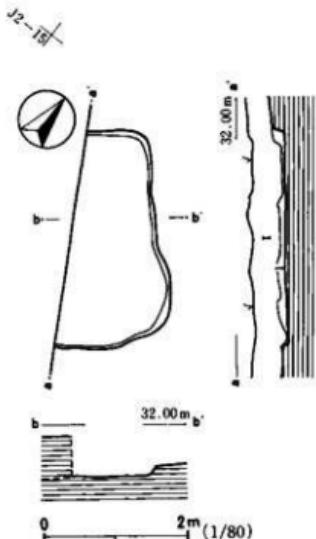
第108図 029号跡出土遺物実測図 (1/4)

030号跡 (第109図、図版16)

(位置) J 2-14グリッドを主に位置し、大半は調査区域の外に広がる。

(遺構) 一部を精査したにすぎず、検出した二つのコーナー部分は丸味を有する。掘り込みは8~18cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。また壁下に溝は検出されていない。床面は比較的平坦に構築されているが、特に固くしまっている様子は認められない。柱穴、カマドについては、調査部分からは検出されなかった。

(遺物出土状況と出土遺物) 土師器の小破片が若干出土しているが、図示できる遺物はない。



第109図 030号跡実測図

031号跡 (第110図)

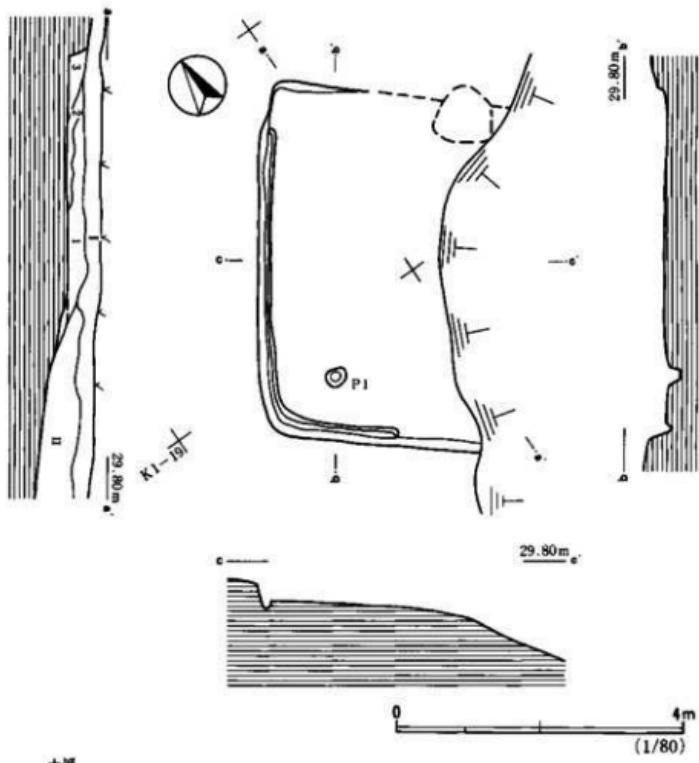
(位置) K1-13・18グリッドを主に位置し、南西側は台地の傾斜により消失している。

(遺構) 北西壁が完存し、4.55mを測る。壁高は良好な部分で21cmであり、僅かに傾斜しながら立ち上がる。北西壁から南西壁にかけて幅14cm、深さ10cm前後の壁溝がめぐる。床面は軟らかな状態で、台地の傾斜に呼応して東南側ではすでに谷に向かって流出している。ピットは柱穴と考えられるものは検出されず、深さ19cmのP1が南西コーナー付近から検出されただけである。カマドも大部分が流出していたが、僅かに山砂と焼土の広がりが観察され、図上の復元位置に設置されていたと考え大過ないと思われる。

031号跡出土土器 (第111図)

番号	器種	遺存状態	口 径 器 高 度 底 径	胎 土 燒 成 色 調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	体部	(13.8) — —	密(石英) 普通 暗灰色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部も外反しない。ロクロ調整されるがロクロ目は大変弱い。
2	杯	体部	(12.1) (3.8) (6.8)	密(砂) 普通 暗赤褐色	体部は全体に丸味を帯びて内湾しながら立ち上がる。外面体部はヘラケズリ後軽いミガキ。内面全体にヨコナデ後ミガキ。

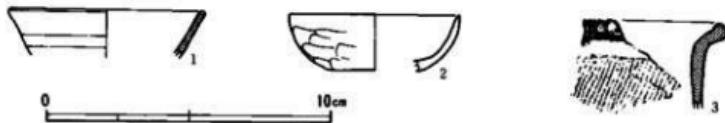
(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から土師器、須恵器の破片が出土している。比較的須恵器の小破片が多く認められ、器種では、杯のほか蓋、甕などが含まれている。また僅かであるが、台地整形区画から流れ込んだと思われる遺物も存在する。



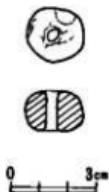
土層

- I. 表土擾乱層
- II. 黒褐色土層（黒色土とローム粒が混ざり、燒土粒を含む。）
 1. 黒色土層（しまりの弱い砂質黒色土を主として、ローム粒、燒土粒及び炭化物片を含む。）
 2. 黒褐色土層（黒色土とローム粒が混ざり、小ロームブロックを含む。）
 3. 黒褐色土層（2層より小ロームブロックの含まれ方が多くなる。）

第110図 031号跡実測図



第111図 031号跡出土遺物実測図 (1/4)



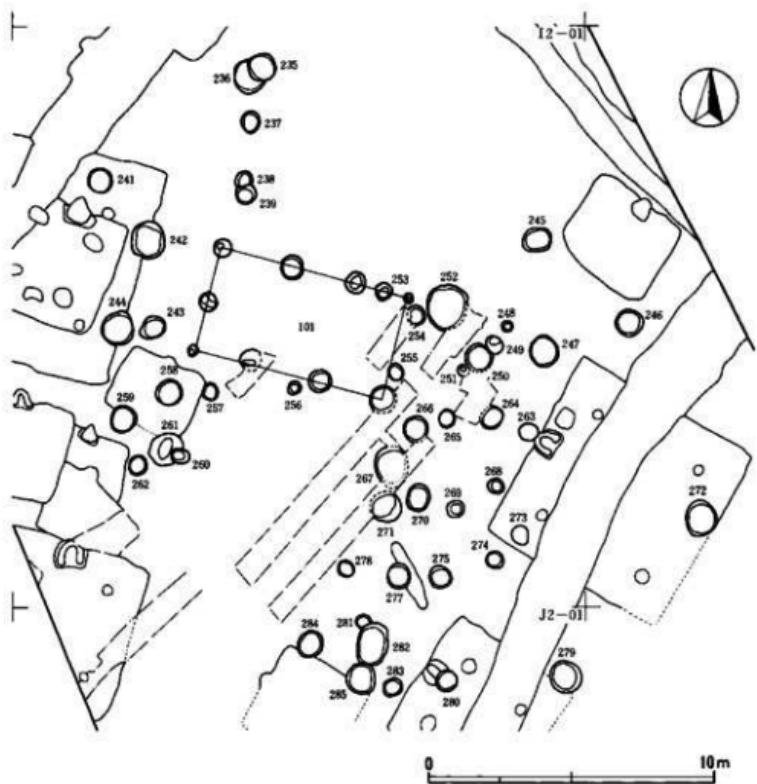
第112図 031号跡出土土玉実測図 (1/2)

第3表 住居跡新・旧遺構番号対照表

番号	主要グリッド	旧番号	011	H 3-11	022	022	I 2-19	008
001	B 7-04	031	012	H 2-20	028	023	I 2-19	009
002	F 3-19	027	013	H 3-23	016	024	I 2-25 J 2-06	007
003	G 3-08	026	014	H 2-24	015	025	I 1-10	006
004	G 3-24	025	015	H 2-23	014	026	I 1-20.25	005
005	H 2-03	023	016	H 2-24 I 2-04	017	027	J 2-02	003
006	H 2-03	021	017	I 3-01	013	028	J 2-03	002
007	H 2-08	020	018	I 2-10.15	012	029	J 2-08	001
008	H 2-15	018	019	I 2-10.15	011	030	J 2-14	004
009	H 2-14	019	020	I 2-19	010	031	K 1-13.18	029
010	H 3-03	024	021	I 2-25	030			

(2) 柱穴跡及び土壤と出土遺物

南区の I 2・J 2 区を中心とする台地の平坦部では円形を呈する落ち込みが多数検出された。当初は掘立柱建物跡の柱の掘り方であろうと考えたが、攪乱を著しく受けていたうえに掘り込みが大変浅かったという遺存状況から、建物の構成及び配置については 101 号跡を除いては確定することができなかった。2 株以上の建物跡が存在していたことだけは確実とみられる。また相対的に規模も大きく掘り方もしっかりしているものについては、掘立柱建物跡とは別の性格が考えられる。252 号跡はその代表で、出土遺物は検出されたどの住居跡から出土している土器よりも新しい(注 1)。このような遺構は成田市加定地遺跡(注 2)で検出されている土器など



第113図 南区台地平坦部検出柱穴跡・土壤配置図 (1/200)

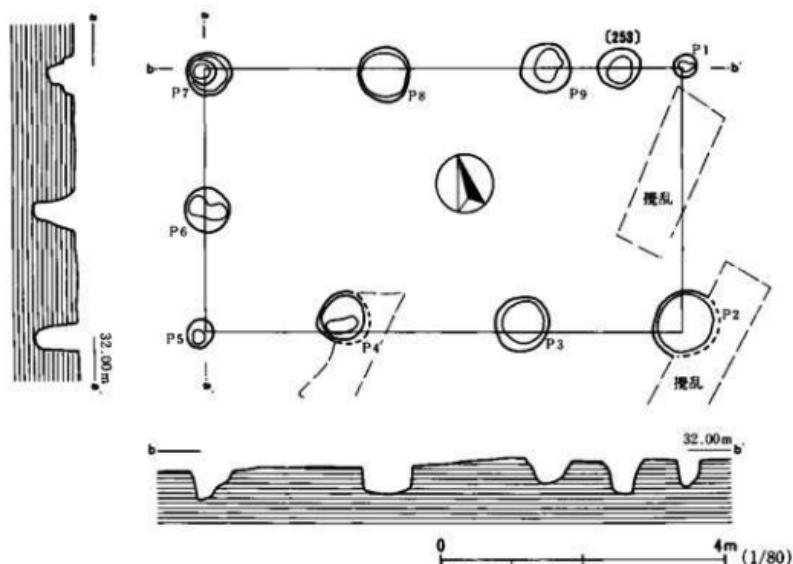
から類推すると、蓋然性を最も高めるのは土壤墓ということになる。しかし前に述べたように個々について性格付けすることは不可能で、土壤墓と考える遺構についても、遺物が出土した252・282号跡に説明を加え、他は一覧表によって示した。

101号跡（第114図、図版17）

（位置） I 2-12・13グリッドを主に位置する。

（遺構） 2間(3.6m)×3間(6.65m)の規模となる掘立柱建物跡である。主軸方向はN-77°-Wを示す。各柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、その直径はP1の34cmからP2の92cmまでと不ぞろいである。深さもP3の17cmからP5の60cmと一様ではない。覆土については概ね黒色土とローム粒が混ざった状態である。P4とP5では柱痕跡が確認され、径は35cmと25cmを測る。

なおP1とP2の間には深くにまで及ぶ攪乱があるため不明となっている。遺物は覆土中から細片が僅かに出土しているが、時期を決定するだけの遺物は認められなかった。



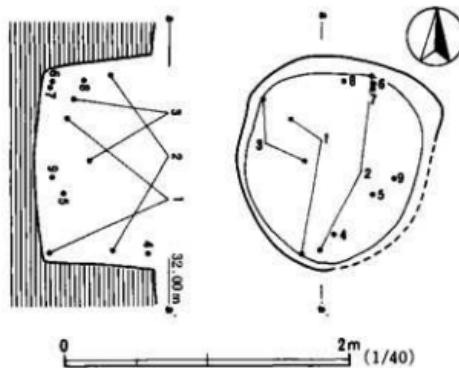
第114図 101号跡実測図

252号跡（第115図）

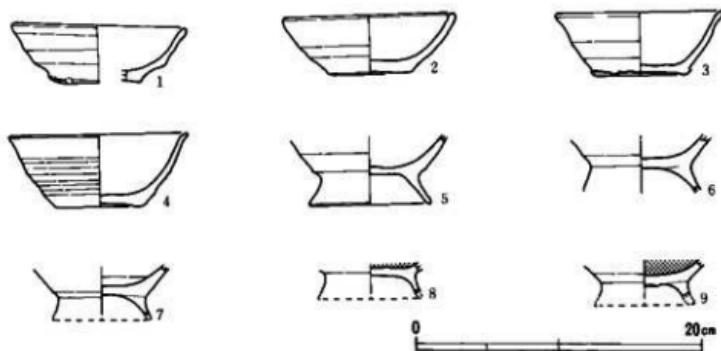
（位置） 12-12グリッドに位置する。

（遺構） 東側の一部に攪乱を受ける。規模は長径150cm、短径140cmで検出面からの深さは83cmを測る。円筒状の掘り方を示し、底面は中央部に向かってなだらかに低くなる。覆土はローム粒を多く含む茶褐色土層の単一層である。

（遺物出土状況と出土遺物） 覆土中から多数の土器片が出土している。繩文式土器が僅かに認められる他は、土師器と須恵器の細片である。完形土器はないが出土土師器は全体にそう時代的に隔たりをもたないものと考えられる。特徴となるのは足高高台を有する土器が多出している点である。



第115図 252号跡実測図



第116図 252号跡出土遺物実測図 (1/4)

252号跡出土土品 (第116図)

番号	器種	遺存状態	口径 底径	粘土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	杯	口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	(12.2) (3.9) (6.3)	密(砂) 普通 淡黄褐色	体部下半は一度外反するように張り出し、そこから直線的に立ち上がる。内面は全体に内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
2	杯	口縁一部 底部全周	(12.2) (3.9) 6.0	密(砂) 普通 淡褐色	体部下半に弱い張りをみせるが、全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口唇部は僅かに内傾するようく九く終わる。ロクロ調整されるがロクロ口は弱い。底部回転糸切り後無調整。

3	杯	口縁一部 底部凹	(11.7) (4.2) 6.8	密(スコリア) 普通 淡褐色	体部下端に粘土のはみ出しがめぐり、体部中位は直線的に立ち上がる。口縁部は端部が僅かに肥厚して弱く外反する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
4	杯	口縁一部 底部全周	(12.4) (4.9) 6.2	密(長石) 普通 暗褐色	体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部もゆるやかに外反する。ロクロ調整され、体部の中位ではロクロ目の間隔が密となる。底部回転糸切り無調整。
5	碗	高台凸	— — (8.6)	密(砂) 普通 淡褐色	体部下端は一度外側に張り出し棱を設け、体部は直線的に立ち上がる。底部には長めにハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整。高台貼り付け部は丁寧なナデ調整。
6	碗	下半全周 高台半欠	— — (接合部7.0)	密(砂) やや不良 淡褐色	体部下端で一度外側に張り出し、体部は直線的に立ち上がる。内面底部は平坦に作られ、外面には長めにハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整。
7	碗	下半全周 高台半欠	— — (接合部6.0)	密(砂) 普通 淡褐色	体部下端に弱い張りを設け直線的に立ち上がる。底部には内湾しながらハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整。
8	碗	底部全周 高台半欠	— — (接合部6.4)	密(砂) 普通 外面 黄褐色 内面 黒色	内面底部は平坦に作られ、体部は直線的に立ち上がる。外面にはハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整。内面ミガキ後黒色処理。
9	碗	底部凹 高台半欠	— — (接合部6.0)	密(砂) 普通 外面 淡褐色 内面 黒色	体部下半はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。底部にはハの字形に開く高台が付く。ロクロ調整。内面ミガキ後黒色処理。

282号跡 (117図)

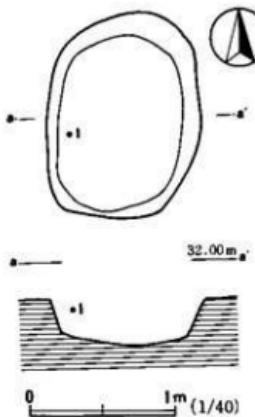
(位置) J2-02グリッドに位置し、北に281号跡、南に285号跡が接する。

(遺構) 長径142cm、短径108cmの梢円形を呈する。東側でやや低くなり検出面から底面まで34cmを測る。風はゆるやかに傾斜して立ち上がる。覆土は黒色土にローム粒が多く混ざる単一層である。

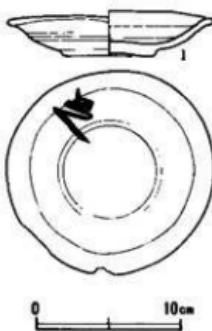
(遺物出土状況と出土遺物) 第118図の皿形土器が完形で出土した。検出面から僅かに掘り下げたところで正位で出土している。外面には割と鮮明に「足」と墨書きされている。

282号跡出土土器 (第118図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	皿	ほぼ完形	14.2 3.0 6.3	密(砂) 普通 明黄褐色	体部下半は一度大きく外側に開き、全体としてゆるやかに内湾し、口縁部は肥厚して外反する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。



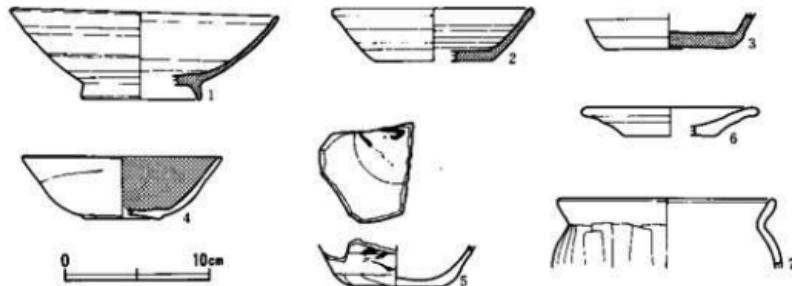
第117図 282号跡実測図



第118図 282号跡出土遺物実測図(1/4)

柱穴跡・土壤周辺出土土器（第119図）

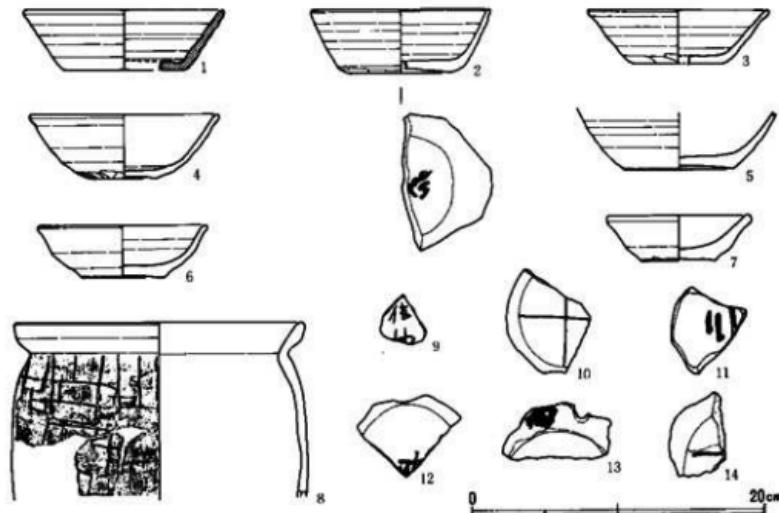
番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	灰陶 椀	口縁部 $\frac{1}{2}$ 高台 $\frac{1}{2}$	(18.5) (5.9) 4.2	密 良 灰色	体部は全体的にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。器厚は薄く、口縁部の内側に弱い沈線がめぐる。底部にはへの字形に聞く高台が付けられる。ロクロ調整。灰陶は潰け掛けによる。(図版47)
2	須恵器 杯	$\frac{1}{2}$	(14.0) (3.6) (8.1)	密(長石) 普通 灰色	体部は直線的に立ち上がり、口唇部を僅かに肥厚させる。ロクロ調整。底部最終的に手もちへラケズリ。
3	須恵器 杯	底部全周	— — 9.0	密 普通 灰白色	体部下半は直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部回転糸切りへラケズリ。体部下端回転へラケズリ。
4	杯	$\frac{1}{2}$	(13.8) (4.3) (5.6)	密(雲母・石英) 普通 外面 淡黄褐色 内面 黒色	体部外面では下半で内湾し、途中から僅かに外湾するよう立ち上がる。内面は直線的。ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。内面ミガキの後黒色処理。
5	杯	底部 $\frac{1}{2}$	— — (6.4)	密(紗) 普通 明褐色	体部下半は直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部と体部下端手もちへラケズリ。内面底部と、外面部に墨書きあり。
6	皿	$\frac{1}{2}$	(12.2) (2.0) (6.2)	密(紗) 良 褐色	体部外面は一度外側に張り出し、さらに口縁部を外反させる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
7	甕	口縁部 $\frac{1}{2}$	(15.0) — —	密(紗) 良 暗褐色	口縁部は頸部からゆるやかに外湾し、そこから直線的に立ち上がる。外面頸部縦方向へのへラケズリ。口縁部ヨコナダ。



第119図 柱穴跡・土壤固辺出土遺物実測図（1/4）

(3) グリッド出土遺物

表土及び搅乱層などから須恵器や土師器の土器類、土玉などの土製品が出土している。量的には少ない。また刻書、墨書きされている土師器の細片も出土しているが一部分しか残されていないため判読できない。第120図9のヘラ書きの一文字は人偏ははっきりしているが旁が不明である。



第120図 表採遺物実測図

表採土器（第120図）

番号	器種	造存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	%	(13.9) (3.95) (8.4)	密(スコリア) 良 灰色	安定した底部から直線的に立ち上がる。ロクロ調整。 底部回転ヘラケズリ。体部下端回転ヘラケズリ。
2	杯	%	(12.2) (4.25) (7.0)	密(砂) やや良 暗褐色	体部下端の手もちへラケズリ部分はやや張り出し気味 となり。体部は直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底 部回転ヘラケズリ。
3	杯	%	(12.3) (3.6) (6.2)	密(砂) (スコリア) やや良 黄褐色	体部は直線的に立ち上がり。上部で器厚を減じ、口縁 部は僅かに外反して縁部は丸味をもって終わる。ロク ロ調整。底部一方への手もちへラケズリ。体部下端 手もちへラケズリ。
4	杯	%	(12.8) (3.8) (4.4)	密(砂) やや良 茶褐色	体部下半はゆるやかに内湾し、中位で直線的に立ち上 がる。口縁部はかなり上位で僅かに外反する。ロクロ 調整。底部回転糸切り後無調整。体部下端手もちへラ ケズリ。
5	杯	体部% 底部全周	— — 7.6	密(砂) 良 黄褐色	体部は全体に僅かながら内湾しながら立ち上がる。ロ クロ調整。底部回転糸切り後ナデ。
6	杯	%	(13.3) (3.45) (5.5)	密(砂) やや良 茶褐色	体部下半は内湾しながら開き、中位で張りをもち。口 縁部はその端部で外反する。ロクロ調整。底部回転 糸切り後無調整。
7	杯	%	9.8 3.0 5.0	粗 (スコリア) (砂・小石) やや良 暗茶褐色	全体に器厚が厚く。体部下半に弱い張りをもち。口縁 部も肥厚して僅かに外反する。ロクロ調整。底部回転 糸切り後無調整。
8	甕	口縁部%	(19.6) — —	密(長石・石英) 良 暗褐色	張りをもたない肩部から頸部に至り、口縁部は頸部か らくの字形に外反し、外面端部は上につまみ上げられ た形となる。外面肩部は格子形となる叩き。外内面と も口縁部ヨコナデ。

第4表 台地平坦部検出柱穴跡・土壤一覧表

番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	旧番号	番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	旧番号
101P1	I 2-12	34	34	39	340	257	I 2-13	74	72	35	345
101P2	I 2-17	92	90	24	335	258	I 2-19	88	88	34	351
101P3	I 2-18	79	72	17	343	259	I 2-19	90	86	30	354
101P4	I 2-13	74	71	35	345	260	I 2-20	64	50	53	366
101P5	I 2-14	40	40	60	349	261	I 2-20	116	(110)	38	352
101P6	I 2-14	62	61	58	348	262	I 2-20	66	64	17	353
101P7	I 2-09	63	60	39	347	263	I 2-12	68	66	—	310
101P8	I 2-13	79	71	38	346	264	I 2-11	78	66	14	319
101P9	I 2-12	70	70	34	342	265	I 2-12	56	54	7	320
234	H 2-16	104	86	55	367	266	I 2-12	90	86	44	321
235	I 2-03	120	100	21	365	267	I 2-17	144	116	60	322
236	I 2-03	116	(110)	25	361	268	I 2-16	52	50	12	309
237	I 2-03	74	66	6	363	269	I 2-22	60	56	25	325
238	I 2-08	66	54	18	360	270	I 2-22	88	80	17	324
239	I 2-08	70	(68)	20	359	271	I 2-22	108	100	59	323
241	I 2-10	86	84	10	357	272	I 1-25	114	106	34	306
242	I 2-09	126	122	42	356	273	I 2-21	66	56	—	311
243	I 2-14	94	78	27	355	274	I 2-21	60	56	6	308
244	I 2-14:15	118	108	57	368	275	I 2-22	80	72	10	326
245	I 2-06	102	80	16	314	277	I 2-22	88	80	18	327
246	I 2-15	90	90	19	312	278	I 2-22	58	54	4	328
247	I 2-11	106	100	19	313	279	J 2-01	110	105	33	307
248	I 2-11	40	38	20	315	280	J 2-02	70	70	20	331
249	I 2-11	62	60	35	316	281	J 2-02	56	48	—	362
250	I 2-11	92	92	43	317	282	J 2-02	142	108	34	329
251	I 2-12	40	36	31	318	283	J 2-02	64	54	7	330
252	I 2-12	150	140	83	338	284	J 2-03	90	80	13	334
253	I 2-12	60	58	43	341	285	J 2-02	102	100	28	332
254	I 2-12	66	62	33	339	286	J 2-03	162	84	76	333
255	I 2-12	58	50	13	336	287	J 2-08	86	84	16	364
256	I 2-18	50	40	12	344						

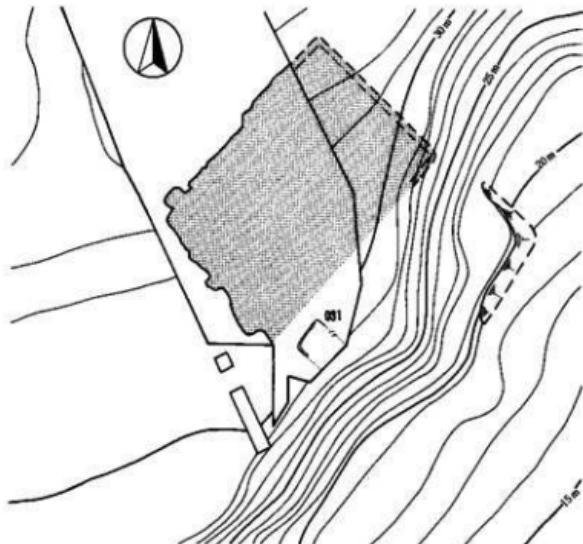
4. 中世・近世

平安時代以降の遺構と考えられるのは、J・Kの1・2区に検出された台地整形区画と堅穴状遺構2基、8条の溝条遺構である。

(1) 台地整形区画と出土遺物

台地整形区画は調査部分から考えると、全体を長方形に近い形に区画している様子を窺い知る。区画の南限については031号跡が破壊を免れていますことからすれば、これより北に置かれていたとみることができる。さらに地形的制約を考慮すれば第121図のような範囲が想定される。長辺での方向はN-43°-Eを指す。区画自体は台地平坦部側を一段掘り下げることによって設定される。掘り込みは北西側でハードローム層から50~90cmを測り、急な角度で底面に至る。西側ではゆるやかに傾斜して底面に達する。底面は武藏野ローム層中に設定されており平坦であるが、谷に向かってしだいに低くなっている。なおこの区画内は耕作土とローム粒が混ざる土で覆われていた。同様な区画が発見されている千葉市西屋敷遺跡（注3）と比較すると、掘り下げの規模はかなり小さいといえる。

区画の底面と縁辺からは様々な形態を呈する落ち込みが検出された。中央部では、不整形となる遺構が多くの切り合い関係を有して存在し、縁辺には地下式土壙2基をはじめとする円形、



第121図 台地整形区画推定範囲 (1/800)



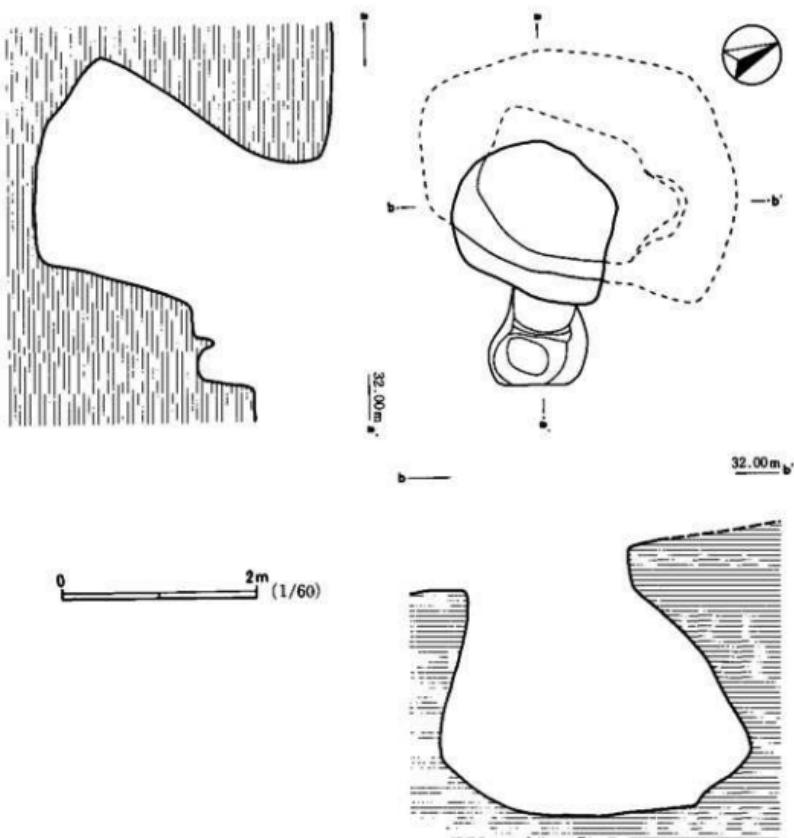
第122圖 古地整形區面內遺構配置圖 (1/160)

方形を呈する土壙が認められる。これらすべてが有機的な関係をもちながら、この区画全体を構成していたと考えられる。したがって区画全体のなかで存在している小形の土壙を、それぞれ個別に性格付けするにはそれなりの資料を必要とする。しかし小形の土壙からは出土遺物も少なくその機能を確定し難いものが多い。そのような土壙群のなかにも次に示すような特殊な性格をもつと思われる遺構が存在している。

301号跡（第123図、図版19）

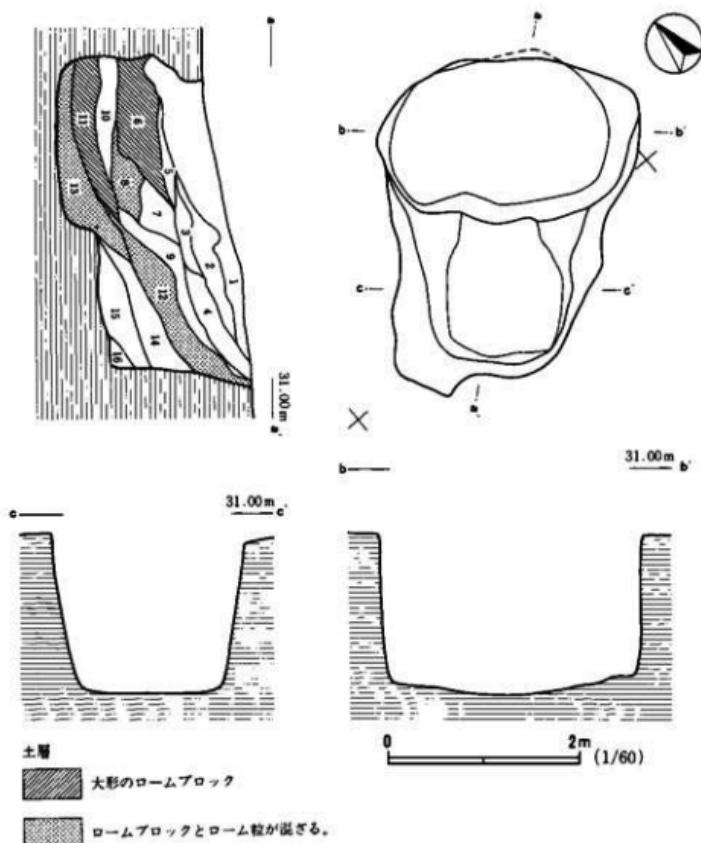
（位置） H1-24グリッドを主に位置する。

（遺構） 区画の縁辺に構築された地下式土壙である。南東側の張り出し部分は本跡には直



第123図 301号跡実測図

接続わないと考えられ、豊坑は直接地下室部へ降りる。現況では豊坑は長径160cm、短径140cmを測り不整な橢円形を呈している。地下室底面までの深さは、台地平坦部から300cm、整形区画の底面から220cmとなっている。地下室は平坦面は210cm×110cmと狭く、壁は全体に袋状に広がり、南西—北東方向に340cm、直交する方向に220cmの広がりを有する。天井部は遺存するものの崩落した部分が多いと考えられる。覆土はこの天井部の崩落したロームブロックと、黒色土とロームが混ざり合った土が主となる。地下室の底面は灰白色粘土層中に構築されており水はけは悪い。遺物は覆土中に流れ込んだ土師器の細片が僅かに出土しているにとどまる。



第124図 344号跡実測図

344号跡（第124図、図版19）

（位置） K2-01グリッドを主に位置する。

（遺構） 壁坑と地下室を有する地下式土壙である。主軸方向はN-40°-Eを示す。壁坑は区画の縁辺側に設けられ平坦部から135cmの深さを測る。底面は主軸方向に140cm、直交する方向に最大で120cmを測り壁とともに地下室寄りで幅を狭くしている。地下室は整形区画の内側で、天井部はすでに崩落して遺存していない。底面は壁坑の底から約40cm低く、比較的平坦で、主軸と直交する方向が長径となる橢円形を呈する。その規模は230cm×150cmを測る。壁は下端に丸味をもちやや傾斜して立ち上がる。地下室底面は灰白色の粘土層中に置かれ水はけが悪い。覆土は天井崩落のロームブロックと、黒色土およびローム粒が主となる。

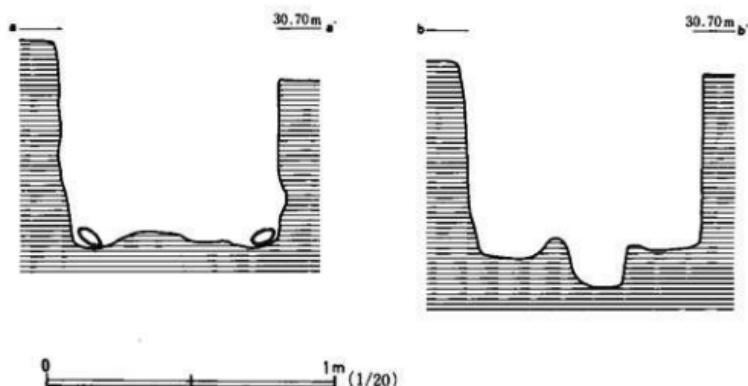
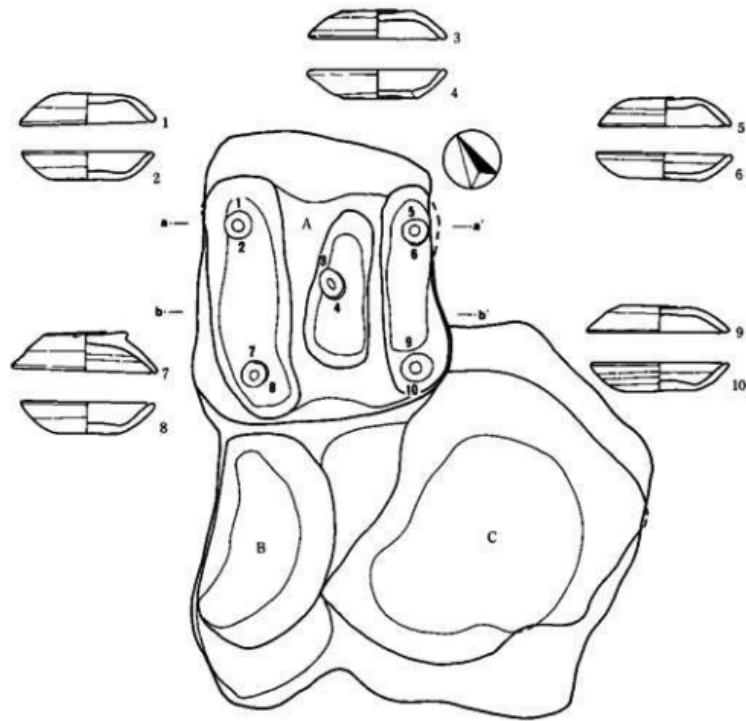
（遺物出土状況と出土遺物） 覆土中から土師器の細片が出土しているが、流れ込んで混入している状況である。第130図7の杯は壁坑部の上位から出土しているが、やはり流れ込みによるものと考えられる。

316号跡（第125図、図版20）

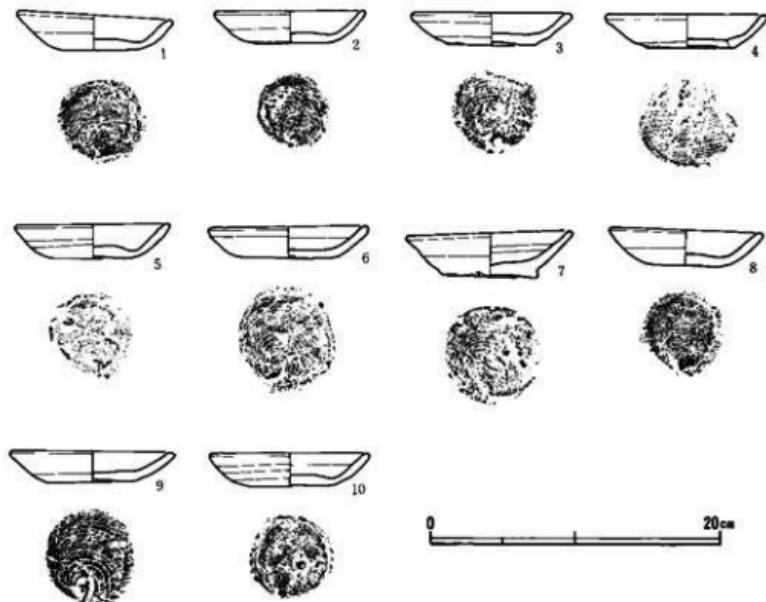
（位置） J1-08グリッドに位置する。

（遺構） 3基の切り合い関係をもつが、A号跡が最も新しくまた特殊である。平面形は100cm×80cmの隅丸長方形を呈し、55cm前後の深さを測る。主軸方向はN-30°-Eを示す。底面にはロームを削り出して長楕円形を呈する凹部を3カ所設けている。中央の窪みは長径54cm、短径23cmで左右の窪みより規模は小さくなるが、深さは16cmで一番深く作られている。覆土は荒いロームと黒色土を主とする全体にしまりの弱い土の單一層である。

（遺物出土状況と出土遺物） 底面から皿形土器が完形で10点出土した。2枚の皿を合子状に合わせ、身と蓋という状態で1組となり、これが同じような状態で5組、5カ所に置かれた状況で出土している。4組については底面各コーナー付近の窪み部に、そしてもう1組を中心の窪みに置いている。5組のそれぞれ蓋となる皿を取り上げた結果、中には流入土及び遺物については全く認められず、中空状態となっていた。覆土、底面に骨片などは検出されておらず、この10点以外には他の遺物は出土していない。



第125圖 316號鉆尖測圖



第126図 316号跡出土遺物実測図 (1/4)

316号跡出土土器 (第126図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	皿	完形	10.8 2.4 5.7	密(スコリア) 良 黄褐色	体部下半に丸味を有し、直線的に立ち上がる。底部内面中央はやや盛り上がり、体部との境は器厚を減じる。ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。(図版47)
2	皿	完形	10.4 2.2 4.2	密(スコリア) 良 黄褐色	体部下半で一度外側に聞くように内湾し、体部は直線的に立ち上がる。ロクロ調整されるが全体にロクロ目は弱い。底部回転糸切り無調整。(図版47)
3	皿	完形	11.1 2.2 6.0	密(砂) 良 明褐色	体部下半に弱い張りを有し、体部は直線的に立ち上がり。口唇部は僅かに肥厚する。ロクロ調整されるが全体にロクロ目は弱い。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
4	皿	完形	11.1 2.3 6.0	密(スコリア) 良 明褐色	体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり。口唇部を僅かに肥厚させる。ロクロ調整されるがロクロ目は弱い。底部静止糸切り後無調整。(図版48)
5	皿	完形	10.7 2.3 5.4	密(砂) 良 黄褐色	体部外面は内湾するように立ち上がり、内面は底部中央が盛り上がり、体部との境で器厚を減じ直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)

6	皿	完形	11.0 2.1 6.8	密(砂) 良 明褐色	底部から体部の器厚は一定し、やや内溝気味に立ち上がり、口唇部を僅かに肥厚させる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
7	皿	ほぼ完形	11.6 3.0 6.6	密(砂・スコリア) 良 黄褐色	底部周辺に粘土のはみ出しを残し、体部は一度内溝して立ち上がり、口縁部で僅かに外反して開く。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
8	皿	完形	10.6 2.4 5.0	密(砂) 良 黄褐色	体部下半に丸味を有し、体部は中間で器厚を増し、外面はゆるやかに内溝するように立ち上がる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
9	皿	完形	11.3 2.1 6.2	密(砂・スコリア) 良 明褐色	体部下半に弱い張りを有し、浅めに外側へ直線的に開く。口唇部は一筋で平坦にされる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
10	皿	完形	11.0 2.3 5.7	密(砂) 良 明褐色	体部外面は内溝気味に立ち上がり、内面は底部中央が盛り上がり、体部は直線的になる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)

328号跡 (第127図、図版21)

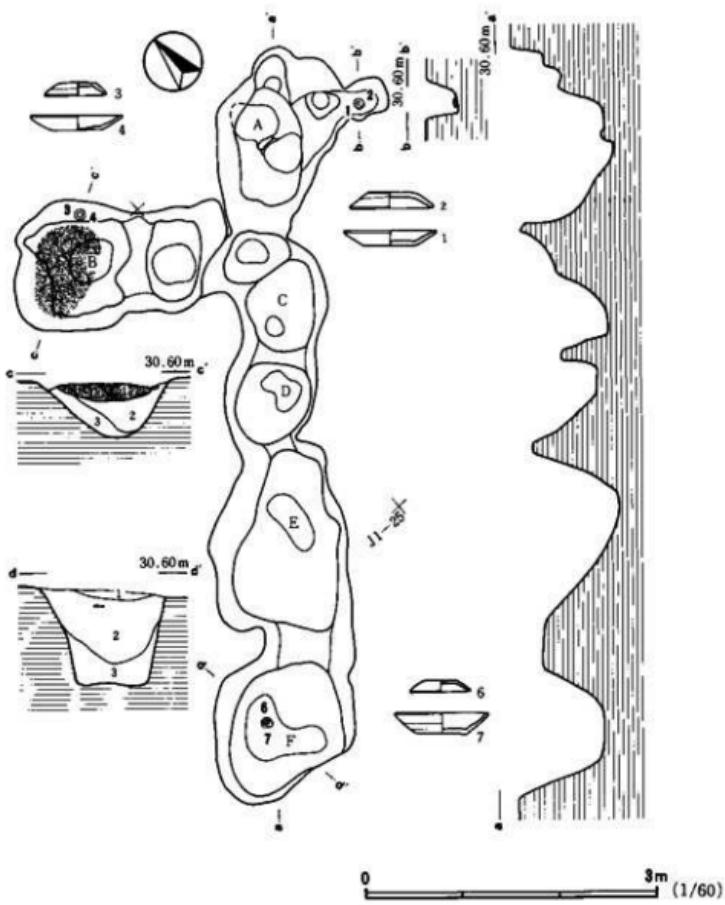
(位置) J 1-19・20・25グリッドを主に位置する。

(遺構) A・C～F号跡の5基の土壙がN-35°-Eの方向に連続的に並び、B号跡がそれに直交するような形でC号跡付近から北西に張り出す。各土壙の平面形は橢円形や円形に近い形を呈するがいずれも不整となっている。また掘り方の断面形態は漏斗状を呈する。覆土はA・C～F号跡については概ねF号跡と同様で細かくは分層されない。またB号跡覆土上面には焼土が約20cmの厚さで堆積していた。6基が同時期に存在していたか否かは確定できない。

(遺物出土状況と出土遺物) A号跡には小さく張り出す部分が存在し、その底部に皿形土器が合子状に合わさって出土している。B号跡では覆土の上面でやはり2枚の皿形土器が検出された。これには大小が存在し、大きめの皿の上に小形の皿が伏せられたような状態で出土している。また覆土中からは第128図5が単独で出土した。さらにF号跡でも大小の皿形土器がB号跡と同じような状態で覆土中に検出された。極めて興味深い出土状況である。

328号跡出土土器 (第128図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	皿	%	(11.0) (1.7) (6.0)	密(スコリア) 不良 明褐色	体部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。相対的に浅めとなる。ロクロ調整。器面全体が磨滅。底部回転糸切り後手もちヘラケズリ(?)。
2	皿	完形	9.9 2.0 4.8	密(スコリア) 良 橙褐色	体部下半に弱い張りを有し、外側に開きながら直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)



土層

C-C'

1. 焼土層 (焼土に灰と黒色土が混ざる。)

2. 暗褐色土層 (ぼろぼろとしたロームを主に焼土と黒色土が混ざる。)

3. 暗褐色土層 (2層と似ているが焼土を含まない。)

d-d'

1. 暗褐色土層 (荒いローム粒に黒色土が混ざる。)

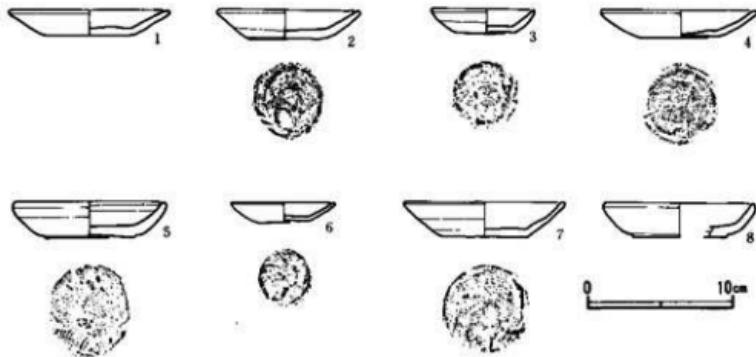
2. 暗褐色土層 (小ロームブロックを主とする。)

3. 褐色上層 (ローム粒を主とする。)

第127図 328号跡実測図

3	盤	完形	7.1 1.6 4.0	密 普通 暗褐色	小形で体部は直線的に立ち上がり、口唇部を僅かに内傾させる。内面は底部と体部との境で急激に屈曲する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
4	盤	½	10.7 1.8 5.5	密(スコリア) やや不良 褐色	体部下端に丸味を有し、外側に開きながら直線的に立ち上がる。底部は大変薄く作られ、内面の周辺が盛り上がる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)

5	■	体部△ 底部全周	10.4 2.4 6.0	密(砂) 普通 暗褐色	体部下端で一度張り出し、全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口唇部は短く直立気味となる。器厚は全体に厚い。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
6	■	完形	7.2 1.3 3.5	密(スコリア) 良 棕褐色	小形で体部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。内面底部僅かに盛り上がりをみせる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
7	■	ほぼ完形	11.1 2.3 6.0	密(スコリア) 普通 暗橙褐色	体部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。内面は底部と体部との境で急激に屈曲する。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。(図版48)
8	■	△	(10.5) (2.3) (6.3)	密(砂) 普通 外面 黒色 内面 褐色	体部下半に張りを有し、体部は開きながら直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味となる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。



第128図 328号跡出土上遺物実測図 (1/4)

317号跡 (第129図、図版21)

(位置) J 1-09・14グリッドを主に位置する。

(遺構) 多数の土壙が連続的に集合する。

(遺物出土状況と出土遺物) 東西に分かれる土壙群のちょうど両群を連絡するような位置に存在する不整の土壙の覆土から第130図1、2の2枚の皿形土器が出土している。この2枚は入子の状態で正位で検出されたものである。

323号跡 (第129図、図版22)

(位置) J 2-17・18グリッドを主に位置し、区画のコーナー部分に近接する。

(遺構) 平面形は隅丸長方形を呈し下端で240cm×240cmの規模を有し、深さは平坦部から65cm前後、区画内の底面からは10cmを測る。壁はゆるやかに傾斜しながら立ち上がる。また、

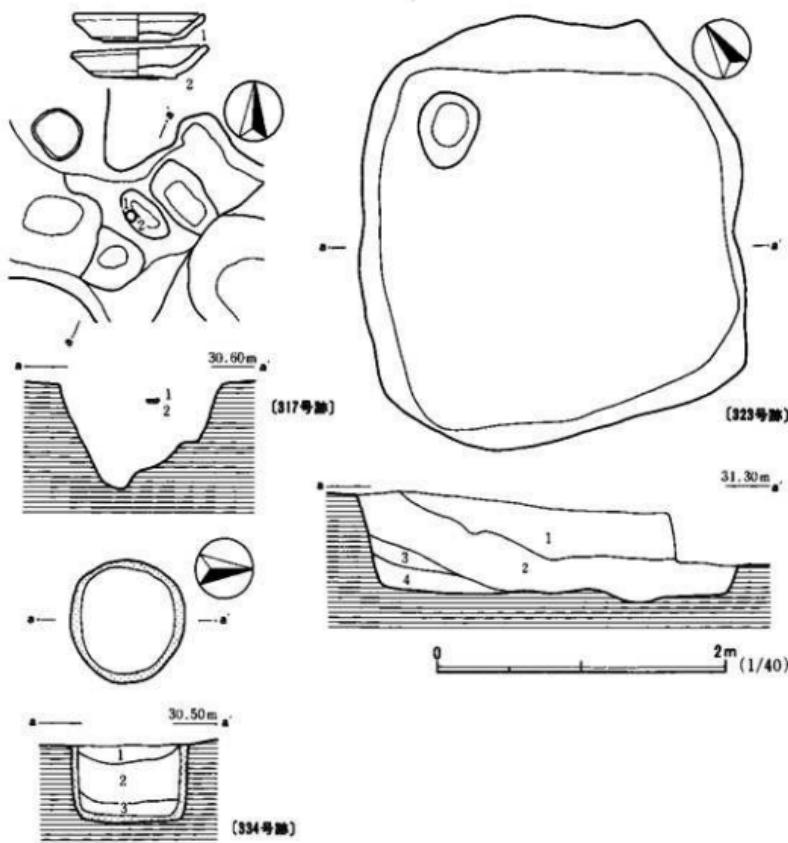
底面には1ヵ所50cm×40cm、深さ約20cmの小ピットが存在し、全体に凹凸がみられる。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土の下層から第130図17の土器が出土している。

334号跡 (第129図、図版22)

(位置) J 1-25グリッドに位置する。

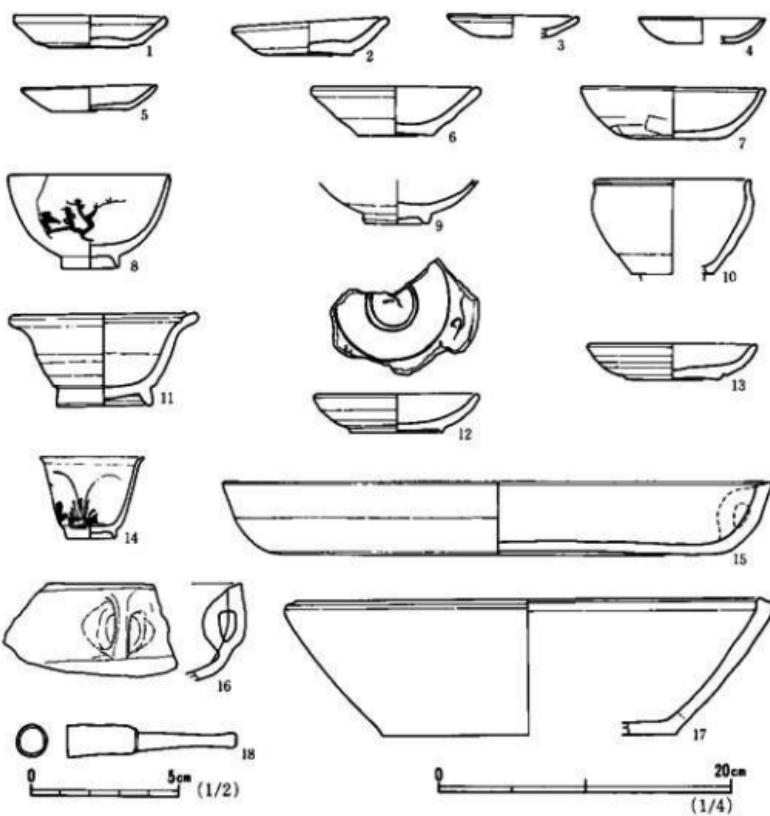
(遺構) 長径80cm、深さ50cmの円筒形を呈する掘り方の、底面及び壁面に丁寧に粘土を貼り付けた土壤である。粘土は約5cmの厚さで貼り付けられており、均一な厚さをみせている。遺物は土器の細片が1点出土しているが図示できる大きさではない。なお粘土を貼り付けた土壤は他に329、340、342、343号跡の4基がある。



第129図 317・323・334号跡実測図

台地整形区画内出土遺物

区画内を覆っていた、黒色土とローム粒が混ざった土層中、及び区画内底面で検出された土壤の覆土からは土師質土器、陶磁器、キセルなどが出土した。



第130図 台地整形区画内出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)

台地整形区画出土土器・陶磁器 (第130図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整	
1	皿	ほぼ完形	10.4 2.2 5.4	密(沙) 良 黄褐色	体部下半で一度外に張り出し、ゆるやかに開いて。口縁部は肥厚し尖り気味に終わる。ロクロ調整。内面底部中央は盛り上がる。底部回転未切り後無調整。 (図版49)	

2	皿	ほぼ完形	10.8 2.3 6.2	密(砂スコリア) 良 黄褐色	体部下半に丸味を有し、ゆるやかに開く。口唇部は僅かに肥厚し、外側に少し外反するようにして終わる。ロクロ調整。内面底部中央は盛り上がる。底部回転糸切り後無調整。
3	皿	3/4	(9.0) (1.5) (5.0)	密(砂スコリア) 普通 褐色	体部は底部から直線的に開いて口縁部に至る。全体に浅め。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
4	皿	口縁一部 底部1/3	(8.7) (1.7) (4.8)	密 普通 暗褐色	体部は全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がる。ロクロ調整。内面底部の端は僅かに僅む。底部回転糸切り後無調整。
5	皿	2/3	9.2 1.7 5.0	密(砂スコリア) 普通 褐色	体部はほぼ直線的に開き、口縁部外側で僅かに内湾気味となる。ロクロ調整。内面底部中央が窪む。底部回転糸切り後無調整。口縁部に油墨付着。(図版49)
6	杯	口縁部1/3 底部全周	(11.8) (3.4) (5.2)	密(砂) 普通 褐色	割と径の小さな底部から、体部は途中で弱い張りをみせ、口唇部は僅かに肥厚して終わる。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
7	杯	3/4	(12.6) (3.6) (7.6)	密(砂) 普通 外面暗褐色 内面 橙褐色	体部は全体にゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口唇部が僅かに外に開く。そのため口唇部内側に弱い棱が生じる。外面体部上半はヘラケズリ後軽いミガキ。内面全体にミガキ。
8	碗	体部一部 高台全周	(11.0) (6.2) (3.9)	密 良 断面 暗褐色	体部下半から中位にかけて丸味をもたせ、口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味となる。刷毛塗。外面にのみ絵が施される。
9	碗	体部下半	— — 4.4	密 良 断面 濃灰色	体部は内湾気味に大きく外側に開く。外面の底部を除く部分に緑灰色の釉が掛けられ。内面は、底部中央付近を除き、青と緑の中間を呈する釉が掛けられる。
10	碗	体部1/3	(10.6) — —	密 良 断面 灰白色	高台が付くと考えられる。体部はゆるやかに立ち上がり、上部に張りを有し、一度絞られ、口縁部は僅かに外反させる。外面底部付近を除き鉄錆が掛けられる。
11	碗	体部一部 高台全周	(13.4) (6.0) (6.5)	密 良 断面 乳白色	底部に削り出しによる高台が付き、体部はゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部は肥厚して外反する。内面に沈線が一層する。外内面とも体部中位まで茶と黄褐色の釉が掛けられる。
12	皿	体部一部 底部1/3	(11.4) (2.5) (6.4)	密 良 断面 乳白色	底部には低い高台が付き、体部はゆるやかに外に開きながら内湾する。全体に乳白色の釉が掛けられ、内面のみ絵が施される。
13	皿	3/4	(11.6) (2.3) (3.4)	密 良 断面 乳白色	底面端部が削り出しによって低い高台状となり。体部は下端で鋭く張り出し、ゆるやかに立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。全体に乳白色の釉が掛けられる。
14	碗	3/4	7.0 5.4 3.4	緻密 良 断面 白色	体部は下端で小さく張り出し、僅かに外側に開きながら立ち上がり。口縁部が端部で外反する。外面にのみ絵が施される。(図版49)
15	焰塔	1/3	37.5 4.9 31.5	密(金雲母) 普通 暗褐色	平坦な底部から、体部は下端に丸味を有し、僅かに内湾しながら立ち上がる。口唇部は平坦に作られる。内面につまみは遺存していない。ロクロによって調整されたと考えられる。

17	鍋	体部% 底部%	(33.4) (9.0) (20.0)	密 (長石・細粒) (スコリア) 普通 暗褐色	体部は直線的に開きながら立ち上がり、口唇部は肥厚して上端面が凹状となり、先端部が内傾する。
----	---	------------	----------------------------	-------------------------------------	---

第5表 台地整形区画内検出土壙新・旧遺構番号対照表

番号	主要グリッド	旧番号	317	J 1-14	106	328	J 2-21	124
301	I 1-24	105	318	J 1-10	132	330	J 2-16	120
302	I 1-23	104	319	J 1-10		331	J 2-16	121
303	I 1-24		320	J 2-11		332	J 2-17	303D
304	I 1-24		321	J 1-15		333	J 2-18	113
305	I 1-24		322	J 1-15	123	334	J 1-25	117
306	J 1-05			J 2-16	122	335	J 2-22	116
307	J 1-05		323	J 2-17	108	336	J 2-22	109
308	J 1-05		324	J 1-17	137	337	J 2-22	110
309	J 1-05		325	J 1-17	136	338	K 2-01	111
310	J 1-10		326	J 1-18	134	339	K 1-07	127
311	J 1-04		327	J 2-19	135	340	K 1-08	126
312	J 1-03.07 08.13	101	328A	J 1-19	118E	341	K 1-08	119
313	J 1-04	130	328B	J 1-15	107	342	K 1-09	115
314	J 1-05.10		328C	J 1-19	118D	343	K 1-10	114
315	J 1-08	131	328D	J 1-20	118C	344	K 2-01	112
316	J 1-08	103	328E	J 1-20	118B			
317	J 1-09.15	128	328F	J 1-25	118A			

(2) 穴状遺構と出土遺物

401号跡（第131図、図版23）

(位置) I 3-06グリッドを主に位置する。

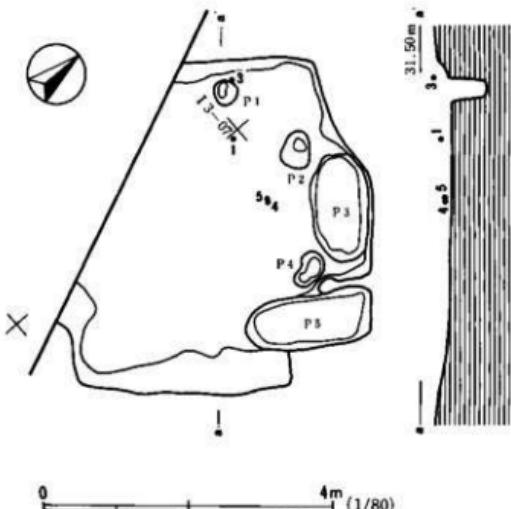
(遺構) 017号跡を切断している不整の落ち込みを発見した。セクションベルトを残して掘り進めた結果、比較的硬い床面を検出することができた。一部は調査区外へ広がり、長軸は450cmを測る。検出面から底面までは大変ゆるやかに傾斜し、底面は硬質だが小さな凹凸が全体にみられる。また円形の小ピット P1, P2, P4と梢円形を呈する P3, P5の合計5カ所のピットを検出した。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土下層から陶磁器と古錢が出土している。特に集中する傾

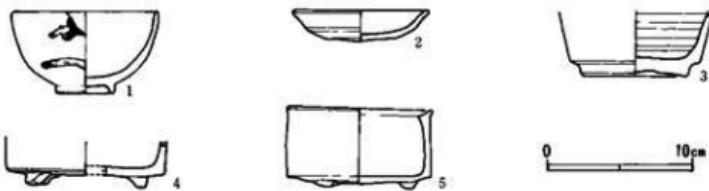
向は認められず、また完形となった土器も存在しない。

401号跡出土陶磁器（第132図）

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	碗	口縁一部 底部全周	(10.0) (5.6) (4.0)	緻密 良 断面 白色	高台を付け。体部は下位から中位に丸味を有し、口縁部は器厚を減じ、端部は直立して丸く終わる。外面のみ絵が施される。
2	皿	体部約 底部約	(9.4) (2.1) (4.9)	密 良 断面 淡褐色	底部は回転糸切り後無調整でやや中央が出て不安定となる。体部は中位に弱い張りを有し、口縁部は外反する。外面底部を除き、淡赤茶褐色の釉が掛けられる。
3	鉢	底部約	— — (7.5)	緻密 良 断面 淡灰色	底部は上げ底気味となり、体部は下端で張り出し、急な角度で直線的に立ち上がる。外面は淡青色、内面は淡褐色の釉が掛けられる。
4	香炉	底部約	— — (10.8)	やや粗 良 断面 乳白色	体部下端で張り出し、僅かに内傾するように立ち上がる。底部には貼り付けによる脚が1個遺存するが、3カ所に付いていたと考えられる。外面の底部を除く部分に緑黄色の釉が掛けられる。
5	香炉	体部約 底部全周	10.0 5.3 10.0	密 良 断面 乳白色	体部は下端で張り出して、僅かに内傾しながら立ち上がる。口縁部は内側に張り出し、蓋を受ける形となる。外面は底部を除き黄灰色の釉が掛けられる。底部に脚3個が付く。（図版49）



第131図 401号跡実測図



第132図 401号跡出土遺物実測図 (1/4)



第133図 401号跡出土古銭拓影図 (2/3)

402号跡 (第134図、図版23)

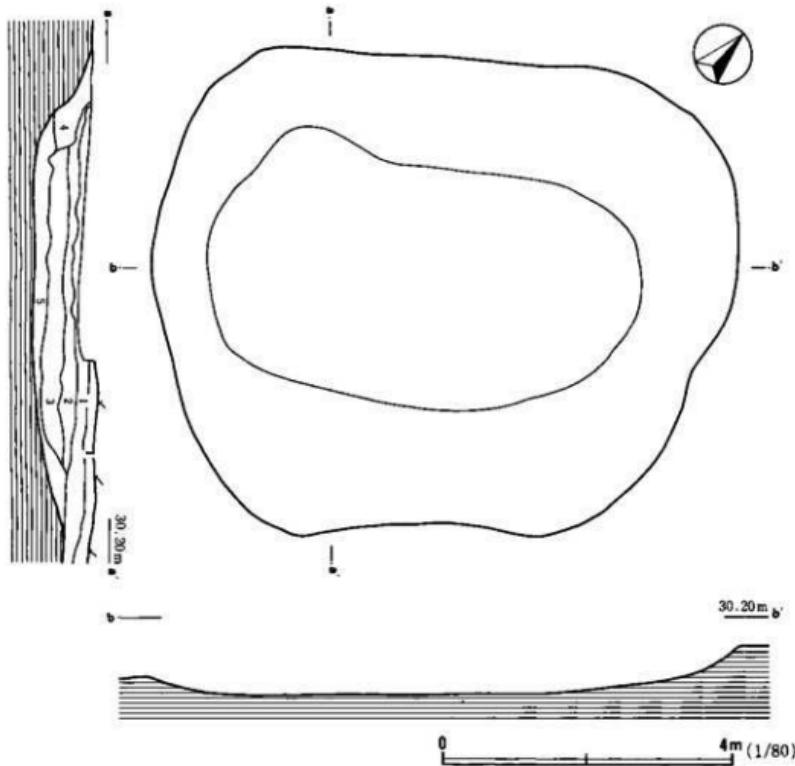
(位置) J1-22・23・K1-02・03グリッドを主に位置する。

(構造) 長径8.0m、短径6.3mの橢円形に近い平面形を呈し、深さは30~70cmとなるかなり大きな遺構である。断面形態は擂鉢状となり、壁はゆるやかな傾斜で立ち上がる。底面は比較的平坦であるが、特に硬くなる部分は確認されない。

(遺物出土状況と出土遺物) 覆土中から多くの土師器、陶器の破片、キセルなどが出土した。いずれも流れ込んだような状況で出土している。

402号跡出土土器・陶磁器 (第135図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	須恵器 杯	%	(13.4) (4.0) (9.0)	密(長石) 良 青灰色	体部下端に丸味をもち、直線的に立ち上がる。口唇部は角頭状となる。ロクロ調整。底部回転ヘラケズリ。
2	杯	%	(12.4) (4.2) (6.6)	密(スコリア) 普通 暗褐色	体部は直線的に立ち上がり、口唇部が僅かに外反する。ロクロ調整。体部下端手もちヘラケズリ。底部回転糸切り後無調整。
3	杯	体部% 底部%	(12.4) (3.8) (6.4)	密(石英) 普通 明褐色	体部は直線的に立ち上がり、口唇部が肥厚して内側に稜を生じる。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。
4	甕	%	(12.6) — —	密(長石) 普通 暗褐色	弱い肩部から頸部に至り、くの字形に外反して開き、口唇部はつまみ上げられる。外面胴部縱方向ヘラケズリ。口縁部外内面ともヨコナデ。



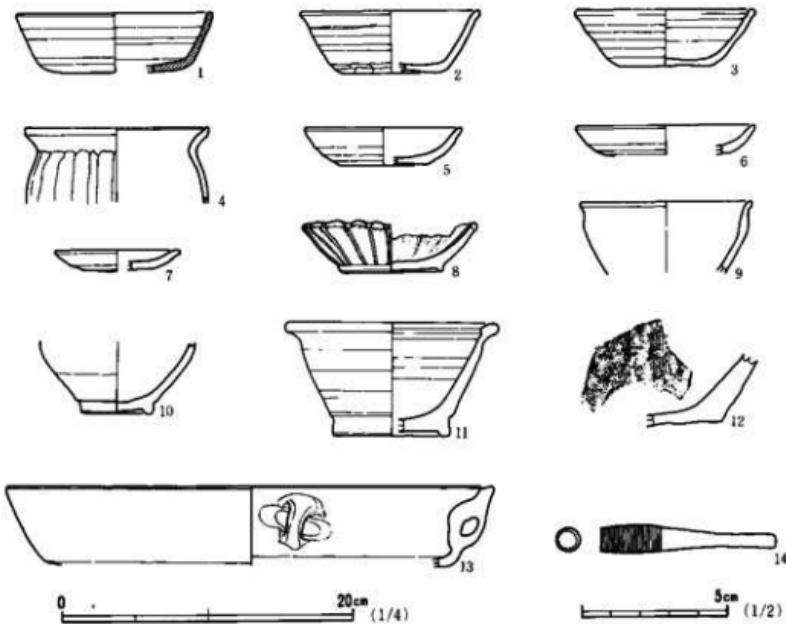
土層

1. 表土擾乱層
2. 暗茶褐色土層 (ほろぼろとしたしまりの弱いローム粒を主として、焼土粒を僅かに含む。)
3. 暗褐色土層 (ローム粒と小ロームブロックを主として、黒色土と炭化物を含む。)
4. 黒褐色土層 (黒色土を主に小ロームブロックを含む。)
5. 暗褐色土層 (ローム粒に小ロームブロックが混ざり、焼土粒を僅かに含む。)

第134図 402号跡実測図

5	■	%	(10.8) (2.6) (6.0)	密 良 断面 小褐色	体部は比較的強いクロ目を付けながら、ゆるやかに内湾して開く。全体に真黒にススが付着していて種の色調は不明。
6	■	%	(12.4) — —	密 良 断面 乳白色	体部外面は中位に弱い張りを有するが、内面は僅かに内湾するように開く。外面口縁部と内面に灰褐色の種が掛けられる。内面にのみ文様が施される。

7	皿	%	(8.6) (1.4) (4.8)	粗(石英・ 長石細粒) 良 乳灰色	体部下半で弱く張り出し、短く直線的に開いて口唇部に至る。体部外内面には乳白色の釉が全体に掛かる。
8	皿	口縁部及び 底部全周	(12.1) (3.2) 7.2	粗(石英) 普通 乳灰色	底部には低い高台が付き、体部は直線的に開いて口唇部が僅かに肥厚する。全体に乳白色の釉がかかり、細かなひび割れが全体に入る。(図版49)
9	碗	%	(11.8) — —	密 普通 断面 乳白色	体部上半に張りを有し、口縁部へ移行するところで一度被られ。口縁端部が僅かに外反する。全体に緑色の釉が掛かり、所々乳白色を示す。
10	碗	体部一部 高台全周	— — 4.8	粗(石英粒) 普通 断面 乳灰色	底部に低い高台が付き、体部下半は僅かに内湾して立ち上がり、上半部に張りを有する。外面中位と、内面全体に鉄種が掛けられる。
11	鉢	%	(14.8) (7.5) (8.1)	やや粗 普通 断面 乳灰色	底部には削り出しによる高台が付き、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は肥厚して外反する。外面底部を除き茶色の釉が比較的厚く掛けられる。(図版49)
13	熔炉	%	(33.6) (6.0) (28.0)	密(金雲母・ 長石) 普通 断面 茶褐色	体部下端に丸味を有し、ゆるやかに立ち上がり口縁部は肥厚し、口唇部が平坦となる。内面につまみが付けられる。使用により外面全体にススが付着している。



第135図 402号跡出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)

(3) 溝状遺構と出土遺物

路線内という限定された範囲であるため、全体を知り得る状況で完掘できた溝状遺構は1条もなかった。

501号跡は南区の最も北側で検出されたもので、調査区外から弧状に伸びて002号跡の西側で終わっている。幅の広い部分では箱形の掘り込みを呈して、狭くなるところでは浅いUの字形となっている。

502号跡は北側で501号跡と接し、直線的に南東に伸びてH3-01グリッド付近で直角に近い角度で南西へ折れる。途中で503号跡と交差し、南西端は攪乱を受け不明となる。

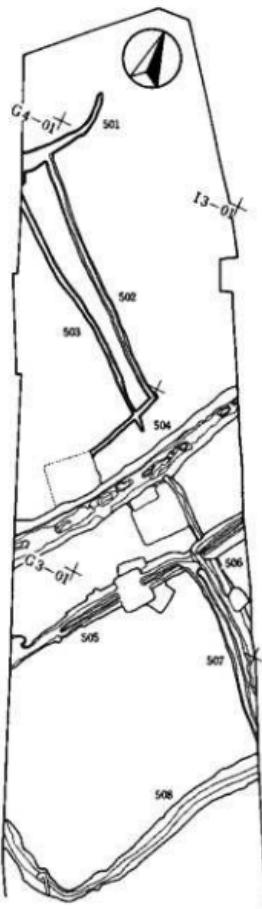
503号跡は502号跡と交差するH3-06グリッドポイントあたりから501号跡に向かって502号跡と平行して掘られる。

504号跡は幅340cm前後で、深さも深いところでは75cm以上を測る。底面には不整形の多くのピットが検出されている。遺物も最も多く出土し、底面近くから第137図1, 4, 7~9などが出土している。

505号跡は504号跡と6~7mの間隔を置いてほぼ同じ方向に伸びている。溝底面の断面形は山形状となっており、掘り変えか2条の溝状遺構の重複が考えられる。遺物は第137図2, 3の土師質土器などである。

506, 507号跡は502, 503と同一方向を示し、505号跡と合流するような形となる。505と504の中間に走る溝は一応506号跡とした。遺物は第137図5が506号跡から出土している。

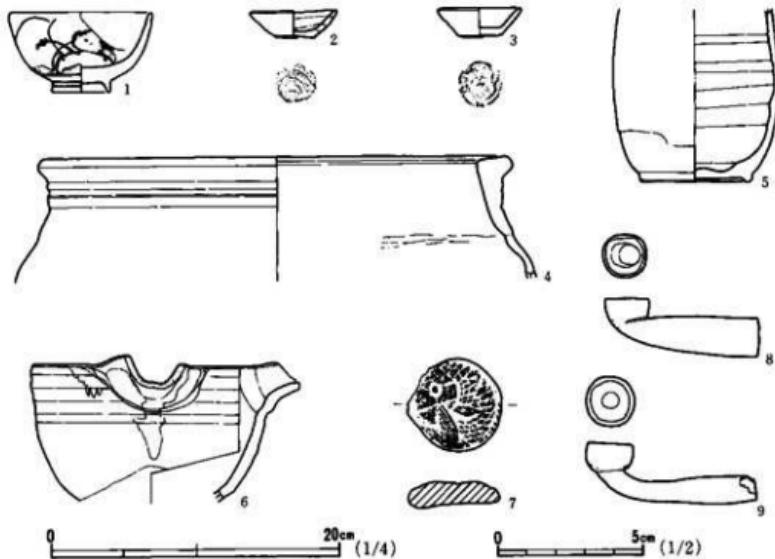
508号跡は最も南に位置し、途中まで504, 505号跡と並行するように伸びて029号跡の南側で方向を北西方向へと変化させている。幅は120cm~260cmと一定せず深さも場所により違いがみられる。出土遺物は第137図6の片口が出土している。



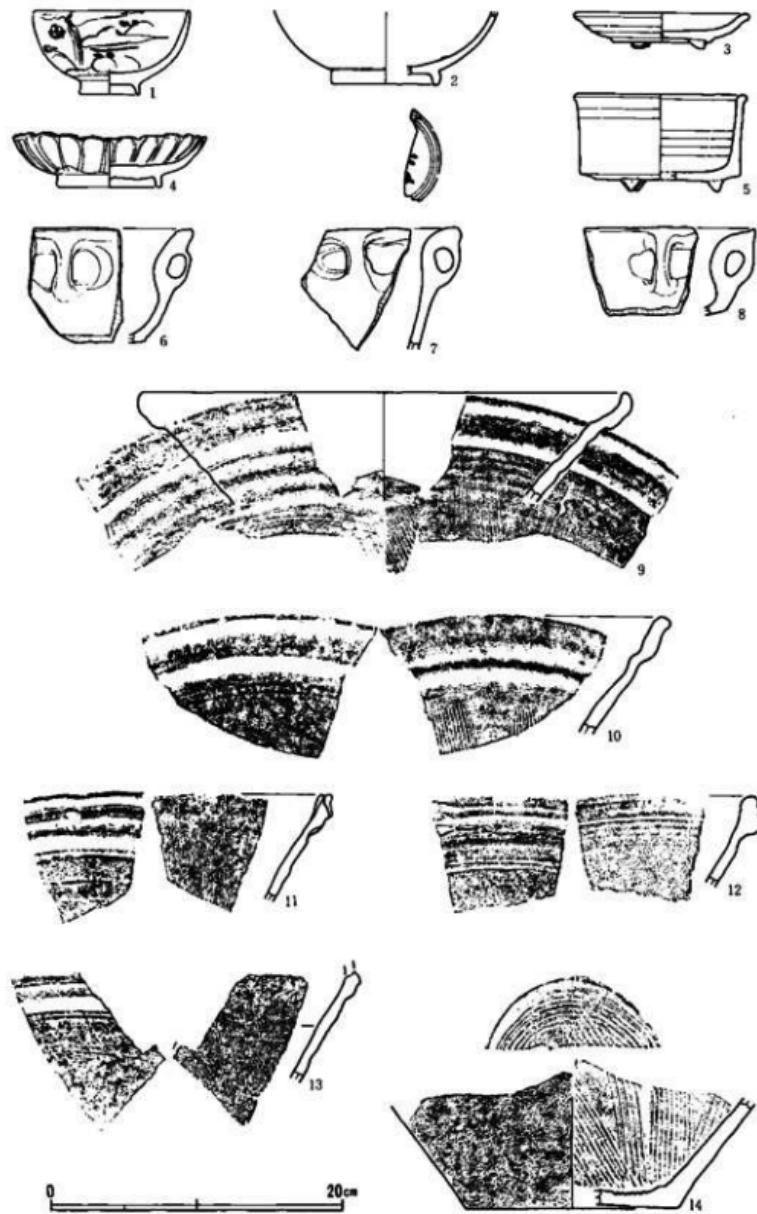
第136図 溝状遺構検出状況 (1/400)

溝状造構出土土器・陶磁器（第137図）

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	碗	%	(9.8) (5.4) (4.0)	緻密 良 断面白色	体部は中位まで全体に丸味を有し、口縁部は開き加減に立ち上がり、口唇部は丸く終わる。外面にのみ絵が施される。（図版49）
2	小形杯	%	(6.0) 1.8 2.7	密（雲母） 良 明茶褐色	底径は小さく、体部は僅かながら丸味をもって立ち上がる。粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。（図版49）
3	小形杯	%	(5.8) (1.9) (3.0)	密（雲母） 良 茶褐色	体部は直線的に立ち上がる。成形は粘土紐の巻き上げと考えられるがその痕跡は残らない。ロクロ調整。底部回転糸切り後無調整。
4	甕	口縁部%	(32.8) — —	（石英・長石） 粗（金雲母） 良 黒褐色	肩にあまり張りをもたず、頸部から直立して口縁部に至り、口唇部を厚くして端部を外に振り出させる。外内面ともナデ調整。
5	徳利	下半全周	— — 7.7	緻密 良 断面灰白色	下半に最大径を置くが、張りは弱く、ゆるやかに内傾しながら立ち上がる。底部は削り出しによる低い高台が付く。脚部は暗黄褐色の釉が掛けられる。
6	片口	体部%	(16.0) — —	密 普通 断面乳白色	体部は全体に丸味を有する。下半部を除き淡黄色の釉が掛けられ、注ぎ口の部分及び口縁部の一部には緑色の釉が掛かる。（図版49）



第137図 溝状造構出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)



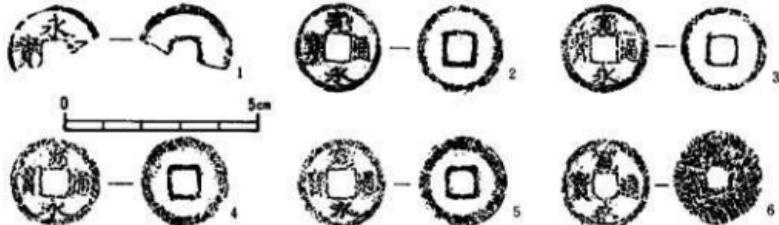
第138図 グリッド出土遺物実測図・拓影図 (1/4)

(4) グリッド出土遺物

北区及び南区の表土中から碗、皿、香炉、内耳土器、擂鉢の陶磁器類、鐵及び磁石が出土している。第138図に示した遺物は近世の所産となると思われる。また前にあげた第130図8~17、第132図1~5、第135図5~13、第137図1、4~6も同じような時期が考えられる。五島美術館特別展図録(注4)を参考にすれば、第137図6の片口などは17世紀代の年代が想定され、第130図14、第137図1、第138図1の染付碗は18世紀と捉えて大過ないと考えられる。香炉についても18世紀に比定されよう。

表採陶磁器(第138図)

番号	器種	遺存状態	口径 器高 底径	胎土 焼成 色調	器形の特徴・調整
1	碗	%	10.8 5.8 4.1	緻密 良 断面 白色	体部中位までは全体に丸味をもって、中位からゆるやかな内湾となり立ち上がる。器厚は底部で厚く、体部は薄い。絵は外面にのみ施す。(図版50)
2	碗	下半%	— — (7.4)	密 良 断面 淡褐色	体部下半は全体に丸味をもって大きく開くように立ち上がる。高台は内側に反るような三日月形を呈する。外内面とも茶色の釉が掛かる。
3	皿	%	(12.0) (2.4) (6.8)	緻密 良 断面 暗灰色	低い高台が付き、体部は途中で弱い張りをもち、口縁部は外側に開く。二次的な焼化を受けるため釉の色調は不明。底面は凹鑿孔が付いているため不安定。
4	皿	%	13.2 3.4 7.2	密 良 断面 淡灰色	径の大きな高台が付けられ、体部下半は外側に開き中位から内湾する。外底部高台部を除き暗緑色の釉が掛けられる。(図版50)
5	香炉	%	(11.8) (6.6) (8.8)	やや粗 普通 断面 乳白色	底部が外側に張り出し、体部は直線に近い立ち上がりをみせ、口唇部が外に反る。底部には3カ所に貼り付けによる脚が付く。底部を除き黄茶褐色の釉が掛けられる。



第139図 表採古銭拓影図 (2/3)

注

1. 住居跡は出土遺物の対比から、003号跡が最も新しい段階に比定される。ここからは黒帯90号窯式と考えられる灰釉陶器が出土しており、10世紀前半までに営まれた住居跡とみることができる。また足高高台を有する土器は出土していないので、足高高台付土器が出現する以前ということになる。
2. 藤下昌信・寺内博之他 1984 「加定地・殿台遺跡」「成田市郷部北遺跡群調査概要」 成田市郷部北遺跡調査会
3. 矢戸三男・谷旬他 1979 「千葉市西屋敷遺跡」 千葉県文化財センター
4. 財団法人五島美術館 1984 「江戸のやきもの」 五島美術館展覧会図録No104

第4章 まとめ

縄文時代

遺構は堀之内期の住居跡1軒と、土坑33基、落し穴2基が検出された。遺構の分布は北区と、南区の北側台地縁辺部の2地点に集中する傾向が認められる。調査範囲が限られ、また北区では人為的な力による地形の変改もあるものの、全体として北東から入り込む谷に沿うような形で台地の縁辺を主に縄文時代の遺構が展開していたことが窺われる。

検出された住居跡は梢円形を呈し、中央に炉を置き、壁に沿って柱穴が並んでいる。形態としてはこの時期に比定される普通の住居跡と変わることのない特徴を有している。しかし、長径3.90m、短径3.30mという規模は、大型住居も出現する堀之内期にあってはかなり小型である。本跡と同じく根木名川水系に属する桜谷津遺跡（注1）では、直径8.50mの円形を呈する住居跡が検出されている。しかし、こうした大型住居跡もまた稀な例としても、宮本長二郎氏の「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」（注2）によれば、堀之内期の住居面積の平均が20.0m²であるので、直径5mの規模が一般的になる。堀之内期の住居跡10軒が検出された千葉市木戸作跡（注3）でも、10軒のうち9軒が直径4～6mの範囲に収まっている。残り1軒が本跡に近く、3.8m×3.2mの規模をとっている。

土坑については、北区と南区では時期差があると思われる。北区は出土遺物から加曾利B期と考えられ、南区検出の土坑は、それぞれに構築時期の前後関係はあっても、堀之内期の所産として捉えられる。用途については明確ではないが、住居と、あるいは集落のなかで有機的な機能を果たしていた遺構であることには間違いないと考えられる。

出土遺物は土器が主体で、前・中期が僅かに出土し、後期の堀之内式土器が最も多く出土した。002号跡からは、器形を知ることのできる堀之内I式の深鉢形土器2個体が出土している。埋甕として用いられていた第10図2の深鉢は、口唇部に沈線をめぐらせ頸部までを無文とし、胴部は地文を施したうえに沈線文による文様を配し、さらに一部を磨消している。炉の上から出土したもう1点は、同様に縄文を施した後に沈線文を配しているが、縦位に垂下する沈線間に斜行する3本単位の沈線文が加えられている。2点の出土状況からしても両者の文様構成上の違いは、型式内の時間差の反映ということになろう。

グリッド出土の第III群土器のうちE・F類は堀之内II式に比定される。A-2類も口唇部の特徴などから堀之内II式段階になるかもしれない。B類及びG類の粗製土器も含め検討しなければならないところであると考えている。

古墳時代

南区で後期に比定される竪穴住居跡4軒が検出された。

平面形は009・019・026号跡が整った正方形に近い形を示し、017号跡が不整な形態となっている。正方形に近い形をとる3軒は、いずれも北西壁にカマドが設けられていたと考えられるが、他の遺構との重複により009・019号跡は破壊されている。柱穴は017号跡で検出されなかつた他は、対角線上に4本穿たれ、009号跡の入口方向には小ピットが検出された。また壁溝については、形の整った3軒では全周していたとみられる。019・026号跡はカマドの右側にいわゆる貯蔵穴が設けられていた。

遺物は土師器の杯、鉢、甕、小型甕の土器類と、土玉、紡錘車の土製品が出土している。杯は丸底を呈し、口縁部との境に明瞭な稜を付けるものと、弱い稜からやるかに短く立ち上がる二者が認められる。各住居跡から出土している遺物は、時期的に大きな隔たりをもたないと考えられる。019号跡出土の土玉は生業の一端を物語っていると思われる。

奈良・平安時代

検出した遺構は、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、それに掘立柱建物の柱穴跡か土壙墓と考えられる遺構が51基である。

竪穴住居跡は完掘できたのが、001・003・025号跡の3軒で極めて少ない。他は調査区域の外に広がりをもつとか、後世の遺構との切り合いや攪乱によって、それぞれ大きく破壊を受けている。全体に遺存は不良である。これらの住居跡の平面形態は、復元して考えなければならぬものも含み、長辺と短辺との差の小さな隅丸長方形を呈する遺構が主である。015・016・018号跡は正方形に近い形態をとっている。規模では024号跡が一辺5.16mを測り最も大きく、最小は長辺2.70m、短辺2.10mの020号跡である。柱穴は、018号跡が対角線上に4ヵ所と、カマドと対応する壁側に1ヵ所検出されている。このように主柱穴と、入口に付随するピットを設けているのは018号跡1軒である。対角線上に4ヵ所の柱穴が穿たれていたと考えられるのが、024・027号跡の2軒である。カマドと反対側の壁寄りで、入口に伴うと考えられるピットをもつものは、001・013・015・023号跡である。これ以外の住居跡は、調査範囲内において柱穴と断定し得るピットは検出されなかった。また壁溝は、全周するであろうと考えられるのが024号跡で、010・013・023号跡などが一部分とぎれてめぐらされている。全掘できた001・003号跡のように、全く壁溝の存在しない住居跡も少なくない。カマドは、006・012・014・030号跡を除けば、その設置場所が明らかである。しかしいずれも遺存については、良好とは言い難い状況を示している。方向としては北壁ないし北東側に設置している住居跡が多い。西壁に構築している例は001号跡で、005・027～029号跡が北西壁にカマドを設けている。

出土遺物は、上述したとおり遺構の残りが不良であるため、量的に多くはない。また良好なセット関係が捉えられるのも016号跡くらいである。遺物のうち主体となるのは土器で、そのなかでも下総地域の一般的な集落跡と同様土師器の杯形土器が他の器種を凌いでいる。次に杯形土器を中心に、本跡出土の土器をI～VI期に分けておきたい。しかし、何分明確なセットを成す

出土状況で出土している遺物が僅かであるため、大略的な分け方しかできないのが実状である。

I期 011・016号跡出土の土器を本期とする。杯は、底部丸底を呈するものが多く、平底となるものも若干認められる。丸底となる杯は半球状に内湾しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもたない。外面調整はヘラケズリの後ミガキを加えて仕上げるものが多いため。内面は全体にヘラミガキ調整される。第77図5、第87図6は平底で、体部は直線的に開き、口縁部との境に弱い稜を設けて口縁部に至るものである。調整は外面はヘラケズリ、内面はナデによる。第87図1の合子形土師器は器面調整にロクロを使用している。器形については須恵器を模倣して作製していることは疑う余地のないところである。この器種は現在のところ下総周辺では類例が見当たらない。杯以外では016号跡で甕が出土している。いわゆる長胴の甕の部類で、胴部が寸胴となっているのが特色である。外面調整はヘラケズリの後に軽くミガキを施している。

II期 027号跡出土の土器を本期とする。杯形土器1点が出土している。体部下端に丸味を付け比較的急角度で立ち上がる。したがって口径に比して底径も大きくなる形となっている。ロクロ調整で、底面及び体部下端に回転ヘラケズリを行なっている。

III期 018・023号跡出土の土器を本期とする。土師器の杯はロクロ調整されるものと、そうでないもののが存在している。ロクロ調整されているものでも第97図3の場合は直線的に立ち上がり、深めの感じがしロクロ目は弱い。一方第90図4は深めであるが内湾気味に立ち上がり、ロクロ目がやや鮮明となっている。また内面が黒色処理されている。両者とも底面は手もちヘラケズリが施され、体部下端は023号跡3がそのままで、018号跡4は手もちヘラケズリによって整えられている。須恵器は体部が直線的に開き、底面及び体部下端に手もちヘラケズリが加えられている。胎土に長石・石英が含まれる。甕は胴上半部に張りを有し、口唇部は上方につまみ上げられる。胴下半部は細かなヘラケズリによって調整される。

IV期 001・010号跡出土の土器を代表として本期とする。他に007・008・013・015号跡などが本期に該当すると考えられる。土師器の杯は底径がやや小さくなる傾向がみられ、体部は直線的に開き、口唇部が若干肥厚して終わる。底面はほとんどが回転糸切りの後無調整のままである。内面に黒色処理が施されるものも存在する。皿形土器は大きく外側に直線的に開き、底面は回転糸切り無調整となっている。

V期 003・004・025号跡出土の土器を代表として本期とする。土師器杯は体部下半、いわゆる腰が張るものや、低い高台が付いて椀形となるものが認められる。底面は回転糸切りで無調整となり、切り放し方もやや難である。内面を黒色処理して仕上げるものも認められる。003・029号跡では黒帯90号窯式（注4）と考えられる灰釉椀が出土している。

VI期 252・282号跡出土の土器を本期とする。足高高台を有する杯が特徴となる。VI期にもみられたような腰の張る平底の杯、第118図1のような丸味をもつて開く皿が存在する。

以上のような大まかなVI期区分が可能であると思われる。しかし、その画期を実年代によっ

て示すとなると、あまりにも共伴する遺物が乏しい。昭和58年史館同人により、房総における奈良・平安時代の土器をテーマにシンポジウムが開催された。そこで、このなかで越川敏夫・長内美知枝両氏によって示された下総東部の土器編年試案第Ⅰ期～第Ⅷ期（注5）に本跡のⅠ期～Ⅵ期がどのように対応するかを考え一応の目安としておきたい。鳥内Ⅰ期は越川・長内両氏の第Ⅰ期に当たると考えられ、以下鳥内Ⅱ期は第Ⅳ期に、鳥内Ⅲ期は第Ⅵ期、鳥内Ⅳ期は第Ⅶ期、鳥内Ⅴ期は第Ⅷ期にそれぞれ対応すると考えられる。鳥内Ⅵ期については、成田市加定地遺跡（注6）、我孫子市羽黒前遺跡（注7）101号土壙で示された11世紀前半という年代か、それよりはやや古くなる時期を考えておきたい。

中世・近世

台地整形区画1ヵ所、竪穴状遺構2基、溝状遺構8条を検出した。

南区で発見された台地整形区画部分は、ローム層を人為的に掘り込み、その縁辺と底面に多数の土壙を構築するというものである。区画縁辺に構築されている土壙は比較的単独で存在し、底面では連続して構築されている傾向がみられる。土壙が連なっているものについて、それを一つのまとまりとして1基としても総数44基を数える。まず、これらの土壙のなかで、区画縁辺で検出された2基の地下式土壙の存在について注目しておきたい。地下式土壙については、半田堅三氏が関東地方を中心とした資料を基に総合的な検討を行なっている（注8）。それによれば、地下式土壙はその形態・機能が確定し普及をみるのが鎌倉時代後半であろうとしている。さらに本跡のような状況において検出された例などと、東京都文京区動坂遺跡（注9）でみられるような地下倉などとは本質的に性格が異なるもので区別しなければならないとし、地下式土壙は中世末にその終末を迎える遺構との論を展開している。またその機能については、「中世仏教を背景に発生した墓地の内部で機能している施設の一つで、再葬の際の第1次葬の施設等も含め広い意味の墓であろう」と考察している。近年台地を広く掘り込んだ遺構や地下式土壙がかなり発見されるようになっている。半田氏の論文中で示されている市原市台遺跡、千葉市西屋敷遺跡（注10）は本跡と大変近似した構成をとるものである。両遺跡では区画内の土壙から人骨が検出されており、こうした区画が墓域としての性格をもつことをより明確に裏付けしている。かなりの労力を費やし、ローム層を掘り込んでこうした区画を設定する行為それ自体特別の領域を意識していることに他ならないのである。以上のようなことから本跡のこうした区画も墓地であったと考えることが最も妥当である。

さて、本跡の構築年代を決定するには出土遺物を廻り所としなければならない。区画内を埋めていた覆土からは近世に比定される遺物が多数出土している。しかしそれらは流れ込んだ状況で出土しており、年代を示す決定的な資料とはなっていない。したがって底面に存在する土壙に確実に伴う遺物が重要となるのは当然である。316・317・328号跡からは遺構に伴うと考えられる土師質土器の皿が合計で20点出土している。しかし他に陶器類や古錢などの共伴遺物が

なく、年代決定の決め手になるはずであった遺構出土の遺物がここでも効力を奏しきれないものである。これは房総における11世紀以降、古代末から中世にかけての土師質土器研究の大きな立ち後れによるものである。また大江正行氏は、本県の土師質土器の変遷については、「関東地方の諸県の中では最も難解な様相を呈する地域であった」(注11)と指摘している。こうした状況下で、早急に本跡出土の土師質土器皿の年代を推測することは、安易の勝りを免れることになる。ここでは一応溝状遺構も含め、本跡で出土した土師質土器皿を形態からA~Dに分類し、その特徴を述べておくにとどめ、今後の課題としておきたい。

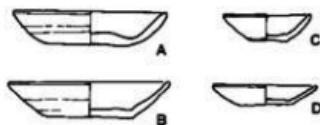
A 体部下半に丸味を有し、僅かに内湾しながら立ち上がる。内面は体部と底部の境で窪まり、底面が盛り上がり気味となる。口径は10cm強で、器高は2.3cm前後となる。(胎土に砂・スコリア

を含むが焼成は良好である。器厚はやや厚い。)

B 底部が安定し、体部は直線的に開く。口径は10cm強で器高は2cm以下が多い。(胎土にスコリアを含み焼成は普通である。)

C 体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口径は6cmと小さく器高は2cm以下となる。(胎土に雲母も含み焼成は良好である。)

D 底部が安定し、体部は直線的に開く。内面は体部と底部の境が僅かに窪む。口径は7cm前後で器高は1.5cm程となる。(胎土にスコリアを含み焼成は良好である。)



鳥内遺跡出土土師質土器皿の形態分類

以上簡単に鳥内遺跡の発掘成果と課題についてまとめを行なった。

注

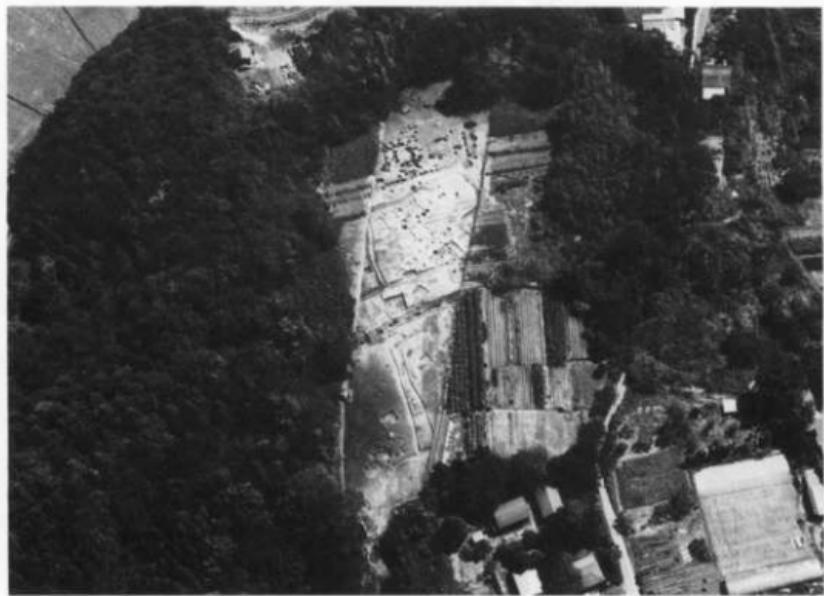
1. 田川良 1977 「桜谷津」 桜谷津遺跡発掘調査団
2. 宮本長二郎 1983 「関東地方の縄文時代堅穴住居の変遷」 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集『文化財論叢』
3. 郷田良一他 1979 「木戸作遺跡(第二次)」 千葉東南部ニュータウン7 千葉県文化財センター
4. 斎藤孝正 1982 「猿投窯における灰釉陶の展開」 「考古学ジャーナル」 №211
5. 越川敏夫・長内美知枝 1983 「下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案」 「シンボジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人
6. 藤下昌信・寺内博之他 1984 「加定地・殿台遺跡」 「成田市郷部北遺跡群調査概要」 成田市郷部北遺跡調査会

7. 西沢隆治 1984 「羽黒前遺跡」『我孫子市埋蔵文化財報告書』第4集 我孫子市教育委員会
8. 半田堅三 1979 「本邦地下式墳の類型学的研究」『伊知波良』2 伊知波良刊行会
9. 大谷猛他 1978 『文京区・動坂遺跡』 動坂貝塚調査会
10. 矢戸三男・谷句他 1979 「千葉市西屋敷遺跡」 千葉県文化財センター
11. 大江正行 1980 「群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿」『群馬考古通信』第7号 群馬県考古学談話会

写 真 図 版



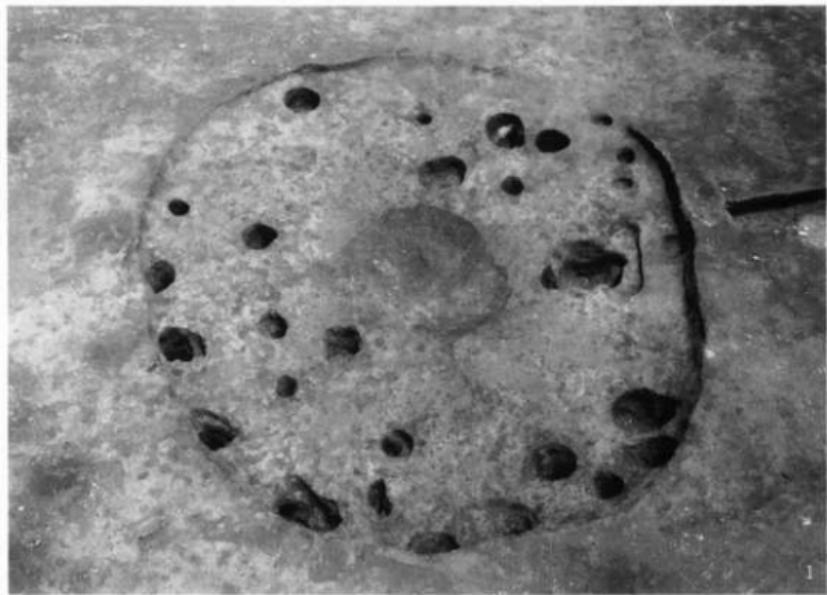
図版 2



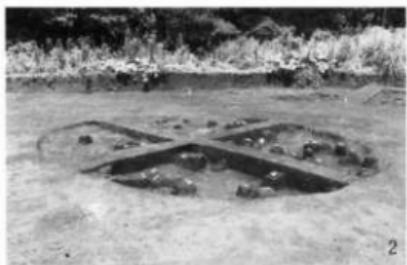
1. 南区全景（北上空から）



2. 遺跡遠景（北東から）



1. 002号跡全景（南西から）



2

2. 002号跡遺物出土状況
(南西から)



3

3. 同 炉内遺物出土状況
(西から)



4

4. 同 埋甃検出状況
(南東から)

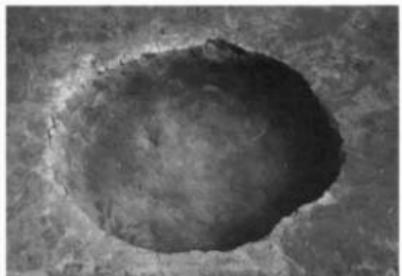
図版 4



1. 北区土坑検出状況（南から）



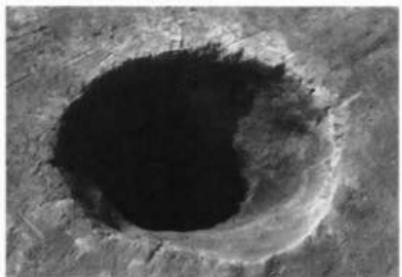
2. 南区土坑検出状況（南から）



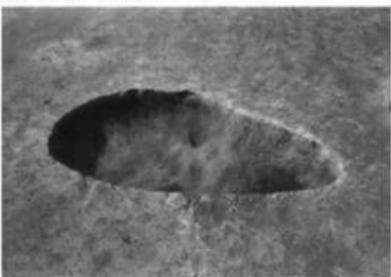
1. 215号跡（北西から）



2. 220号（南から）



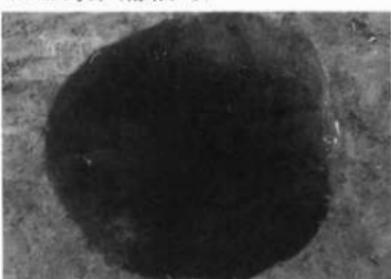
3. 223号跡（南東から）



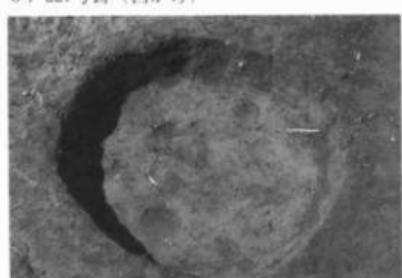
4. 224号跡（南東から）



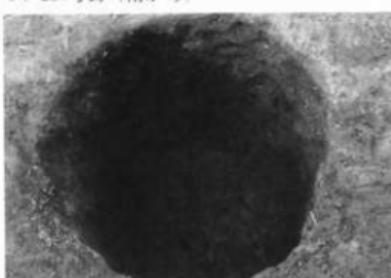
5. 227号跡（西から）



6. 230号跡（南から）



7. 232号跡（東から）



8. 233号跡（南から）

図版 6



1. 008・009号跡全景（南東から）



2. 017号跡全景（北東から）



1. 019号跡全景(南東から)



2. 同土層断面・遺物出土状況
(南から)



3. 同遺物出土状況(北西から)

図版 8



1. 026号跡全景（南東から）



2. 001号跡全景（北西から）



1. 003号跡全景（南東から）



2. 004号跡全景（南東から）

図版 10



1. 010号跡全景（南から）



2. 010号跡カマド内遺物出土状況
(南から)

3. 同 カマド掘り方(南から)

4. 007号跡全景 (北西から)





1. 013号跡全景（南から）

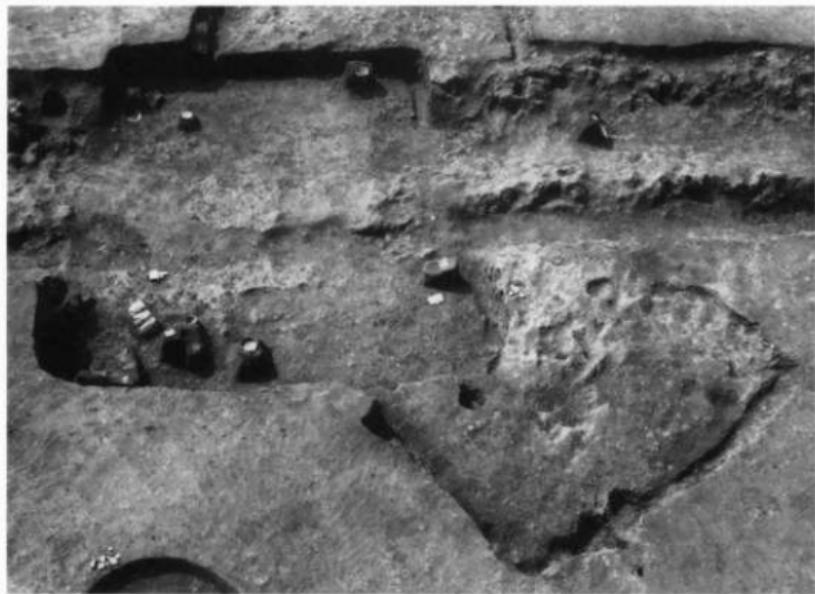


2. 014号跡全景（南西から）



3. 同 遺物出土状況
(南東から)

図版 12



1. 015・016号跡全景（南東から）



2. 016号跡遺物出土状況（北東から）



1. 018号跡全景（南東から）



2



3

2. 018号跡遺物出土状況（西から）



4

3. 同 カマド検出状況（南から）

4. 020号跡全景（南東から）

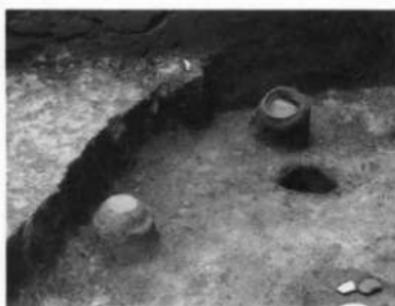
図版 14



1 . 022・023号跡全景（東から）



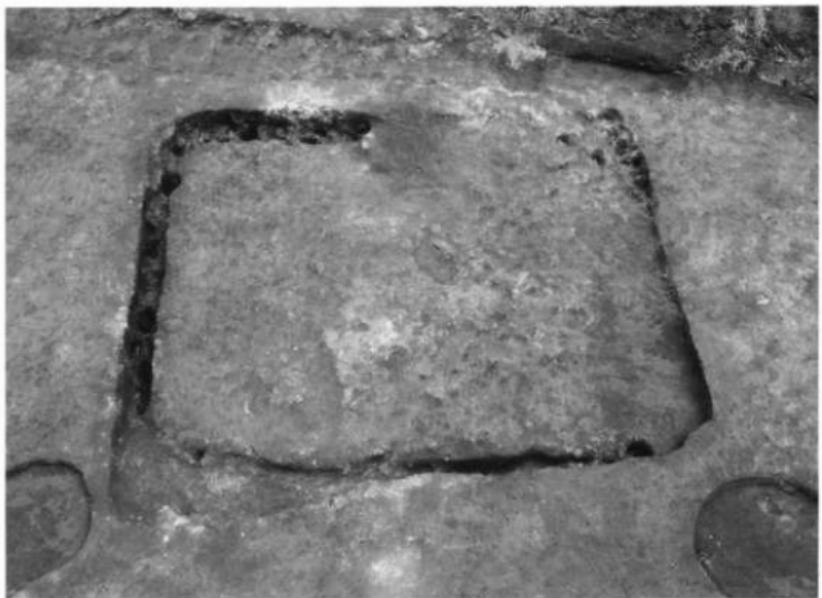
2 . 同 遺物出土状況（東から）



3 . 023号跡遺物出土状況（北東から）



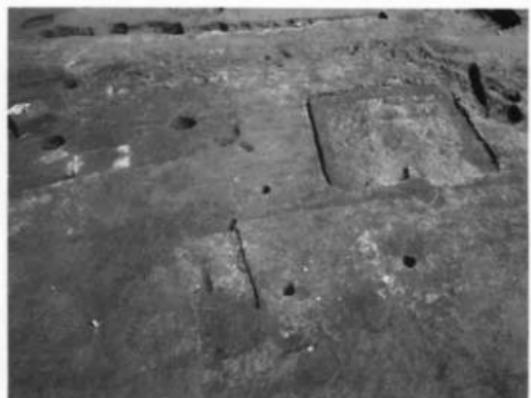
1. 024号跡全景（東から）



2. 025号跡全景（南西から）

図版 16

1. 027~029号跡（北西から）



2. 029号跡全景（北西から）

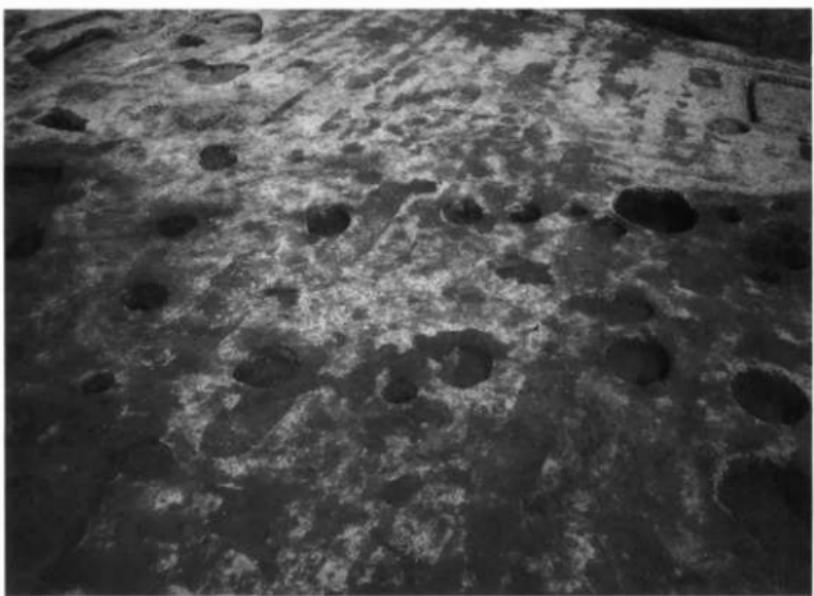


3. 030号跡全景（北東から）





1. 南区柱穴跡・土壤検出状況（南東から）



2. 101号跡全景（南西から）

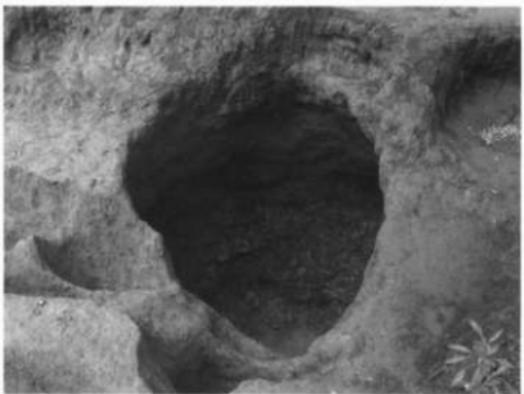
図版 18



1. 台地整形区画全景（北西から）



2. 同 （南から）



1. 301号跡全景（南東から）

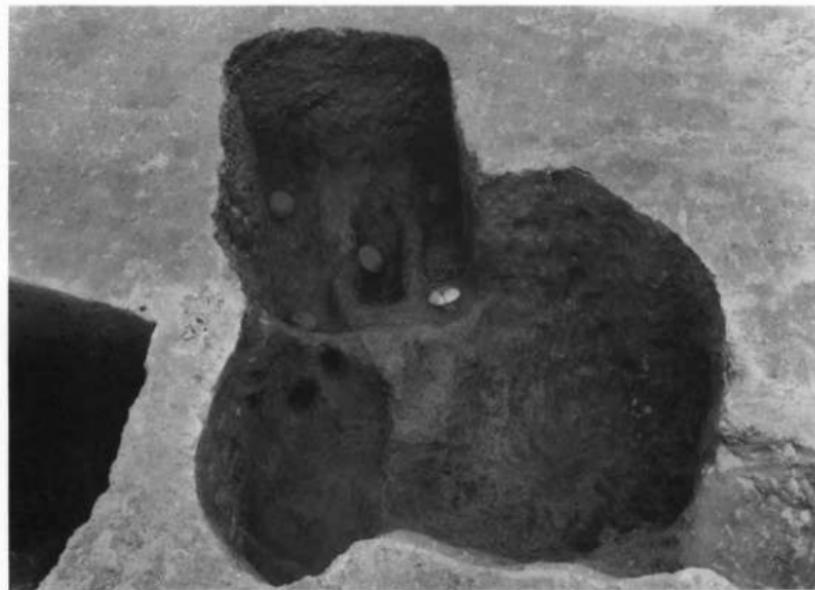


2. 344号跡全景（南西から）



3. 同 土層断面（南から）

図版 20



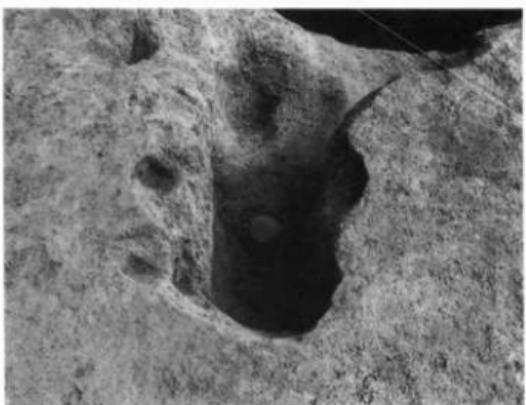
1. 316号跡全景（南西から）



2. 同 遺物出土状況（南西から）



1. 317号跡遺物出土状況
(西から)



2. 328号跡A遺物出土状況
(北西から)



3. 同 F遺物出土状況 (東から)

図版 22

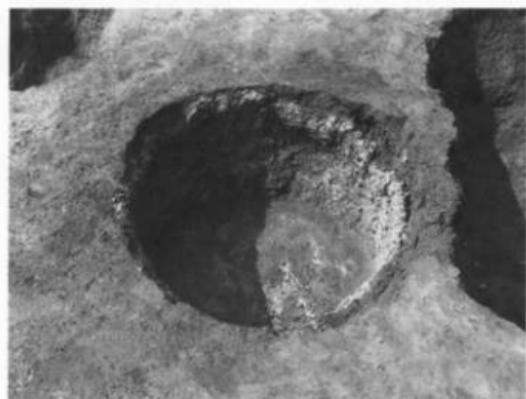
1. 323号跡全景（南東から）



2. 同 土層断面（南西から）



3. 334号跡全景（南東から）





1. 401号跡全景（北東から）



2. 402号跡土層断面（西から）

図版 24



1. 501・502・503号跡（北西から）



2. 504・505・506・507号跡（北から）



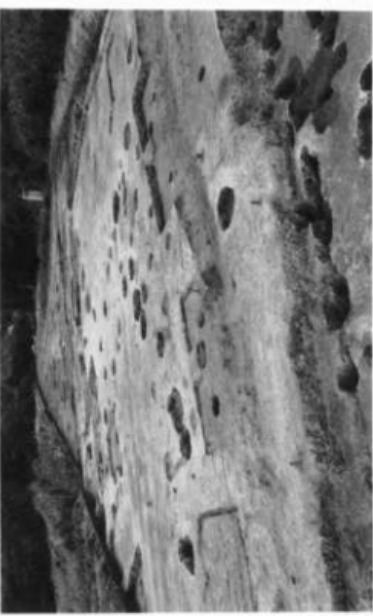
1. 調査前遺跡近景（南東から）



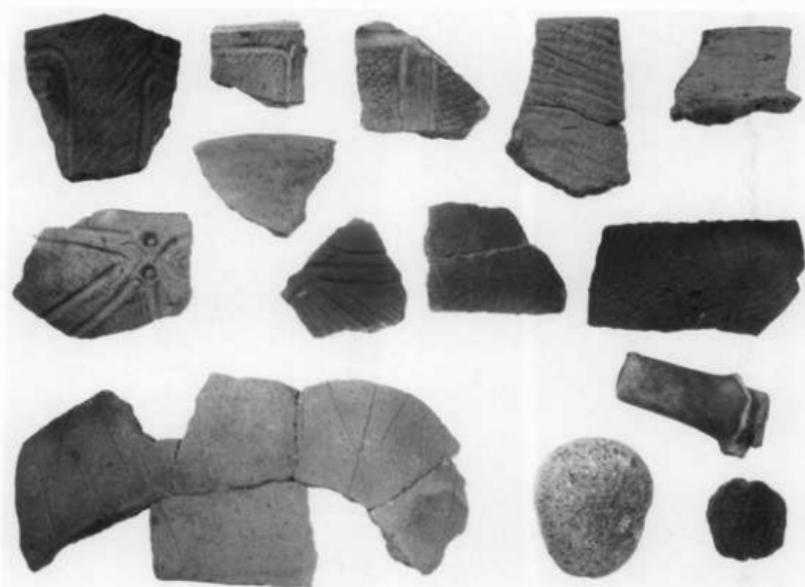
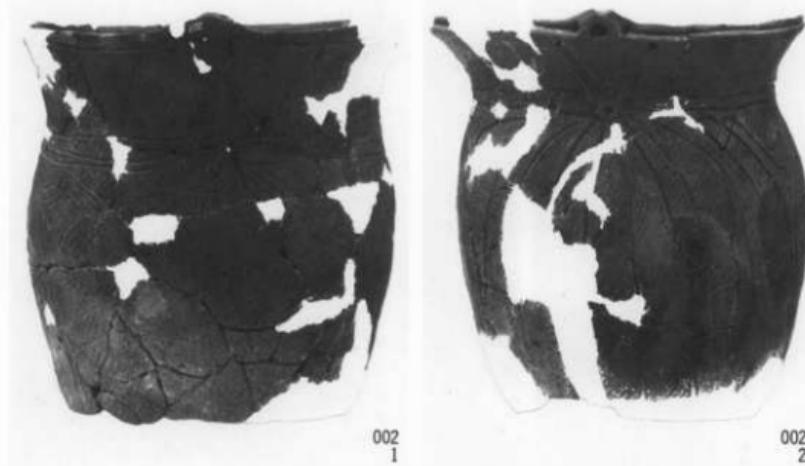
2. 調査風景



3. 包含層上層断面（南東から）



4. 南区調査後近景（南東から）



002号跡出土遺物

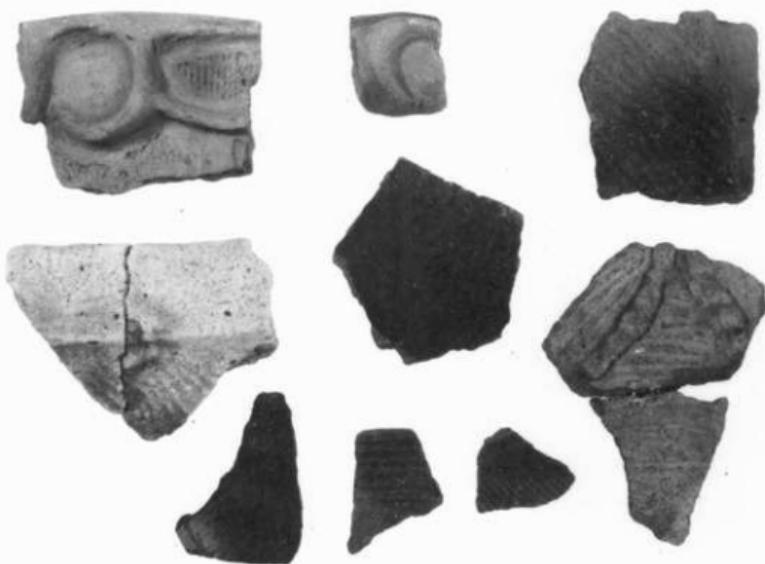


227
1

2. 227号葬出土土器

209
1

1. 209号葬出土土器

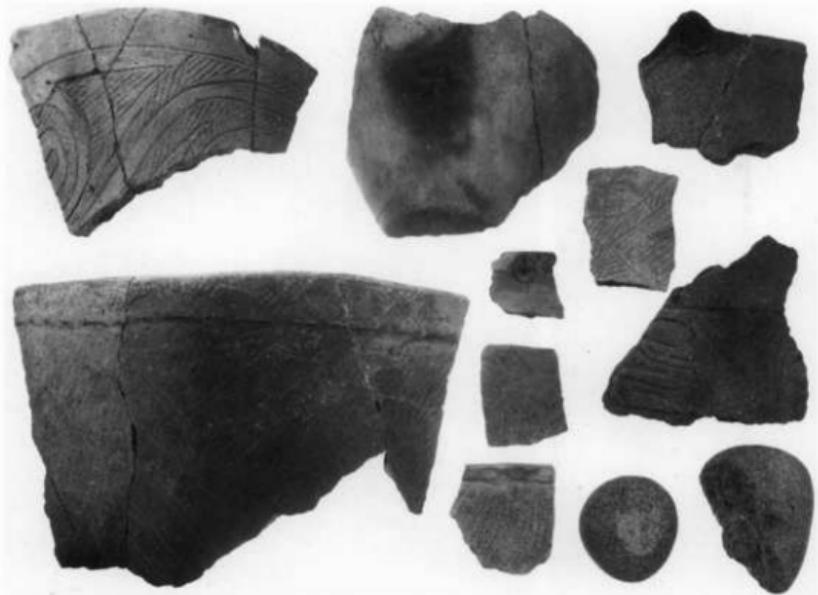


3. 209号葬出土遗物

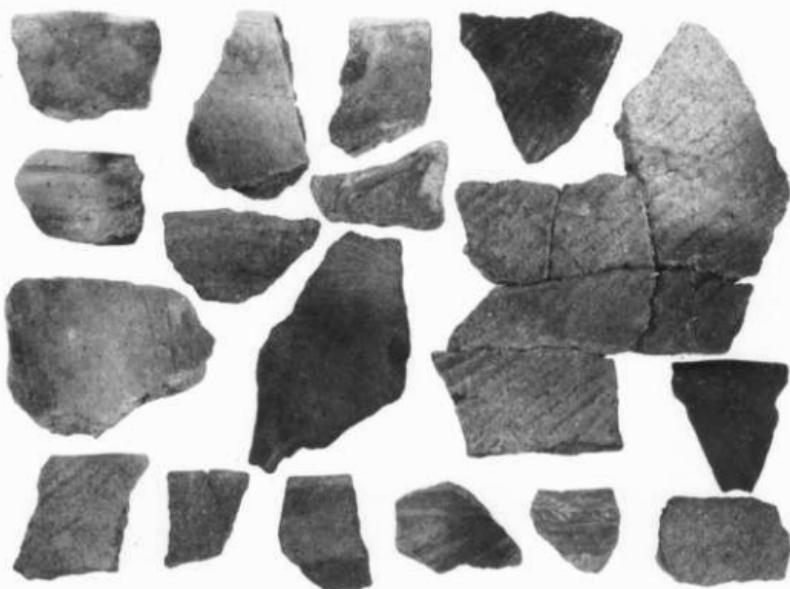
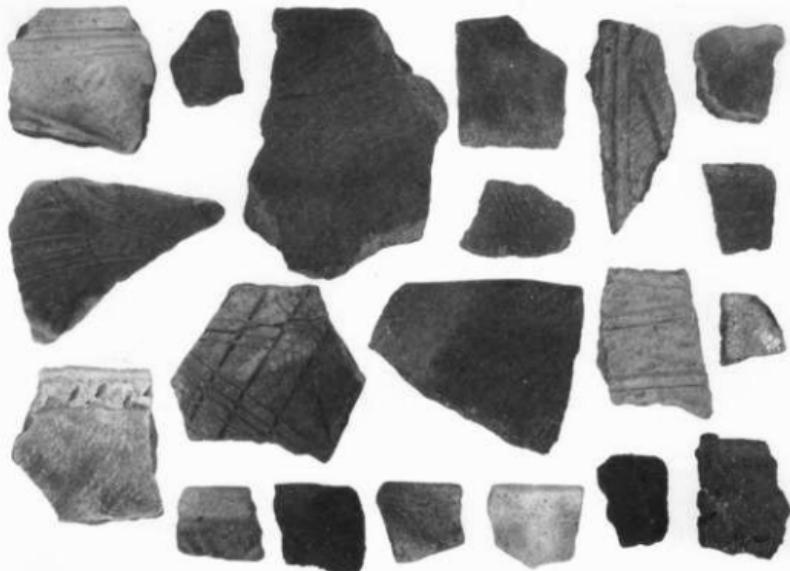
图版 28



1. 201号墓出土遗物

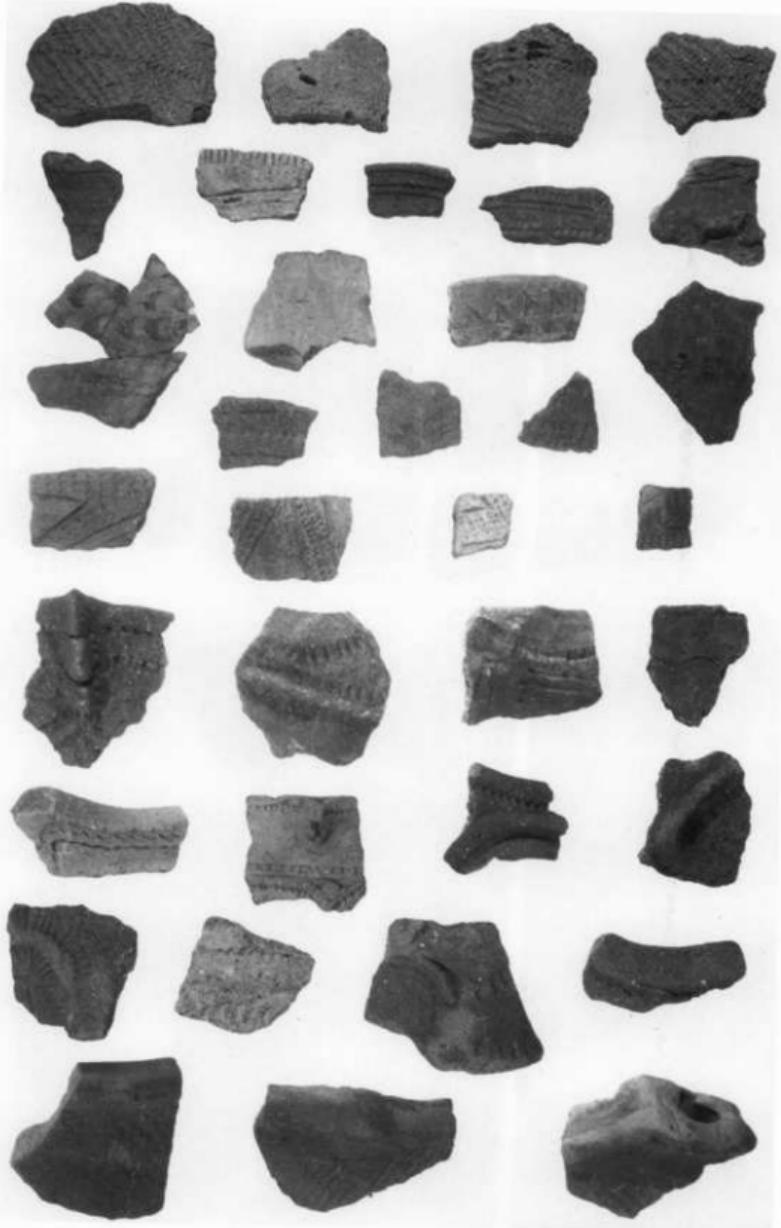


2. 219号墓出土遗物



南区検出土坑出土遺物

図版 30



グリッド出土の縄文土器片(その1) [第35図]



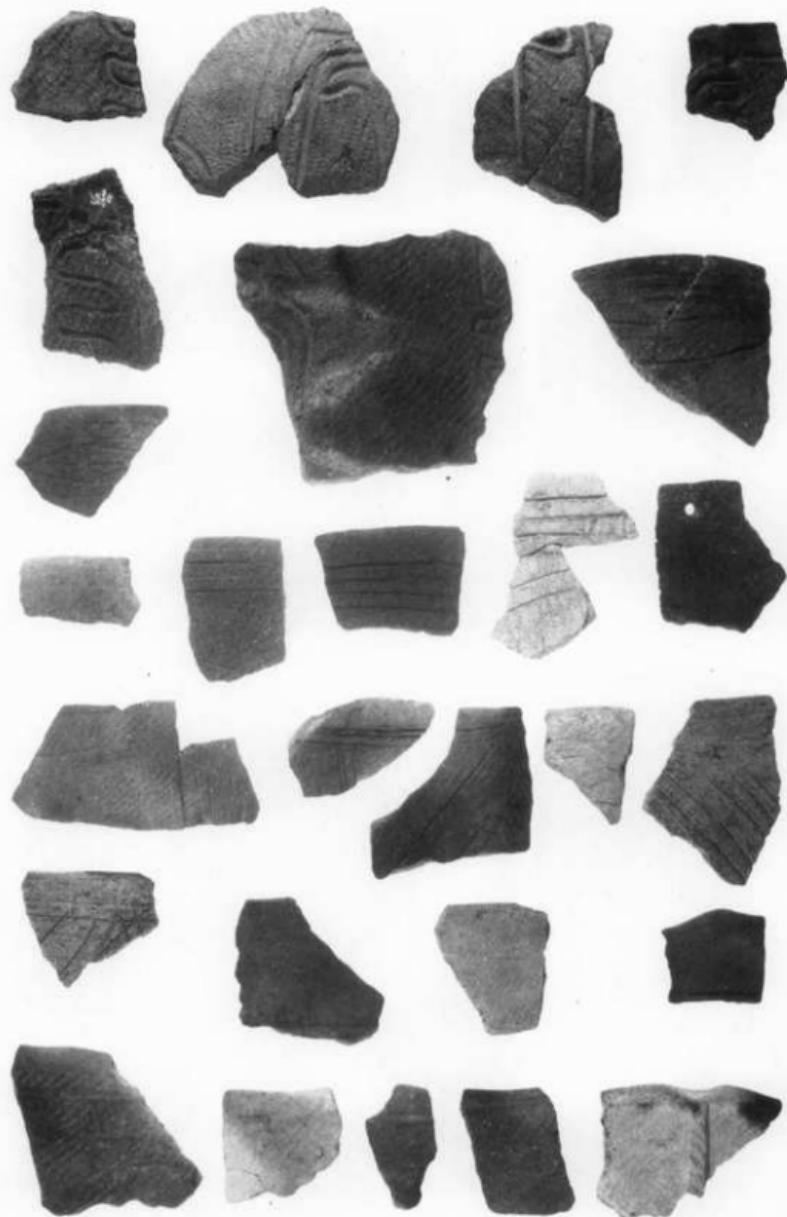
グリッド出土の縄文土器片(その 2) [第36図]



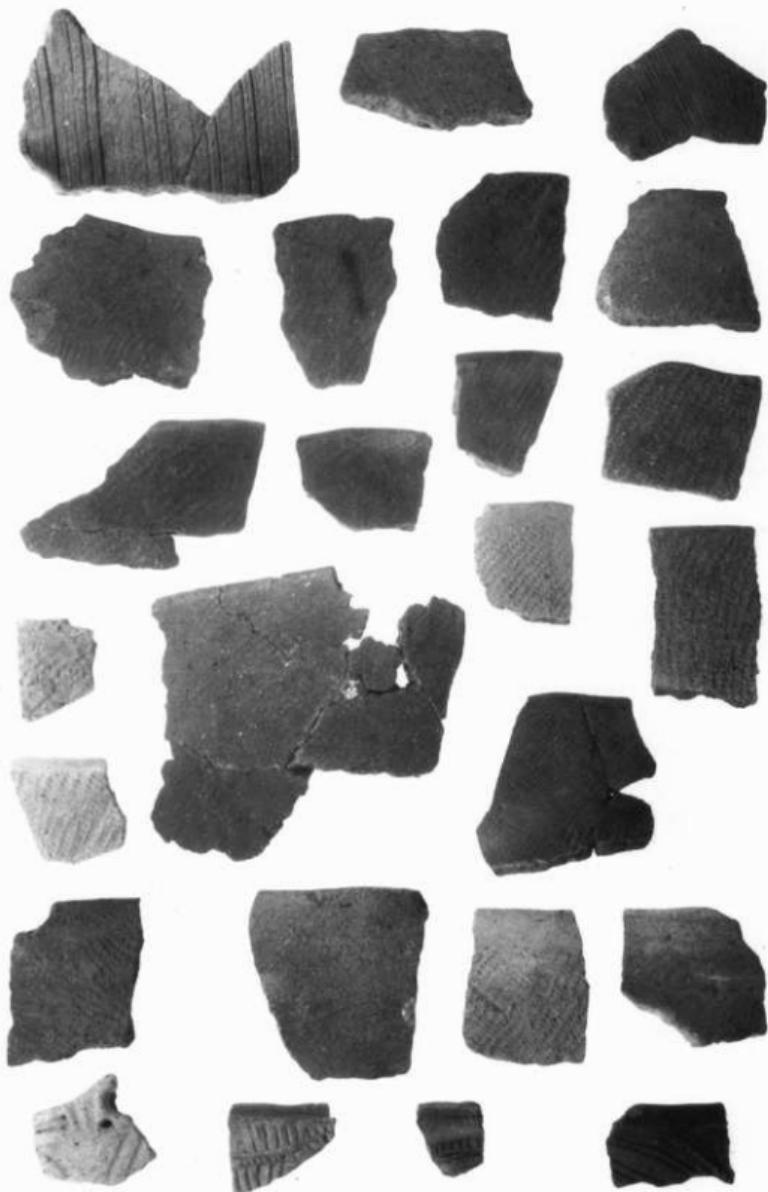
グリッド出土の縄文土器片(その3) [第37図]



グリッド出土の縄文土器片(その4) [第38図]



グリッド出土の縄文土器片(その5)【第39図】

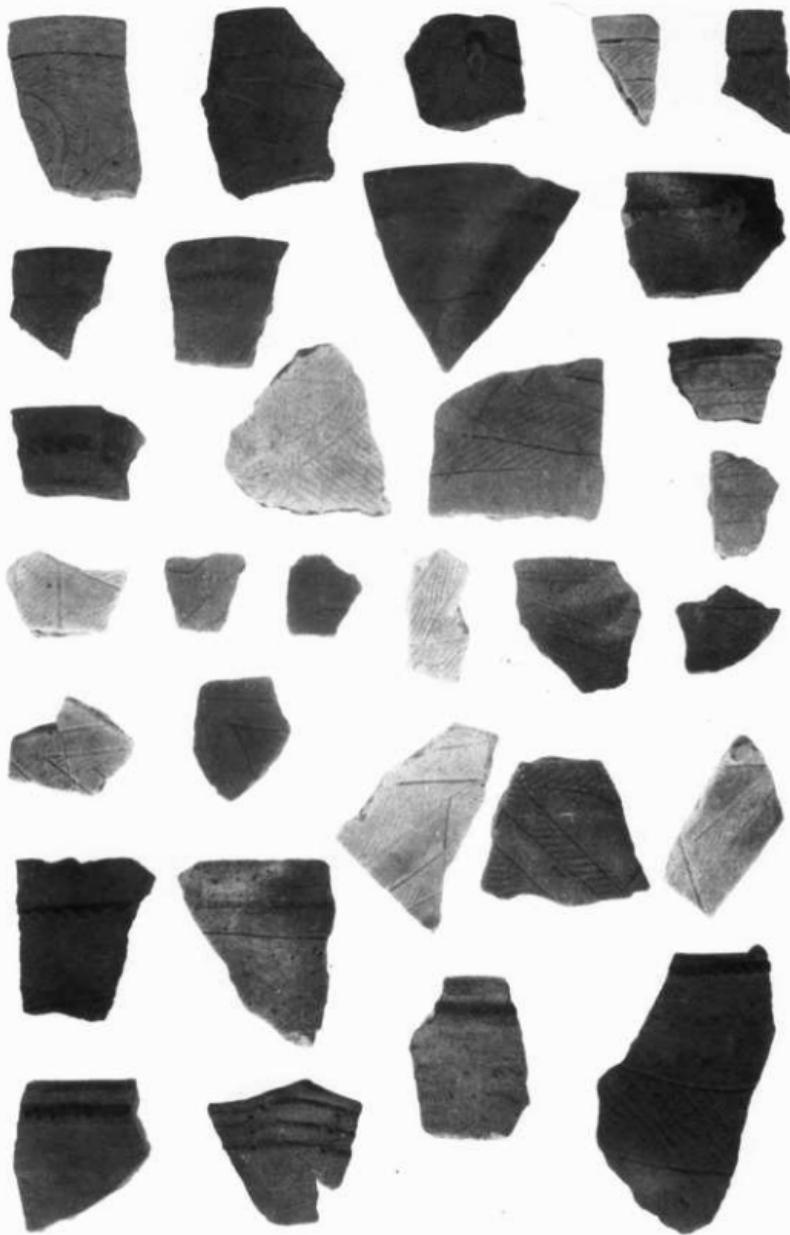


グリッド出土の縄文土器片(その6) [第40図]

図版 36

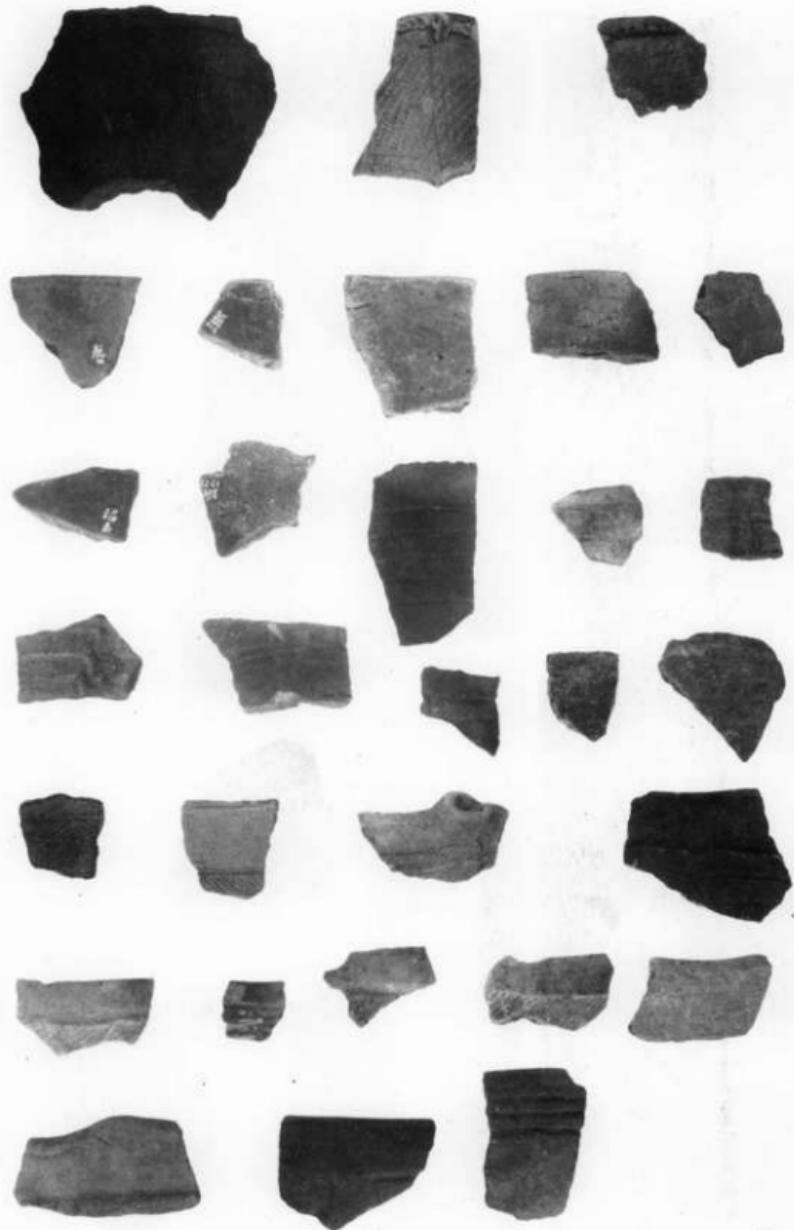


グリッド出土の縄文土器片(その7) [第41図]

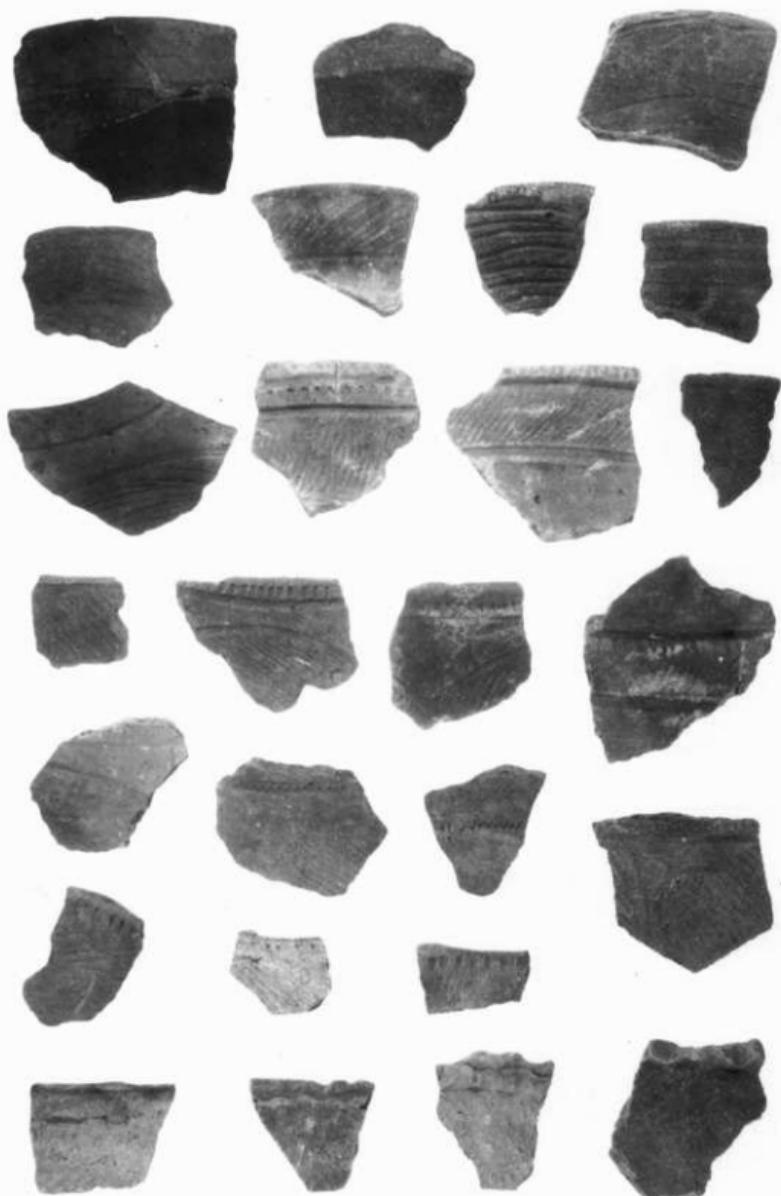


グリッド出土の縄文土器片(その8) [第42図]

図版 38

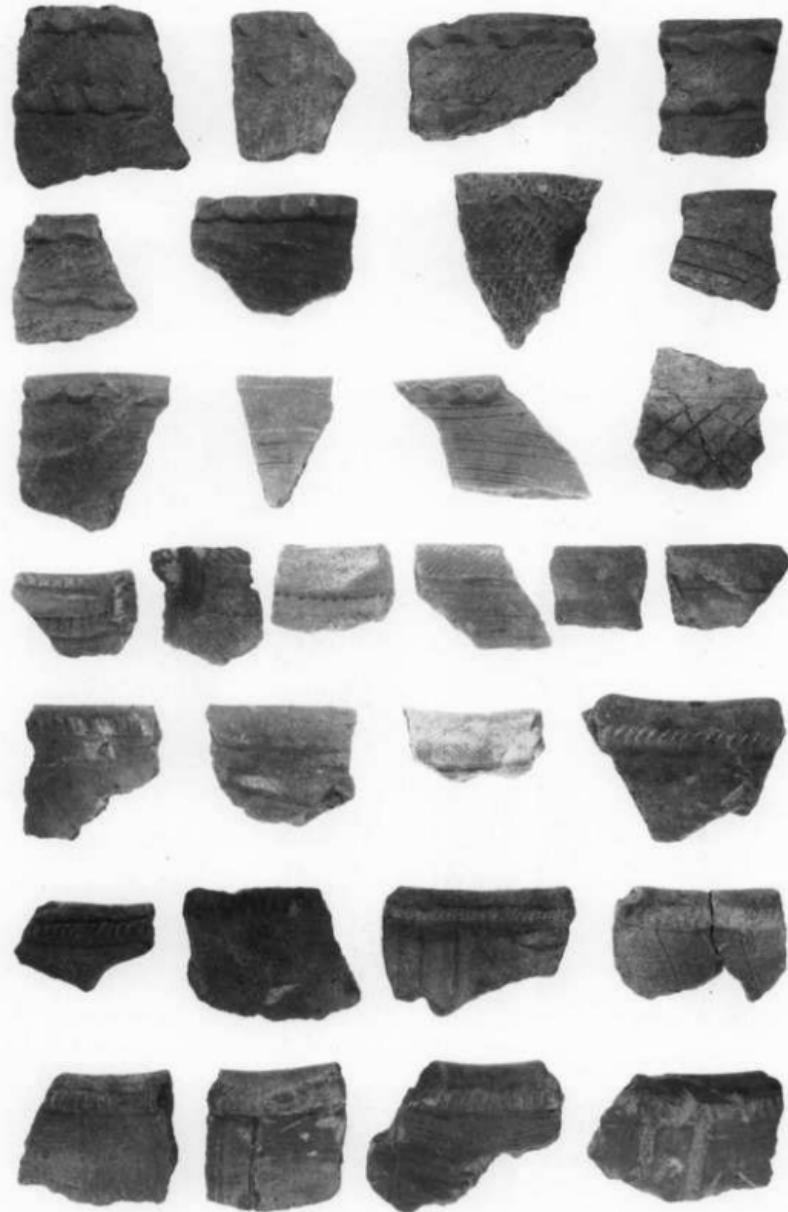


グリッド出土の縄文土器片(その 9) [第43図]



グリッド出土の縄文土器片(その10) [第44図]

図版 40



グリッド出土の縄文土器片(その11) [第45図]



1. グリッド出土の縄文土器片(その12)〔第46図 1・3・4〕



2. グリッド出土の石器(その1)

図版 42



1. グリッド出土の石器(その2)



2. グリッド出土の石器(その3)・土製品



009·017·019·026号跡出土土器

図版 44



026
10



026
11



001
1



003
1



003
2



003
6



003
10



004
2



007
3

026・001・003・004・007号跡出土土器



008
1



010
1



010
7



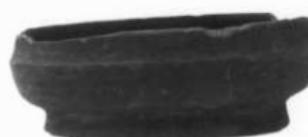
013
1



015
1



015
5



016
2



016
5



016
1

008・010・013・015・016号跡出土土器

图版 46



016·018号跡出土土器



023
1



023
3



025
1



027
1



028
1



029
1



282

柱穴
1



282
1



316
1



316
2

023·025·027·028·029·282·柱穴·316號跡出土土器

图版 48



316
3



316
4



316
5



316
6



316
7



316
8



316
9



316
10



328
2



328
3



328
4



328
6



328
7



317

316・328・317号跨出土土器



1



2



3



4
(401)



5
(402)



6
(402)



7
(504)



8
(505)



9
(508)

台地整形区画内(1~3)・豊穴状遺構(4~6)・溝(7~9)出土土器

図版 50



1



2



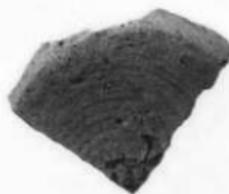
3



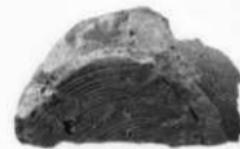
4



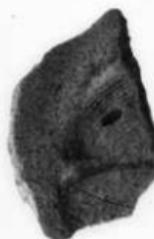
5



6



7



8

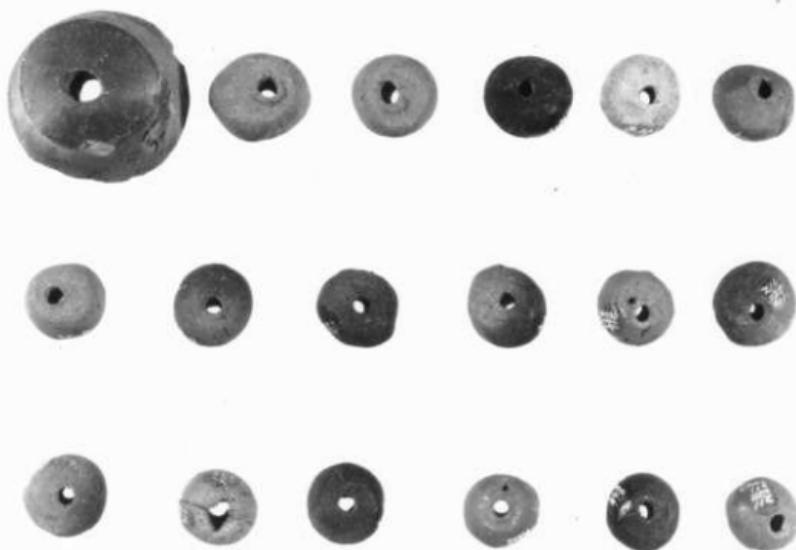


9



10

表採土器(1~8)・土製支脚(9・10)



1. 019号跡出土土製品



2. 表抹塗体(第137図 9~14)

図版 52



014
7



昭和60年3月20日 印刷
昭和60年3月30日 発行

主要地方道成田安食線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書 I

—成田市烏内遺跡—

発 行 千葉県土木部
千葉県千葉市市場町1-1

財団法人千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城2-10-1

印 刷 有限会社 正 文 社
千葉県千葉市都町2-5-5

正 誤 表

「主要地方道成田安食線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」

ページ	箇 所	誤	正
viii	11行目	(1/400)	(1/600)
6	注 1	様な遺構が発見され、	においても同様な遺構が発見されており、
52	第51図 平面図	a-a'	b'-b
		b-b'	a'-a
70	第68図		(1/80)
89	土層 8	火熱による赤色	火熱による赤色変化を受けた部分。
133	第136図	(1/400)	(1/600)
134	土器表-5	脚部は暗黄褐色	胴部は暗黄褐色
142	17行目	雲母も含み	雲母を含み